茨城県教育財団文化財調査報告第76集

主要地方道瓜連馬渡線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書

東　原　遺　跡

石伏南遺跡

平成4年3月

財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第76集

主要地方道瓜連馬渡線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書

東原（ひがしはら）遺跡
石伏南（いしぶしみなみ）遺跡

平成4年3月

財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は，産業・経済の発展に伴う交通量の増加による交通渋滞の緩和と地域の活性化をはかるため，県内の道路網の整備を進めております。主要地方道瓜連馬渡線道路改良工事もその一環として計画されたものです。改良工事地内の勝田市高野及び東海村船場には埋蔵文化財の包蔵地である東原(ひがしはら)遺跡，石伏南(いしぶしみなみ)遺跡が確認されておりました。

このたび，財団法人茨城県教育財団は，茨城県と埋蔵文化財発掘調査について委託契約を結び，平成元年10月から平成２年３月にかけて，主要地方道瓜連馬渡線道路改良工事地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

本書は，東原遺跡，石伏南遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な資料として，また，教育・文化の向上の一助として広く活用されますことを希望いたします。

なお，発掘調査及び整理にあたり，委託者である茨城県はもとより，茨城県教育委員会，勝田市教育委員会，東海村教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位から御指導，御協力を賜りましたことに対し，深く感謝の意を表します。

平成４年３月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　　礒　田　　勇

例　　言

1　本書は，平成元年度に茨城県の委託により，財団法人茨城県教育財団が発掘調査を実施した茨城県勝田市高野973番地ほかに所在する東原遺跡，同那珂郡東海村船場583-1番地ほかに所在する石伏南遺跡の発掘調査報告書である。

2　東原遺跡，石伏南遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

平成２年度初めの組織替えにより，従来の調査課（企画管理班，調査第一・二・三班，整理班）は埋蔵文化財部となり，その下に企画管理課，調査課，整理課をおき，調査課には調査第一・二・三の三つの班をおくこととなった。

理事長		礒田　勇	昭和63年６月～
副理事長		小林　元	昭和63年４月～平成３年７月
		角田　芳夫	平成３年７月～
常務理事		小林　洋	平成元年４月～平成３年３月
		本田　三郎	平成３年４月～
事務局長		一木　邦彦	平成元年４月～
埋蔵文化財部長		石井　毅	平成２年４月～
企画管理課	課長	北沢　勝行	平成２年４月～
	課長代理	水飼　敏夫	平成２年４月～（昭和62年４月～平成２年３月企画管理班長）
	主任調査員	小河　邦男	（平成元年４月～平成２年３月　企画管理班）
	主任調査員	小山　映一	平成２年４月～平成３年３月
	主任調査員	根本　康弘	平成３年４月～
	係長	園部　昌俊	昭和63年４月～平成３年３月
	主事	飯島　康司	平成３年４月～
	主事	大部　章	（昭和61年４月～平成２年３月　企画管理班）
	主事	吉井　正明	平成元年４月～
	主事	大貫　吉成	平成２年４月～
調査課	課長（部長兼務）	石井　毅	平成元年４月～
	調査第三班長	倉本冨美男	平成元年度
	主任調査員	高村　勇	平成元年度調査
	調査員	上野　修生	平成元年度調査
整理課	課長	沼田　文夫	平成２年４月～
	主任調査員	上野　修生	平成３年度　整理・執筆・編集

3　本書に使用した記号等については，第３章の遺構・遺物の記載方法の項を参照されたい。

4　発掘調査及び整理に際して，御指導・御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し，深く感謝の意を表する次第である。

目　　次

序
例　言
第１章　調査経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査方法 …… 1
　　1　地区設定 …… 1
　　2　基本層序の検討 …… 2
　　3　遺構確認 …… 3
　　4　遺構調査 …… 3
　第３節　調査経過 …… 4
第２章　位置と環境 …… 6
　第１節　地理的環境 …… 6
　第２節　歴史的環境 …… 7
第３章　遺構・遺物の記載方法 …… 11
　第１節　遺構・遺物の記載方法 …… 11
　第２節　表の見方について …… 13
第４章　東原遺跡 …… 17
　第１節　遺跡の概要 …… 17
　第２節　遺構と遺物 …… 17
　　1　竪穴住居跡 …… 17
　　2　土坑 …… 49
　　3　溝 …… 53
　　4　井戸 …… 59
　　5　その他の遺物 …… 61
　　(1)　遺構外出土土器 …… 61
　　(2)　石器・石製品，土製品，金属製品，古銭 …… 63
　第３節　考察 …… 70
　　1　竪穴住居跡と出土土器について …… 70

第５章　石伏南遺跡 …… 78
第１節　遺跡の概要 …… 78
第２節　トレンチによる土層観察 …… 78
第３節　出土遺物 …… 80
1　トレンチ出土土器 …… 80
2　石器，鉄製品 …… 81
第４節　考察 …… 81
結　語 …… 82
写真図版

挿図目次

第１図　調査区呼称方法概念図…… 2
第２図　東原遺跡土層柱状図…… 2
第３図　石伏南遺跡土層柱状図…… 3
第４図　東原遺跡・石伏南遺跡周辺遺跡
　　位置図…… 9
〈東　原　遺　跡〉
第５図　東原遺跡全体図……16
第６図　第１号住居跡実測図……18
第７図　第１号住居跡出土土器実測図……19
第８図　第２号住居跡実測図……20
第９図　第３号住居跡実測図……21
第10図　第４号住居跡実測図……22
第11図　第４号住居跡竈実測図……23
第12図　第４号住居跡出土土器実測図……24
第13図　第５号住居跡実測図……26
第14図　第５号住居跡竈実測図……27
第15図　第５号住居跡出土土器実測図……28
第16図　第６号住居跡実測図……29
第17図　第６号住居跡竈実測図……30
第18図　第６号住居跡出土土器実測図……31
第19図　第７号住居跡実測図……33
第20図　第７号住居跡竈実測図……34
第21図　第７号住居跡出土土器実測図……34
第22図　第８号住居跡・竈実測図……36
第23図　第８号住居跡出土土器実測図……37
第24図　第９号住居跡実測図……38
第25図　第９号住居跡竈実測図……39
第26図　第９号住居跡出土土器実測図……39
第27図　第10号住居跡・竈実測図……40
第28図　第10号住居跡出土土器実測図……41
第29図　第11号住居跡・竈実測図……42
第30図　第11号住居跡出土土器実測図……43
第31図　第12号住居跡実測図……44
第32図　第12号住居跡竈実測図……45
第33図　第12号住居跡出土土器実測図(Ⅰ)46
第34図　第12号住居跡出土土器実測図(Ⅱ)47
第35図　第13号住居跡実測図……49
第36図　土坑実測図(Ⅰ)……51
第37図　土坑実測図(Ⅱ)……52
第38図　第２・３号土坑出土土器実測図…52
第39図　第１－Ａ・１－Ｂ・２・３・４号
　　溝実測図……53～54
第40図　第１－Ａ号溝出土土器実測図……56
第41図　第２号溝出土土器実測図……56
第42図　第３号溝出土土器実測図……57
第43図　第４号溝出土土器実測図……59
第44図　第１号井戸実測図……60
第45図　第１号井戸出土土器実測図……60
第46図　遺構外出土土器拓影図……61
第47図　遺構外出土土器実測図……62
第48図　石器・石製品実測図(Ⅰ)……65
第49図　石器・石製品実測図(Ⅱ)……66
第50図　石器実測図(Ⅲ)……67
第51図　土製品実測図……68
第52図　金属製品実測図……69
第53図　古銭拓影図……69
第54図　東原遺跡住居跡分布図……70
第55図　東原遺跡住居跡規模・主軸方向…72
第56図　Ⅰ期出土土器実測図……72
第57図　Ⅱ期出土土器実測図……75

〈石　伏　南　遺　跡〉
第58図　石伏南遺跡全体図……77
第59図　第5・8・9・11・12・14・16号トレンチ土層断面図……79
第60図　トレンチ出土土器拓影図……80
第61図　石器，鉄製品実測図……81

表　目　次

表1　東原遺跡・石伏南遺跡周辺遺跡一覧表……10
＜東　原　遺　跡＞
表2　東原遺跡土坑一覧表……52
表3　石器・石製品一覧表……63～64
表4　土製品一覧表……68
表5　金属製品一覧表……68
表6　古銭一覧表……69
表7　東原遺跡住居跡一覧表……76
＜石　伏　南　遺　跡＞
表8　石器一覧表……81
表9　鉄製品一覧表……81

写真図版目次

＜東　原　遺　跡＞
ＰＬ1　東原遺跡全景
ＰＬ2　調査前全景，遺構確認状況，第1号住居跡
ＰＬ3　第2・3・4号住居跡
ＰＬ4　第5・6号住居跡，第6号住居跡遺物出土状況
ＰＬ5　第7・8・9号住居跡
ＰＬ6　第10・11・12号住居跡
ＰＬ7　第12号住居跡竈・遺物出土状況，第13号住居跡
ＰＬ8　第1・2・3・4・5・6・7号土坑，第1号井戸
ＰＬ9　第2・3・4号溝，第1-A・B・3号溝遺物出土状況，作業風景，調査後全景
ＰＬ10　第1・4号住居跡出土土器
ＰＬ11　第5・6号住居跡出土土器
ＰＬ12　第7・8・9・10・11号住居跡出土土器
ＰＬ13　第12号住居跡出土土器
ＰＬ14　第2号土坑・第1号井戸・第1-A・3・4号溝・遺構外出土土器，土製品
ＰＬ15　石器・石製品，金属製品，古銭，竹
＜石　伏　南　遺　跡＞
ＰＬ16　調査前全景，第11号トレンチ土層，調査後全景（北から，南から），トレンチ出土土器，石器，鉄製品

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経過

主要地方道瓜連馬渡線は,国道118号との分岐点である那珂郡瓜連町中里を起点とし，同郡那珂町中心部，勝田市北部を通過し，勝田市馬渡に至る道路である。本道路は，幅員の狭い箇所が多く，近年の交通量の増加に対応できなくなってきている。今後，常陸那珂港の開港に伴い，常陸那珂港と常磐自動車道を結ぶアクセス道路として慢性的な交通渋滞が予想される。そこで，茨城県は，交通量の緩和と道路網の整備を図るため，主要地方道瓜連馬渡線道路改良工事を計画した。

工事に先立ち，茨城県(土木部道路建設課)は，昭和63年9月26日に茨城県教育委員会あてに，工事予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会した。これに対し，茨城県教育委員会は10月7日に現地踏査を実施し，工事予定地内に東原遺跡，石伏南遺跡の2遺跡の存在を確認し，茨城県に回答した。平成元年1月14日に，茨城県と茨城県教育委員会は，埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた結果，現状保存については困難との判断に達し，記録保存の措置を講ずることとなった。茨城県教育委員会は，調査機関として茨城県教育財団を紹介した。茨城県教育財団は，茨城県と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を締結し，平成元年10月1日から，東原遺跡(7,372㎡)と石伏南遺跡(2,797㎡)の発掘調査を実施することとなった。

第2節　調査方法

1　地区設定

東原遺跡，石伏南遺跡の発掘調査を実施するにあたり，遺跡及び遺構の位置を明確にするため調査区を設定した。

調査区の設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系，X軸(南北)・Y軸(東西)を基準点として，40m方眼を設定し，この40m四方の区画を大調査区(大グリッド)とした。さらにこの大調査区を東西，南北に各々十等分して，4m四方の小調査区(小グリッド)を設定した。

調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用いて表記した。まず，大調査区の名称は，北から南へ「A」・「B」・「C」……，西から東へ「1」・「2」・「3」……とし，その組み合わせで「A1区」，「B2区」……のように呼称した。さらに，大調査区を4m方眼に100分割した小調査区をそれぞれ同様に，北から南へ「a」・「b」・「c」…「j」，西から東へ「$_1$」・「$_2$」・「$_3$」…「$_9$」・「$_0$」と小文字を付した。各小調査区の名称は，大調査区の名称と

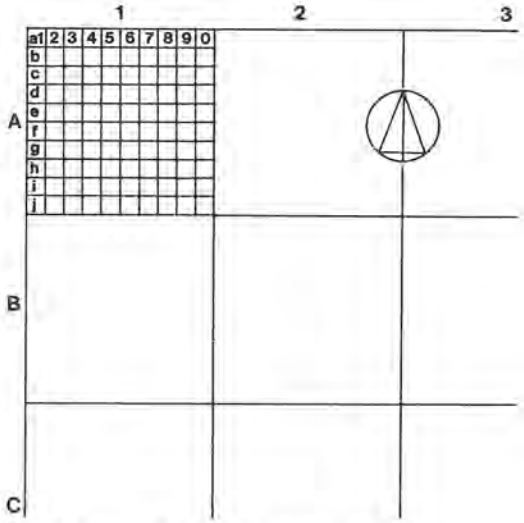
合わせて，「A1a1区」・「B2b2区」のように呼称した。

なお，基準点の杭打ち測量は，財団法人茨城県建設技術公社に委託した。

両遺跡における基準点の座標は，次のとおりである。

(1) 東原遺跡　X軸(南北)＋48,200 m
　　Y軸(東西)＋64,720 m

(2) 石伏南遺跡　X軸(南北)＋49,760 m
　　Y軸(東西)＋64,120 m



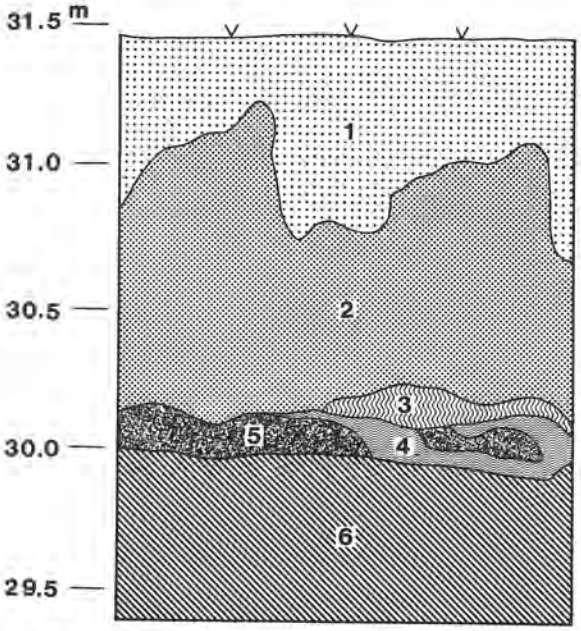
第1図　調査区呼称方法概念図

2　基本層序の検討

(1) 東原遺跡

東原遺跡においては，調査区域の北部C3b6区にテストピットを設定し，深さ2mまで掘り下げ，第2図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は，22～86cmの厚さを有する耕作土である。第2層は，58～110cmの厚さを有する黄褐色土である。第3層は，4～16cmの厚さを有する黄褐色土で，粘土ブロックを中量含んでいる。第4層は，4～24cmの厚さを有するオリーブ褐色土で，パミスを多量に含んでいる。第5層は，6～18cmの厚さを有し黄橙色を呈する鹿沼パミス層である。第6層は，60cm程の厚さを有し黄褐色を呈するハードローム層である。

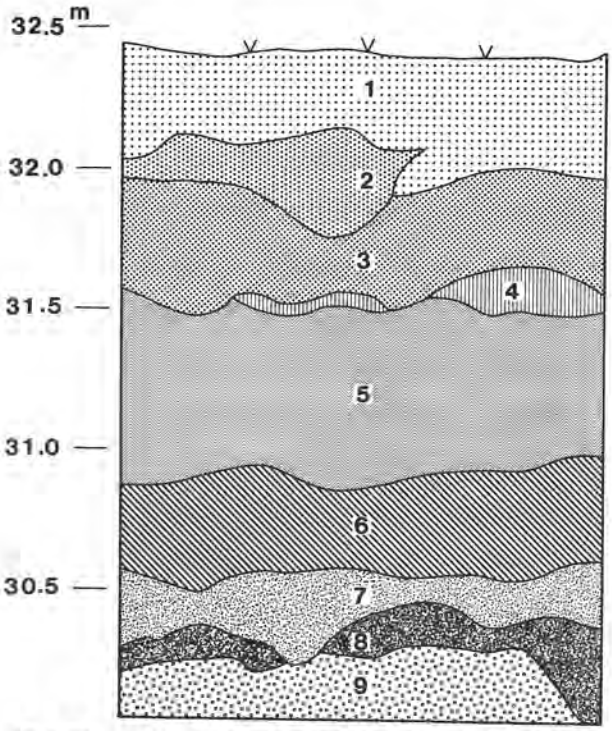


第2図　東原遺跡土層柱状図

(2) 石伏南遺跡

石伏南遺跡においては，調査区域の北西部にテストピットを設定し，深さ2.4mまで掘り下げ，第3図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は，32～44cmの厚さを有する表土である。第2層は，8～36cmの厚さを有し，ローム粒子を少量含む暗褐色土である。第3層は，20～46cmの厚さを有し，ローム粒子を少量含む，やや締まりのある黒色土である。第4層は，6～16cmの厚さを有し，黒色土を少量含む黄褐色土である。第5層は，56～70cmの厚さを有するソフトローム層である。第6層は，28～40cmの厚さを有するハードローム層である。第7層は，パミスを中量含む締まりのある黄褐色土である。第8層は，10～16cmの厚さを有する鹿沼パミス層である。第9層は，パミスと粘土ブロックを少量含み，褐色を呈している。



第3図　石伏南遺跡土層柱状図

3　遺構確認

東原遺跡の遺構確認は，次のような方法で実施した。まず，調査区全域にグリッドを設定し，調査面積の16分の1，次いで8分の1の割合で試掘を行い，遺構の確認を試みた。その結果，縄文式土器や土師器や須恵器の破片が出土し，住居跡や土坑と思われる落ち込みが確認された。表土の厚さは20～90cmであることも判明した。この試掘の結果をふまえ，調査区域全面の表土除去を行った。表土除去は，調査区域の北側部分を人力で，残りの部分は重機を導入して行った。表土除去後，遺構確認作業を行い，住居跡13軒，土坑7基，溝5条，井戸1基を確認した。

石伏南遺跡の遺構確認は，次のような方法で実施した。道路用地の中心杭をもとにしてトレンチを設定し，調査面積の16分の1，次いで8分の1の割合で試掘を行い，遺構の確認を試みた。

その結果，縄文式土器や土師器の破片が少量出土しただけで，住居跡等の落ち込みは確認できなかった。

4　遺構調査

東原遺跡における遺構の調査は，次の方法で行った。

住居跡の調査は，平面プラン確認後，遺構の中央部で直交するように土層観察用ベルトを２本設定して四分割し，それぞれを掘り込む「四分割法」で実施した。それぞれの地区の名称は，北から時計回りに１～４区とした。重複している場合には，新旧関係が把握できるような位置にベルトを設定した。土坑の調査は，長径方向で二分割して掘り込む「二分割法」で実施した。溝の調査は，長さに応じて数か所の土層観察用ベルトを設けて掘り込みを実施した。

土層については，色相，含有物の多少・大小，粘性，締まり具合等を観察して，分類の基準とした。色相については，「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著，日本色研事業株式会社発行)を使用して観察記録した。

遺物は，現位置を保って遺構を掘り下げた後，住居跡，土坑，溝等の名称と出土地区の名称，取り上げ番号，レベル等を記録して収納した。

遺構や遺物の平面実測は，水糸方眼地張り測量で行い，土層断面や遺構断面の実測は，標高をもとに水平にセットした水糸を基準にして実測した。縮尺は20分の１を基本としたが，竈や部分的な微細図については10分の１の縮尺で作成した。

調査の記録は，土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順で行うことを基本とした。図面や写真に記録できない事項に関しては，野帳及び調査記録カードに記録し，さらに遺構カードに整理した。遺構番号は，調査順に付していった。

第３節　調査経過

東原遺跡，石伏南遺跡の発掘調査は，平成元年10月１日から平成２年３月31日までの６か月にわたって実施した。調査は石伏南遺跡から開始した。以下，調査の経過について，その概要を月ごとに記述する。

10　月　２日，現地踏査を行う。３日，発掘調査に必要な現場事務所と倉庫を設置し，調査を開始するための諸準備を行う。11日には発掘器材を搬入した。16日から石伏南遺跡調査区内の清掃・焼却等の作業を開始した。17日に石伏南遺跡に於いて，二遺跡の発掘調査の円滑な推進と作業の安全を祈って，鍬入れ式を挙行した。23日から石伏南遺跡調査区の中央部と南部の試掘を開始した。土器片が少量出土したが，住居跡等の落ち込みは確認できなかった。

11　月　６日からは試掘トレンチの土層断面図作成と調査区北部の山林部分の伐開を並行して行った。伐開終了後，試掘を開始したが，遺構らしき落ち込みは確認できなかった。テストピットにより，土層の観察を行い，次いで試掘トレンチの土層断面図を作成した。

12　月　試掘完了状況を撮影し，試掘トレンチの埋め戻しを行い，調査区南部の一部を残し，一旦，石伏南遺跡の調査を中断した。15日には発掘器材等を東原遺跡へ搬出した。

18日からは，東原遺跡調査区の試掘を開始した。調査は26日まで実施し，翌27日から1月4日までは年末年始の休業日とした。

1　月　調査区北端部より，人力による表土除去と遺構確認を開始した。24日からは，調査区中央部から南部に向かって重機による表土除去を開始し，並行して遺構確認作業を行った。その結果，住居跡13軒，土坑7基，溝5条，井戸1基を確認した。

2　月　調査区北端部に確認された住居跡，土坑から調査を開始し，南側に向かって調査を進めていった。住居跡からは土師器の坏・甕，須恵器の坏・甕・蓋等が出土した。14日，基準杭打ち(茨城県建設技術公社)を実施した。

3　月　引き続き，住居跡，土坑，溝の調査を進めていった。15日には航空写真撮影を実施した。17日，東原遺跡において現地説明会を開催し，遺構，遺物を一般に公開した。説明会には，117名の見学者が訪れた。19日からは，補足調査を開始した。23日には石伏南遺跡の未調査部分の試掘を実施したが，遺構は確認されなかった。調査器材類や遺物の搬出，事務所と倉庫の撤去を行い，31日には，一切の調査を終了した。

作業風景

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

東原遺跡は，勝田市高野973番地ほかに所在している。当遺跡の所在する勝田市は，茨城県のほぼ中央部東端に位置し，県都・水戸市からは北東へ約７㎞である。市域は，東西約11.5㎞，南北約12.8㎞であり，面積は74.34㎢，人口は111,472人(平成３年10月現在)である。市の東は那珂湊で，北側には比較的大きな谷津が入り込んでいる。台地は畑地として，谷津は水田となっている。人口は31,582人(平成３年10月現在)である。北は久慈川を隔てて日立市に，西は那珂郡那珂町に，

市の中央部をＪＲ常磐線，西部を国道６号，東部を国道245号が並行して南北に縦走するほか，ＪＲ勝田駅を起点に那珂湊市と結ぶ湊鉄道が東行している。

当市は，昭和16年，日立製作所水戸工場がこの地に進出して以来，電気機器を中心とした工業都市として発展し，現在でも第二次産業が市の中心産業で，県内では日立市に次ぐ工業都市である。農業は，キュウリ，スイカの栽培をはじめとする都市型近郊農業が盛んである。

市内の地形を見ると，市南端を北北西から東南東へ流れる那珂川流域を除く市の大部分は標高30ｍ前後の那珂台地と呼ばれる平坦な洪積台地で，畑地や山林となっている。この台地には，那珂川の支流の中丸川，本郷川，大川，早戸川などの小河川が樹枝状に入り込んでいる。那珂川や中丸川，本郷川，大川，早戸川の流域の沖積低地は水田となっている。

市内周辺の地質は，第三紀層(凝灰岩)を基盤とし，その上に第四紀洪積層がある。この上は粘土層や砂礫層に覆われ，さらにその上にローム層が堆積している。

東原遺跡は，調査面積は7,372㎡で，勝田市の北端部に位置し，勝田市役所から北東へ約５㎞，ＪＲ常磐線佐和駅から北東へ約1.5㎞の距離にある。遺跡の南側一帯は標高30ｍ前後の平坦な台地で，北側には比較的大きな谷津が入り込んでいる。台地は畑地として，谷津は水田となっている。水田面との比高は約20ｍである。現況は畑地である。

石伏南遺跡は，那珂郡東海村船場583-1番地ほかに所在している。当遺跡の所在する東海村は，茨城県中央部の北東端に位置する。村域は，東西約6.6㎞，南北約7.5㎞であり，面積は35.44㎢，人口は31,582人(平成３年10月現在)である。北は久慈川を隔てて日立市に，西は那珂郡那珂町に，南は勝田市に隣接し，東は太平洋に面している。

東海村は，十三詣りの村松虚空蔵尊があることで知られていたが，原子力研究所が建設されてからは，日本の原子力研究の発祥地として世界的に知られるようになった。水戸市と日立市の中間に位置することから，都市化し，人口が増加している。

村内の地形を見ると，北端の久慈川流域と南端の新川流域は，沖積低地で水田となっており，西は標高20～35ｍの那珂台地で，畑地や山林となっている。台地の層序は，多賀層を基盤とし，この上位に見和層上部が重なり，さらにその上に粘土層，ローム層と続く。東は太平洋に面して砂丘が形成されており，松の砂防林が多く見られる。

石伏南遺跡は，調査面積は2,797㎡で，東海村の南西部に位置し，東海村役場から南西へ3.3km，ＪＲ常磐線東海駅から南西へ2.6kmの距離にある。当遺跡は南東に向かって緩やかに傾斜している標高30～35ｍの台地上に立地しており，現況は畑地・山林である。

参考文献

勝田市　「勝田市史　別編Ⅱ　考古資料編」　1979年

第２節　歴史的環境

「茨城県遺跡地図[1]」によれば，東原遺跡の所在する勝田市には211の遺跡が，石伏南遺跡の所在する東海村には163の遺跡が確認されている。その中で報告されている主な遺跡を時代別に述べてみる。

先土器時代の遺跡としては，勝田市の後野遺跡[2]〈１〉がある。那珂川支流の本郷川に沿う台地上にあり，Ｂ地区からは細石刃，Ａ地区からは大型石刃を主体とする石器群が出土している。同市では，そのほか，向野遺跡〈２〉や原山遺跡〈３〉が知られている。

縄文時代の遺跡は，勝田市では市域全体に分布しているが，おおむね那珂川水系に集中している。三反田字蜆塚（しいづか）[3]〈４〉では，人骨８体をはじめ，前期から後期にわたる土器，石鏃・石匙・石錘・石皿・石斧・石棒・石剣などの石器，釣針・骨針などの骨角器，土製品，貝製品などが出土している。そのほか，原山遺跡(早・前期)，津田遺跡(早・前・中期)，遠原遺跡(前期)〈５〉，天神山遺跡（中期），館出遺跡（中期)〈６〉，君ケ台遺跡（中・後期)〈７〉がある。東海村では，西ノ妻遺跡（早期)〈31〉，庚塚遺跡（前期)〈32〉，堀米（ほっこめ）遺跡（中期)〈33〉，平原（へばら）Ａ貝塚（中・後期)〈34〉が知られており，いずれも，東北地方の影響を受けた土器が見られる。

弥生時代の遺跡としては，勝田市の東中根遺跡[4]〈８〉があり，弥生後期の壺形土器をはじめ，甕・鉢・高坏などの土器が出土し，東中根式土器と命名されている。同時期の遺跡は，那珂川北岸地域を中心に分布している。同じ後期でもこの時期に続く十王台式に属する遺跡として，本郷西遺跡〈９〉，岡田遺跡〈10〉，堀口遺跡〈11〉などがある。東海村では，部原（ぶはら）遺跡[5]〈35〉から入口の施設を有する住居跡等が発見されている。須和間遺跡[6]〈36〉では，住居跡が検出されたほか，ほぼ完形の弥生式土器が３点出土している。石神外宿（いしがみとじゅく）Ｂ遺跡[7]〈37〉からは，２軒の住居跡が検出されたほか，

広口壺形土器や紡錘車が出土している。

古墳時代の遺跡としては，勝田市の馬渡埴輪製作跡[8]〈12〉と虎塚古墳[9]〈13〉がある。馬渡埴輪製作跡では，埴輪窯跡19基のほか工房跡，埴輪集積場，住居跡，粘土採掘坑などが確認されている。工房跡からは，人物・動物の埴輪をはじめ，円筒埴輪，土器，鍬先とみられる鉄器などが出土している。虎塚古墳は中型の前方後円墳で，横穴式石室内に壁画をもっている。壁画の内容は，円文・三角文を主体とし，大刀・靫・楯やその他の馬具と思われる図文を組み合わせている。同時期の集落跡としては，高野寺畑遺跡〈14〉，筑波台遺跡〈15〉，堀口遺跡などがある。東海村では，須和間遺跡[10]の調査で方形周溝墓・円形周溝墓が検出されている。古墳群としては，真崎古墳群〈38〉，須和間古墳群〈39〉，石神外宿古墳群〈40〉等がある。真崎10号墳[11]は，横穴式石室を有する円墳で，直刀・鉄鏃・馬具・棗玉等が出土した。集落跡としては，小沢野遺跡〈41〉，塚越遺跡〈42〉等がある。

奈良・平安時代の遺跡としては，勝田市の高野寺畑遺跡[12]があり，奈良時代と推定される住居跡27軒が検出されている。そのほか遠原遺跡，堀口遺跡，筑波台遺跡，東原遺跡〈16〉等がある。原の寺瓦窯跡[13]〈17〉からは，数点の文字瓦が出土し，十五郎穴横穴墓群[14]〈18〉の横穴墓総数は300基に及ぶ。東海村では，石神外宿A遺跡[15]〈43〉から奈良・平安時代の住居跡が検出された。この時期の遺跡としては，ほかに釜付遺跡〈44〉，小沢野遺跡等がある。

中世以降の城館跡としては，勝田市の奥山館跡〈19〉，多良崎城跡〈20〉，武田館跡〈21〉，東海村の石神城跡〈45〉，真崎城跡〈46〉等がある。

以上のように，勝田市と東海村には古代から中世にかけての多くの遺跡が存在している。

※　文中の＜　＞の番号は，表1，第4図中の該当遺跡番号と同じである。

注・引用参考文献

(1)　茨城県教育委員会　「茨城県遺跡地図」　1990年

(2)　勝田市教育委員会　「後野遺跡」　1976年

(3)(4)(8)(9)(12)(13)(14)　勝田市教育委員会　「勝田市史」原始・古代編　1981年

(5)　東海村教育委員会　「常陸部原遺跡」　1982年

(6)(10)　茨城県　「茨城県史料　考古資料編－弥生時代」　1991年

(7)(15)　茨城県教育財団　「二本松古墳・石神外宿A遺跡・石神外宿B遺跡」茨城県教育財団文化財調査報告第23集　1983年

(11)　茨城県　「茨城県史料　考古資料編－古墳時代」　1974年

第４図　東原遺跡・石伏南遺跡周辺遺跡位置図

表1　東原遺跡・石伏南遺跡周辺遺跡一覧表

図中番号	遺跡名	遺跡の時代						図中番号	遺跡名	遺跡の時代					
		先土器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世			先土器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世
1	後野遺跡	○						31	西ノ妻遺跡		○			○	
2	向野遺跡	○	○					32	庚塚遺跡		○				
3	原山遺跡	○	○	○		○		33	堀米遺跡		○				
4	三反田字蜆塚		○	○	○			34	平原A貝塚		○				
5	遠原遺跡	○	○		○	○		35	部原遺跡		○	○			
6	館出遺跡		○	○	○	○		36	須和間遺跡			○	○		
7	君ケ台遺跡	○	○	○	○	○		37	石神外宿B遺跡			○	○		
8	東中根遺跡		○	○	○	○		38	真崎古墳群				○		
9	本郷西遺跡			○	○	○		39	須和間古墳群				○		
10	岡田遺跡		○	○	○	○		40	石神外宿古墳群				○		
11	堀口遺跡			○	○	○		41	小沢野遺跡		○		○	○	
12	馬渡埴輪製作跡		○	○	○			42	塚越遺跡			○	○	○	
13	虎塚古墳群				○			43	石神外宿A遺跡				○	○	
14	高野寺畑遺跡		○	○	○	○		44	釜付遺跡		○			○	
15	筑波台遺跡			○	○	○		45	石神城跡						○
16	東原遺跡		○			○		46	真崎城跡						○
17	原の寺瓦窯跡					○		47	柳井戸遺跡		○	○			
18	十五郎穴横穴墓群				○	○		48	下諏訪A遺跡			○			
19	奥山館跡						○	49	下諏訪B遺跡		○				
20	多良崎城跡						○	50	下諏訪C遺跡		○				
21	武田館跡						○	51	下諏訪南遺跡		○		○		
22	清水館跡						○	52	東山南遺跡		○		○		
23	高野富士山遺跡		○		○	○		53	宮脇遺跡				○		
24	神田遺跡		○		○	○		54	遠西遺跡		○	○			
25	小貫山遺跡	○						55	遠間遺跡					○	
26	寺畑古墳群				○			56	中曽根遺跡		○		○	○	
27	孫目B遺跡				○	○		57	西田遺跡			○			
28	新地館跡						○	58	八枚割遺跡			○			
29	二ツ森古墳群				○			59	石伏北遺跡		○	○			
30	内城跡						○	60	石伏南遺跡		○			○	

第３章　遺構・遺物の記載方法

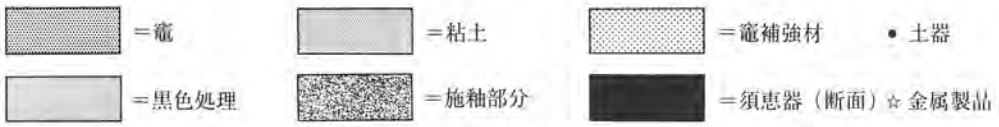
第１節　遺構・遺物の記載方法

本書における遺構・遺物の記載方法は，下記の要領で統一した。

(1)　使用記号

名称	竪穴住居跡	土坑	溝	井戸	ピット	土器	土製品	石器・石製品	金属製品
記号	ＳＩ	ＳＫ	ＳＤ	ＳＥ	P_1，P_2	Ｐ	ＤＰ	Ｑ	Ｍ

(2)　遺構・遺物の表示方法



(3)　遺構番号

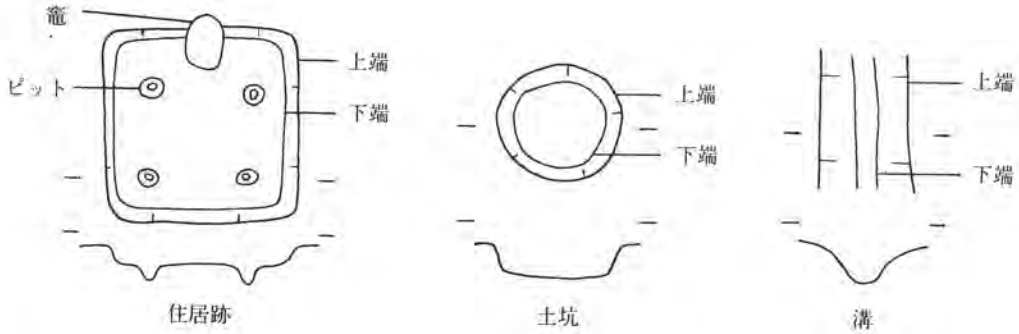
遺構番号については，調査の過程において遺構の種別毎，調査順に付したが，整理の段階で遺構でないと判断したものは，欠番とした。

(4)　土層の分類

各遺構における堆積土の土層については，調査時に，含有物，色調，粘性及び締まり具合などを観点として線引きし観察記録を行った。

なお，色調については「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著，日本色研事業株式会社発行）を使用し，図版実測図中に土層解説を記載した。

(5)　遺構実測図の記載方法



①　住居跡は，縮尺20分の１の原図をトレースして版組みし，それをさらに３分の１または４分の１に縮小して掲載した。

②　土坑は，縮尺20分の１の原図をトレースして版組みし，それをさらに３分の１に縮小して掲

載した。

③　竈は，10分の１の原図をトレースして版組みし，それをさらに３分の１・４分の１に縮小して掲載した。

④　溝は，縮尺20分の１の原図を２分の１に縮小し，トレースして版組みし，それを適宜に縮小して掲載した。

⑤　実測図中のレベルは標高であり，ｍ単位で表示した。

また，同一図中で同一標高の場合に限り一つの記載で表し，標高が異なる場合は各々表示した。

⑥　本文中の住居跡の記載について

○「位置」は，遺構が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。

○「重複関係」は，住居跡の切り合い関係を記した。

○「平面形」は，壁の上端部で判断し，方形・長方形の場合は下記の分類基準を設け，そのいずれかを明記した。〔　〕を付したものは，推定を表す。

方形（短軸：長軸＝１：1.1未満），長方形（短軸：長軸＝１：1.1以上）

○「規模」は，壁の上端部の計測値であり，長軸，短軸の順にｍ単位で表記した。（　）を付したものは現存値を示す。

○「主軸方向」は，竈を通る線を主軸として，その主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ傾いているかを角度で表示した。〔　〕を付したものは，推定を表す。

○「壁」は，床面からの立ち上がり角度が81°～90°を垂直，65°～80°を外傾，65°未満を緩傾，さらに90°以上を内傾とした。壁高は，残存壁高の計測値である。

○「壁溝」は，その形状や規模を記述した。

○「床」は，形状や床質等を記載した。

○「ピット」は，その住居跡に伴うと考えられるピットをＰで表示し，P_1・P_2はピット番号を表し，さらに，ピットの直径と深さを記述した。

○「覆土」は，堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」，人為堆積の場合は「人為」，撹乱を受けている場合は「撹乱」と記した。

○「遺物」は，主な遺物の種類や出土位置，出土地点等を記述した。

また，遺構の平面図中に(2)で示した記号を用い，出土位置をドットで表示し，接合できたものは実線で結んだ。出土遺物に付した番号は，遺物実測図及び拓影図の番号と符合する。

○「所見」は，当該住居跡についての時期やその他特記すべき事項を記述した。

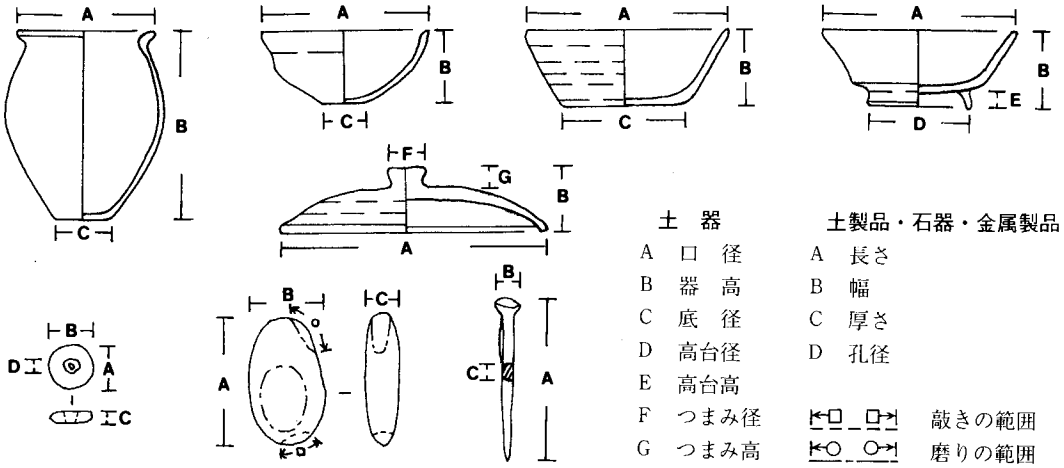
(6)　遺物実測図の記載方法

遺跡から出土した遺物については，実測図・拓影図・写真等により掲載した。

① 土器の実測図は，原則として中心線の左側に外面，右側に内面と断面を図示した。

② 土器拓影図は，右側に断面を図示した。

③ 遺物は，原則として実測図をトレースしたものを３分の１に縮小して掲載した。しかし，種類や大きさにより異なる場合もある。



第２節　表の見方について

１　住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	柱穴数	竈	覆土	出土遺物	備考
				長軸(m)×短軸(m)	壁高(cm)						

① 位置は，遺構が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。

② 主軸方向は，座標北をＮ－０°とし，東(Ｅ)・西(Ｗ)に何度傾いているかを表示した。

（例　Ｎ－10°－Ｅ，Ｎ－10°－Ｗ）〔　〕を付したものは推定値である。

③ 平面形は，現存している形状の上端面で判断し，方形・長方形の場合は下記の分類基準を設け，そのいずれかを明記した。

方形（短軸：長軸＝１：1.1未満），長方形（短軸：長軸＝１：1.1以上）

④ 規模の欄の長軸・短軸は，上端の計測値であり，壁高は残存壁高の計測値である。

⑤ 床面は，平坦，凹凸，皿状及び緩い起伏とに分類して表記した。

⑥ 柱穴数は，平面図中に表示されたピットの中からその住居跡に伴うと思われる柱穴の本数を記した。

⑦ 竈は，つくられている壁の方向を表示した。なお，竈が検出されない場合は空欄とした。

⑧ 覆土は，自然堆積のものは「自然」，人為堆積のものは「人為」，撹乱を受けているものは

「撹乱」と表記した。

⑨　出土遺物は，実測個体数を除いた遺物の種類と，出土土器片の数を記した。

⑩　備考は，重複関係等について記した。

2　土坑一覧表

土坑番号	位　置	長径方向(長軸方向)	平面形	規　模（m）		壁　面	底　面	覆　土	出土遺物	備　考	図　版　番　号
				長径×短径(長軸×短軸)	深　さ						

①　土坑番号は，発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。

②　平面形は，掘り込み上面の形状を記した。

　　円形（短径：長径＝1：1.2未満）　楕円形（短径：長径＝１：1.2以上）

③　規模の欄の長径・短径は，上端部の計測値(ｍ)で表した。

④　壁面は，坑底からの立ち上がりの状態を簡潔に記した。

⑤　その他の項目については，住居跡一覧表の記載方法に準じた。

3　出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考

①　図版番号は，実測図中の番号である。写真図版にもこの番号を用いた。

②　法量は，Ａ－口径　Ｂ－器高　Ｃ－底径　Ｄ－高台径　Ｅ－高台高，単位はcmである。現存値には(　)，推定値には〔　〕を付した。

③　胎土・色調・焼成の欄は，上から胎土，色調及び焼成の順で記した。色調については，前節の土層の分類と同じ土色帖を使用した。焼成については，焼き締まって硬いものは良好，焼成があまく手でこすると器面が剝落するものを不良とし，その中間のものを普通とした。

④　備考の欄は，土器の残存率，実測(Ｐ)番号，出土位置，その他必要と思われる事項を記した。

4　土製品一覧表

図版番号	器　種	法　量				出土地点	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(ｇ)		

①　図版番号は，実測図中の番号である。写真図版にもこの番号を用いた。

②　重量の欄で，(　)を付した数値は，一部を欠損しているものの現存値である。

5　石器・石製品一覧表

図版番号	器　種	法　　量				石　質	出土地点	台帳番号	備　　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				

① 図版番号は，実測図中の番号である。写真図版にもこの番号を用いた。

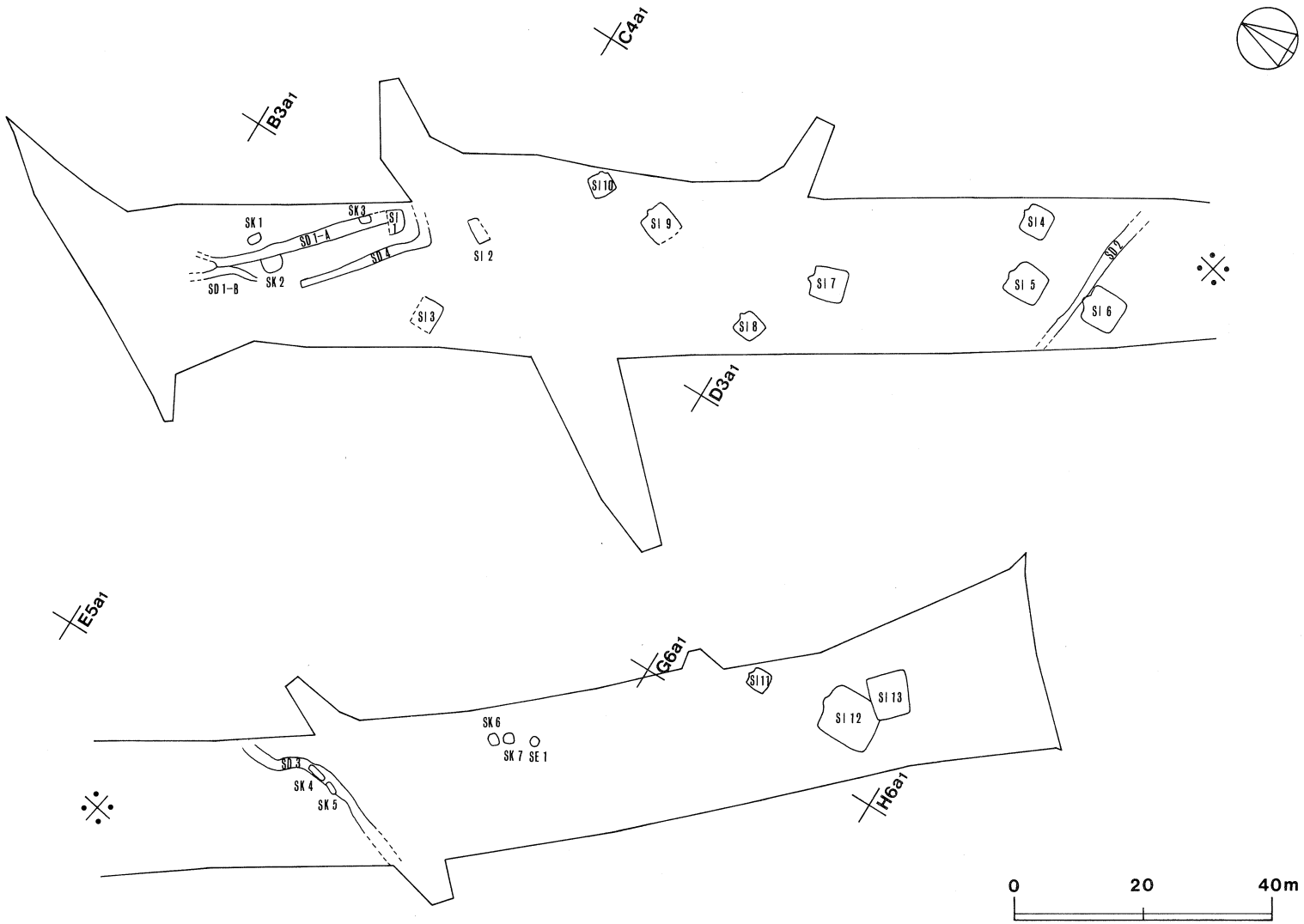
② 重量の欄で，(　)を付した数値は，一部を欠損しているものの現存値である。

6　金属製品一覧表

図版番号	器　種	法　量(cm)			備　　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	

① 図版番号は，実測図中の番号である。写真図版にもこの番号を用いた。

② 重量の欄で，(　)を付した数値は，一部を欠損しているものの現存値である。


C4a1
B3a1
SK 1
SK 3
SI 1
SD 1-A
SD 4
SD 1-B
SK 2
SI 2
SI 10
SI 9
SI 4
SD 2
SI 7
SI 5
SI 6
SI 3
SI 8
D3a1
E5a1
G6a1
SI 11
SI 13
SI 12
SK 6
SK 7
SE 1
SD 3
SK 4
SK 5
H6a1
0
20
40m

第５図　東原遺跡全体図

第４章　東原遺跡

第１節　遺跡の概要

東原遺跡は，勝田市の北端部，那珂台地の中央部に位置している。遺跡は標高30ｍ前後の平坦な台地に所在し，北側には比較的大きな谷津が東側から入り込んでいる。調査区は，東西約25 ｍ，南北約330ｍ，面積7,372㎡である。現況は畑地で，麦等の栽培が盛んに行われている。

当遺跡は，調査前から縄文式土器片や土師器片が採集され，縄文時代，古墳時代～奈良・平安時代の遺跡として知られていたが，今回の調査で，奈良・平安時代の遺跡であることが判明した。

今回の調査によって検出された遺構は，竪穴住居跡13軒，土坑７基，溝５条，井戸１基である。

竪穴住居跡は，調査区の北部から５軒，中央部から５軒，南部から３軒検出されている。このうち11軒は，遺構の形態や出土遺物等から奈良・平安時代の住居跡と考えられる。他の２軒は出土遺物がなく，時期を決定することはできなかった。

遺物は，土師器・須恵器を中心に，石器・石製品・鉄製品・古銭等が出土している。その他，縄文式土器片が少量出土している。土師器や須恵器は主に奈良・平安時代に比定され，土師器では甕・坏等，須恵器では甕・坏・蓋等が出土している。

これらの遺物は，遺物収納コンテナ(60×40×20㎝)に29箱出土している。

第２節　遺構と遺物

１　竪穴住居跡

第１号住居跡（第６図）

位置　調査区の北部，B2g0区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北部は，第１号溝の東部によって掘り込まれている。

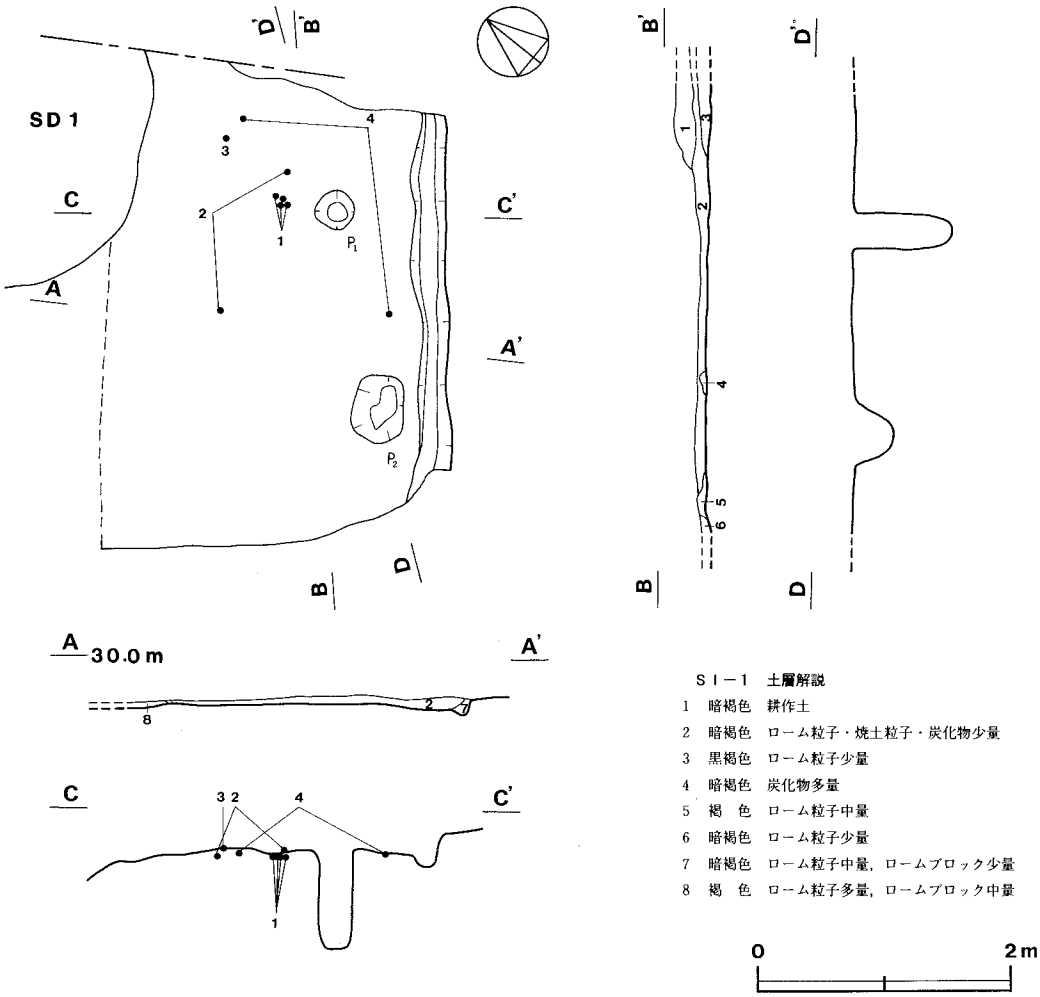
規模と平面形　長軸(3.92ｍ)，短軸(2.72ｍ)。本跡は調査区外に延びており，一部を溝に掘り込まれているため，全体的な規模，平面形は不明である。

主軸方向　残存している南東壁から推定すると，〔Ｎ－38°－Ｗ〕である。

壁　南東壁だけ残存しており，壁高は26㎝を測り，垂直に立ち上がっている。

壁溝　南東壁下だけに検出されている。上幅20～30㎝，深さ８～10㎝を測り，皿状に掘り込まれている。

床　残存している床面は，平坦で，硬く踏み固められている。



第6図　第1号住居跡実測図

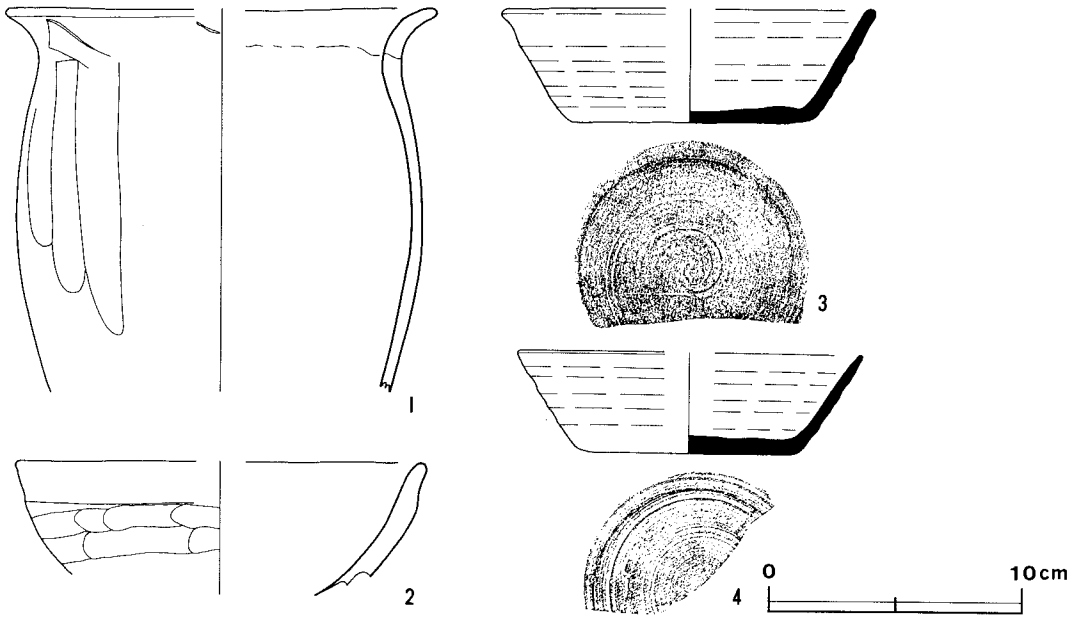
ピット　2か所(P1, P2)検出されている。P1は，径32～34cm，深さ80cmで，規模等から主柱穴である。その他の主柱穴を検出することはできなかった。P2は，径44～54cm，深さ34cmで，出入口の施設に伴う梯子ピットと考えられる。

竈　検出されない。北西壁に構築されていたものと思われるが，溝により削平されている。

覆土　自然堆積。

遺物　北東部の床面及び覆土下層から多量の土師器（甕・坏・椀）片，須恵器（坏）片が出土している。第7図(1)の土師器の甕と(2)の土師器の椀と(3)・(4)の須恵器の坏は北東部の覆土下層から出土している。そのほか，覆土からは縄文式土器片が出土しているが，これらは流れ込みと考えられる。

所見　本跡は，遺構の形態及び出土遺物から奈良時代の住居跡と考えられる。



第7図　第1号住居跡出土土器実測図

第1号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第7図 1	甕 土師器	A〔17.0〕 B(15.2)	胴下半部欠損。胴部は内彎して立ち上がり，頸部はくびれ，口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り。胴部内面軽いナデ。	砂粒・長石・スコリア，にぶい橙色，普通	P1　30% 北東部覆土下層
2	塊 土師器	A〔16.0〕 B(5.3)	底部欠損。体部は内彎し，口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部は軽く外傾する。	口縁部内・外面ナデ。体部外面横位のヘラ削り後，ヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P2　20% 中央部・北東部覆土下層
3	坏 須恵器	A〔14.9〕 B　4.5 C　9.0	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。口唇部はわずかに尖る。	底部回転ヘラ削り。水挽き成形後体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 浅黄色 普通	P3　40% 北東部覆土下層
4	坏 須恵器	A〔13.6〕 B　4.0 C〔 7.9〕	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり，口唇部を丸くおさめる。	底部回転ヘラ削り。水挽き成形後体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 灰白色 普通	P4　25% 北東部覆土下層

第2号住居跡（第8図）

位置　調査区の北部，B3j1 区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸〔4.40 m〕，短軸〔3.64 m〕の長方形を呈していると思われる。

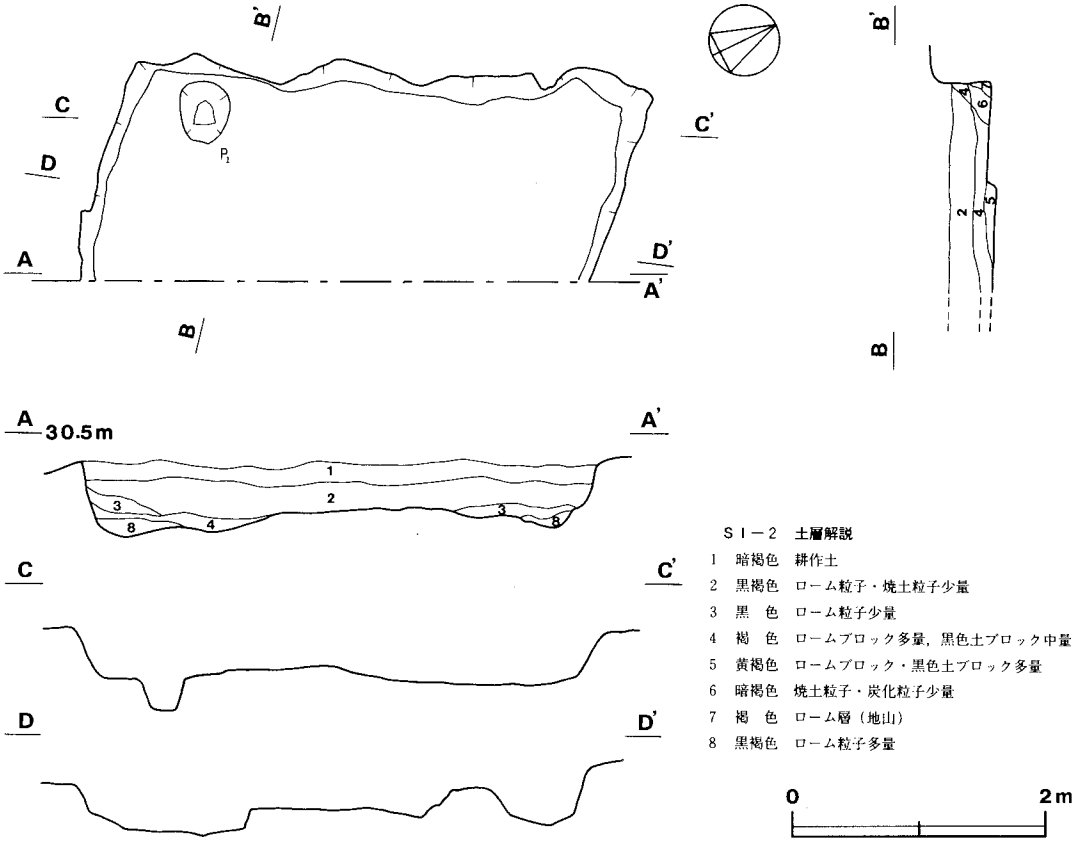
主軸方向　残存している南西壁から推定すると，〔N－30°－E〕である。

壁　北東壁・南西壁の一部が残存しており，壁高は20～34cmを測り，外傾して立ち上がっている。

床　トレンチャーによる攪乱を受けているが，残存している床面は硬く，締まっている。

ピット　1か所検出されている。P1は，径40～50cm，深さ27cmで主柱穴である。その他の主柱穴を検出することはできなかった。

竈　検出されない。



第8図　第2号住居跡実測図

覆土　自然堆積。

遺物　床面及び覆土下層から土師器片や須恵器片が出土しているが，細片が多く，図示可能な遺物は認められなかった。そのほか，覆土からは縄文式土器片が出土しているが，これらは流れ込みと考えられる。

所見　本跡は，出土遺物から奈良時代の住居跡と考えられる。

第3号住居跡（第9図）

位置　調査区の北部，B2j8区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸〔4.44 m〕，短軸〔3.78 m〕の長方形を呈していると思われる。

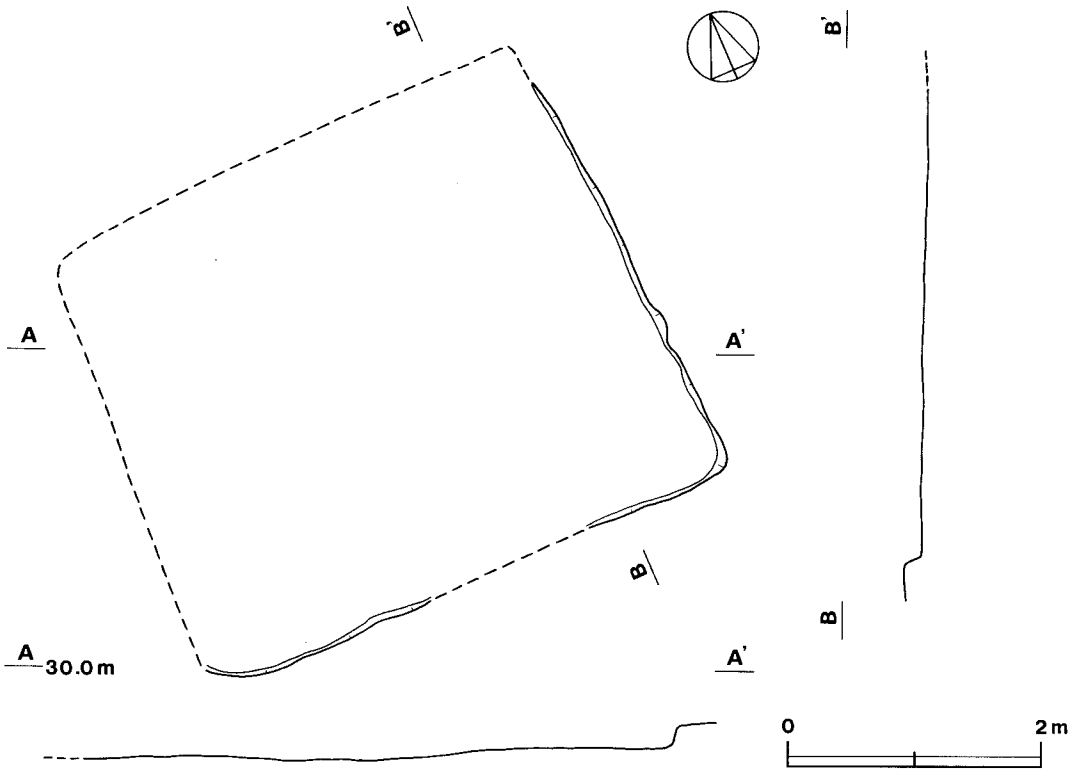
主軸方向　残存している南壁から推定すると，〔N-90°〕である。

壁　東壁と南壁の一部がわずかに残存している。壁高は10cmを測り，外傾して立ち上がっている。

床　南東部が踏み固められ，堅緻である。

ピット　検出されない。

竈　検出されない。



第9図　第3号住居跡実測図

覆土　削平されており，堆積状況は不明である。

遺物　出土していない。

所見　住居跡の大部分が撹乱を受けており，竈や壁を明確に捉えることはできなかった。本跡は出土遺物がなく，竈，貯蔵穴，柱穴等の施設も検出されないことから，時期を決定することはできなかった。

第4号住居跡（第10図）

位置　調査区の中央部，D4h3区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸4.58ｍ，短軸4.54ｍの方形を呈している。

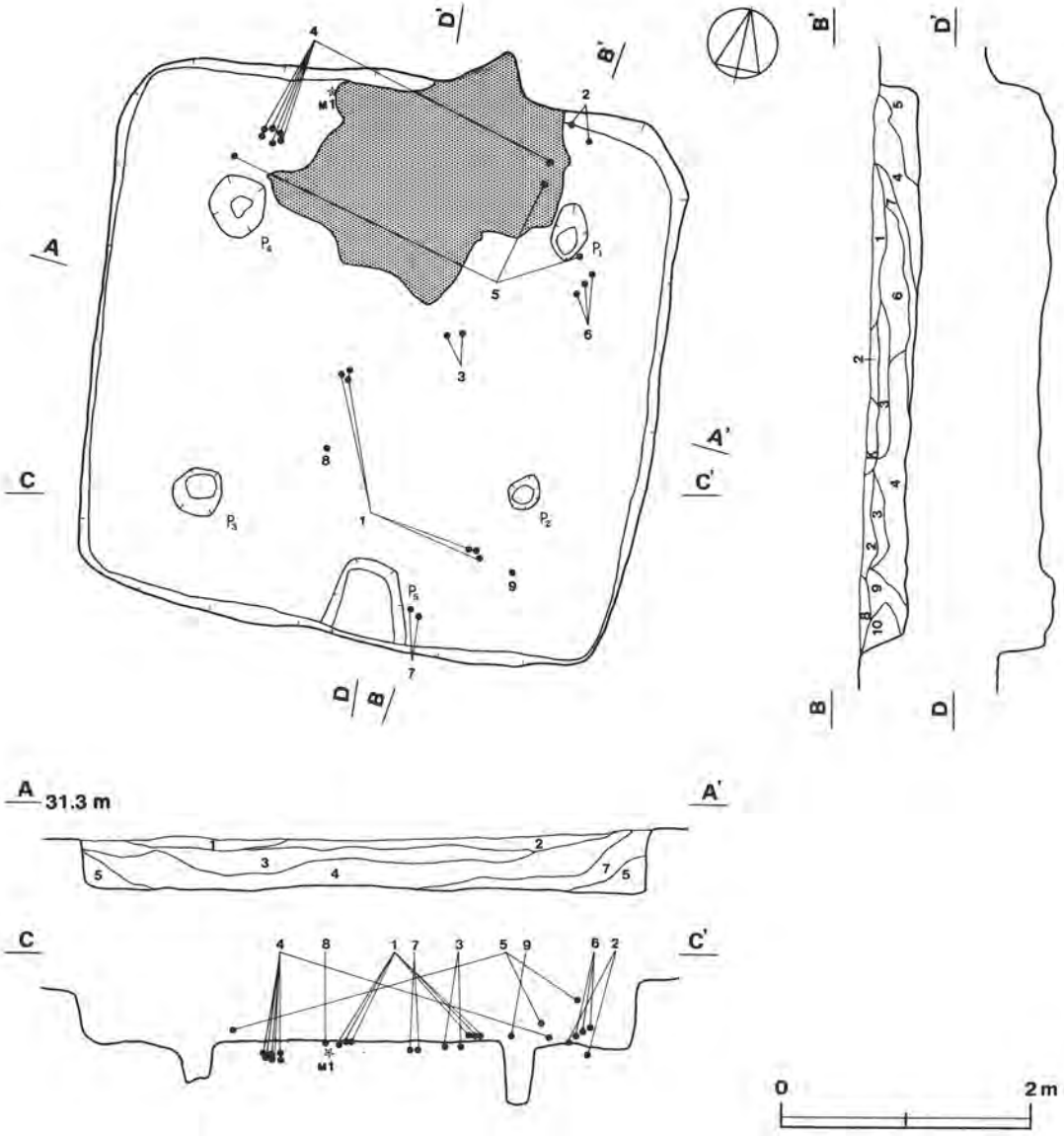
主軸方向　N－8°－W。

壁　壁高は36～50cmを測り，垂直に立ち上がっている。

壁溝　なし。

床　平坦で，硬く踏み固められ堅緻である。

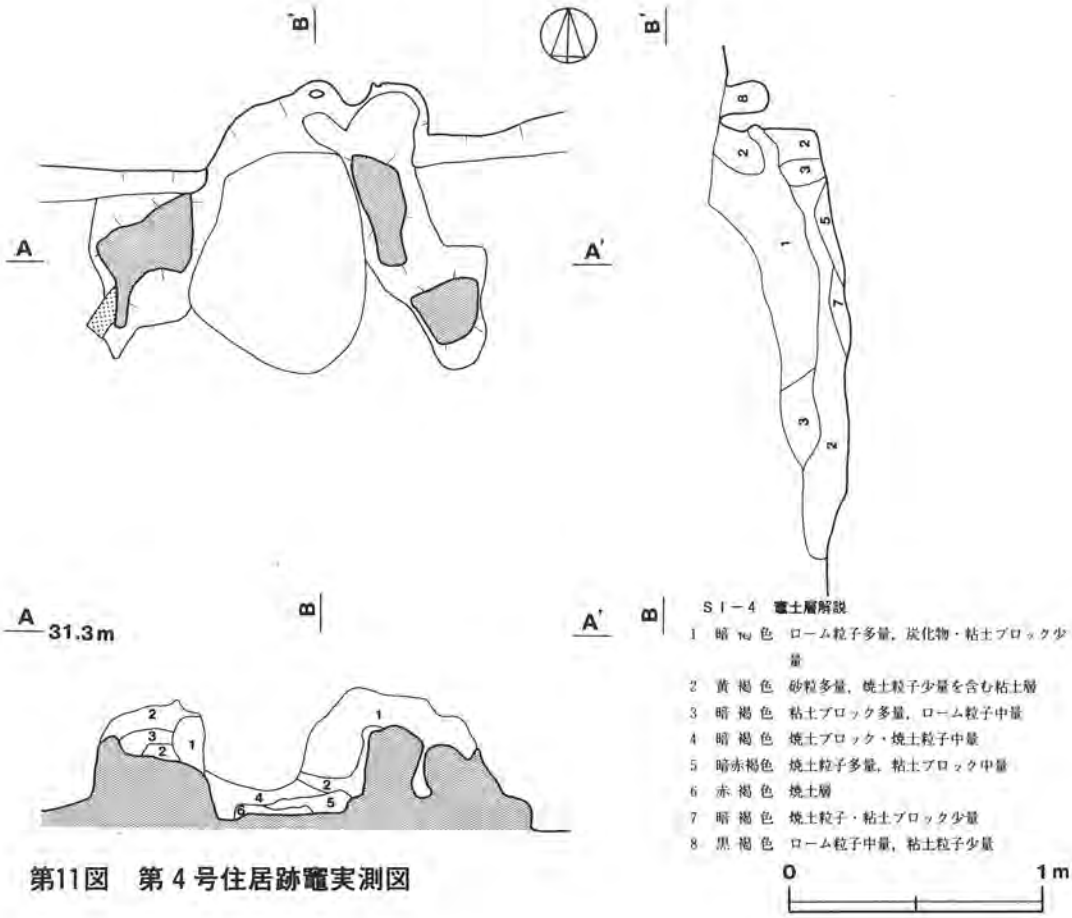
ピット　5か所（P_1～P_5）検出されている。P_1～P_4は，径30～50cm，深さ32～51cmで規模及び配列から主柱穴である。P_5は径58～70cm，深さ13cmで，出入口の施設に伴う梯子ピットと考えられる。



S I－4　土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
2　黒　褐　色　ローム粒子中量
3　黒　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック少量
4　暗　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック・炭化物少量
5　黒　褐　色　ロームブロック中量
6　黒　褐　色　ローム粒子・ロームブロック中量，焼土粒子少量
7　黒　褐　色　ロームブロック中量
8　黒　　色　ローム粒子少量
9　オリーブ褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・粘土ブロック少量
10　黒　褐　色　ローム粒子中量

第10図　第４号住居跡実測図



第11図　第４号住居跡竈実測図

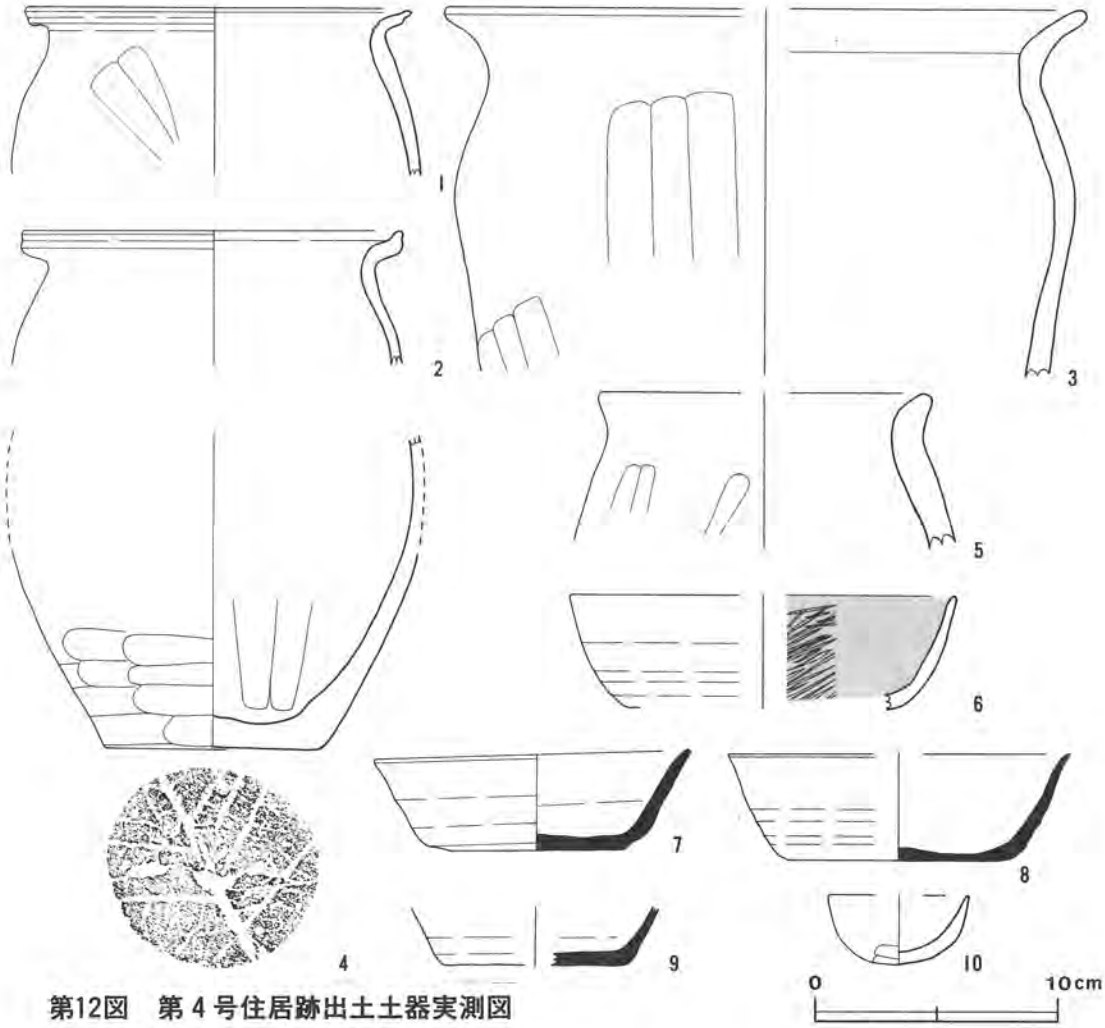
竈　北壁中央部からやや東寄りの壁を30cm程壁外に掘り込み，砂混じりの粘土で構築されている。

規模は，長さ118cm，幅157cmを測る。天井部は崩落しているが，両袖部が残存している。西袖部の付近から，袖部の強化に使われたと考えられる８cm×20cm×10cmの角形の粘土ブロックが検出されている。火床の掘り込みは認められない。煙道は，火床から緩やかに外傾して立ち上がり，煙出口付近では急な角度となっている。

覆土　自然堆積。

遺物　竈周辺の床面及び覆土から多量の土師器(甕・坏)片や須恵器(坏・蓋)片と鉄製品(器種不明，１点)が出土している。第12図(4)の土師器の甕の底部片が竈西側・竈内の床面から出土している。そのほか，覆土からは縄文式土器片や磨石が出土しているが，これらは流れ込みと考えられる。

所見　本跡は，遺構の形態や出土遺物から平安時代の住居跡と考えられる。



第12図　第４号住居跡出土土器実測図

第４号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第12図 1	甕 土師器	A 15.8 B(7.0)	胴下半部欠損。胴部は内彎して立ち上がり，頸部はくびれ口唇部をつまみ上げている。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P５　25% 中央部・南東部覆土下層
2	甕 土師器	A 15.6 B(5.6)	胴下半部欠損。頸部は丸みをもって強く外反し，口唇部をつまみ上げている。	口縁部内・外面横ナデ。胴部ヘラナデ。	砂粒・スコリア 雲母 普通	P６　20% 竈東側覆土下層内面煤付着
3	甕 土師器	A〔26.4〕 B(15.3)	胴下半部以下欠損。胴部は内彎して立ち上がり，頸部はくびれ口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り後ナデ，胴部内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英，にぶい橙色，普通	P７　20% 竈南側覆土下層
4	甕 土師器	B(13.0) C 8.8	口縁部欠損。底部は平底で，胴部は内彎して立ち上がる。	胴部外面下位ヘラ削り，内面縦位のヘラ削り。底部には木葉痕が残る。	砂粒・長石・雲母 赤色，普通	P８　40% 竈・竈西側床面

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第12図 5	甕 土師器	A〔13.3〕 B(6.1)	胴中央部以下欠損。頸部はくびれ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 スコリア，にぶい橙色　普通	P 9　10% 東部・西部・竈内覆土下層
6	坏 土師器	A〔16.0〕 B 4.7 C〔11.4〕	底部欠損。口縁部と体部との境に不明瞭な稜を有する。	口縁部外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒 明褐色 普通	P 10　10% 竈東側覆土下層
7	坏 須恵器	A 13.1 B 4.2 C 7.2	平底。体部は外傾して直線的に立ち上がる。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後，周縁のみナデ。	砂粒・長石 浅黄色 普通	P 12　85% 南部覆土下層
8	坏 須恵器	A〔14.2〕 B 4.4 C〔 9.2〕	平底。体部は外傾して直線的に立ち上がる。口縁部はやや外反する。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後，回転ヘラ削り。体部下端ヘラ削り。	砂粒・長石 灰色 普通	P 13　30% 中央部覆土下層
9	坏 須恵器	B(2.4) C〔 7.6〕	口縁部欠損。平底。体部は外傾し，直線的に立ち上がる。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒・長石 青灰色 普通	P 14　15% 南東部覆土下層
10	手捏土器 土師器	A〔 5.8〕 B 2.9	丸底。体部は内彎して立ち上がる。	底部ヘラ削り。	砂粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	P 11　20% 覆土

第5号住居跡（第13図）

位置　調査区の中央部，D4i₁区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸5.52ｍ，短軸5.38ｍの方形を呈している。

主軸方向　N－0°。

壁　壁高は46～56cmを測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　壁下を全周している。上幅36～52cm，深さ8～12cmで，断面形はU字状を呈している。

床　黒色土混じりのロームを貼り固めており，平坦で締まっている。

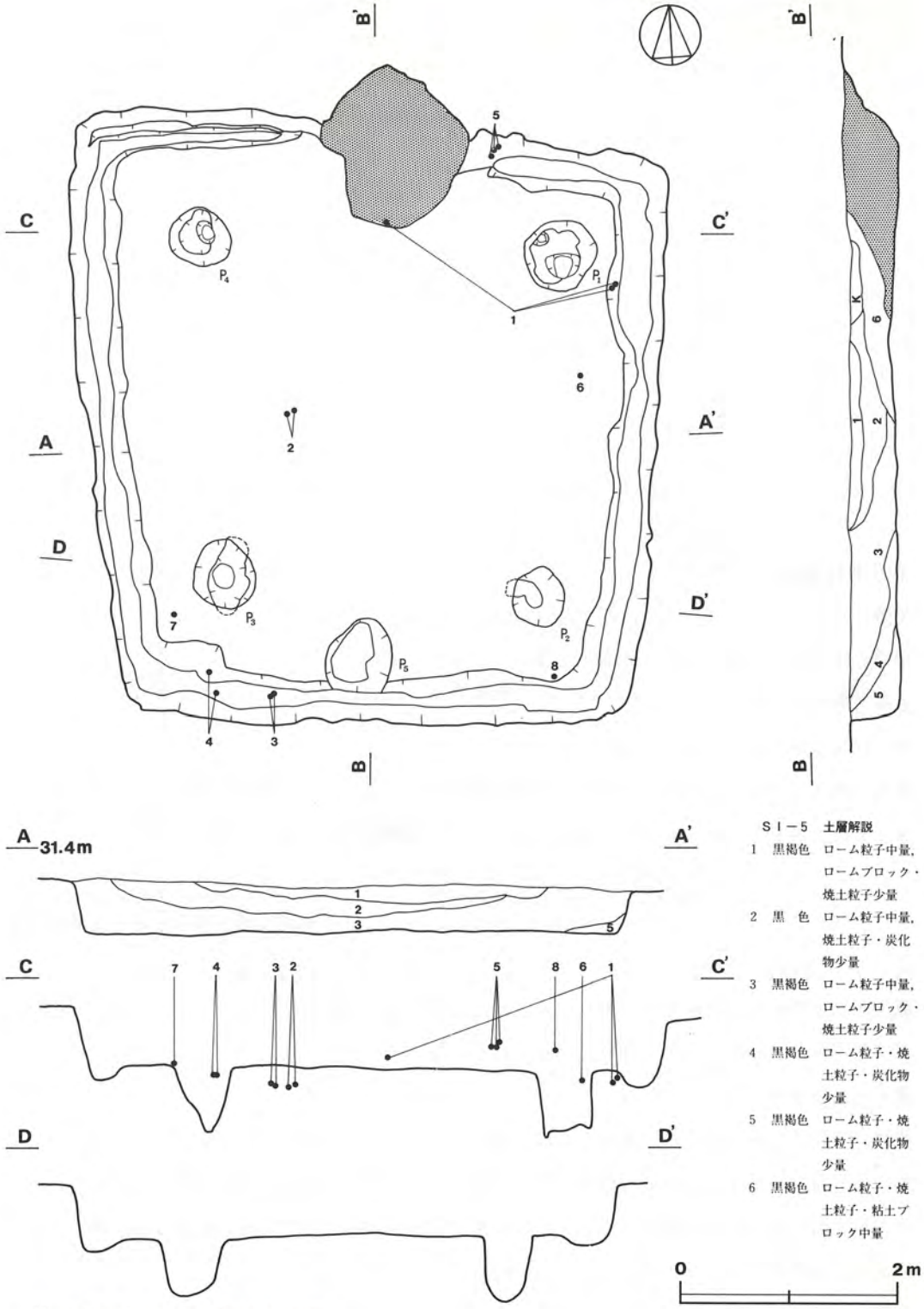
ピット　5か所(P_1～P_5)検出されている。P_1～P_4は，径48～68cm，深さ50～64cmで規模及び配列から主柱穴である。P_5は，径60～66cm，深さ16cmで，出入口の施設に伴う梯子ピットと考えられる。

竈　北壁中央部を54cm程壁外に掘り込み，砂混じりの粘土で構築されているが，竈の天井部や袖部は削平されている。火床の掘り込みは認められない。

覆土　自然堆積。

遺物　床面及び覆土からは，多量の土師器(甕・坏)片や須恵器(坏)片等が出土している。第15図(4)の須恵器の坏が南西コーナー付近の覆土下層から，(5)の須恵器の坏が竈東側の覆土中層から，(8)の須恵器の高台付坏が南東コーナー付近の覆土中層から出土している。そのほか，覆土からは縄文式土器片が出土しているが，これらは流れ込みと考えられる。

所見　本跡は，遺構の形態や出土遺物から平安時代の住居跡と考えられる。



SI－5　土層解説

1　黒褐色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子少量

2　黒　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物少量

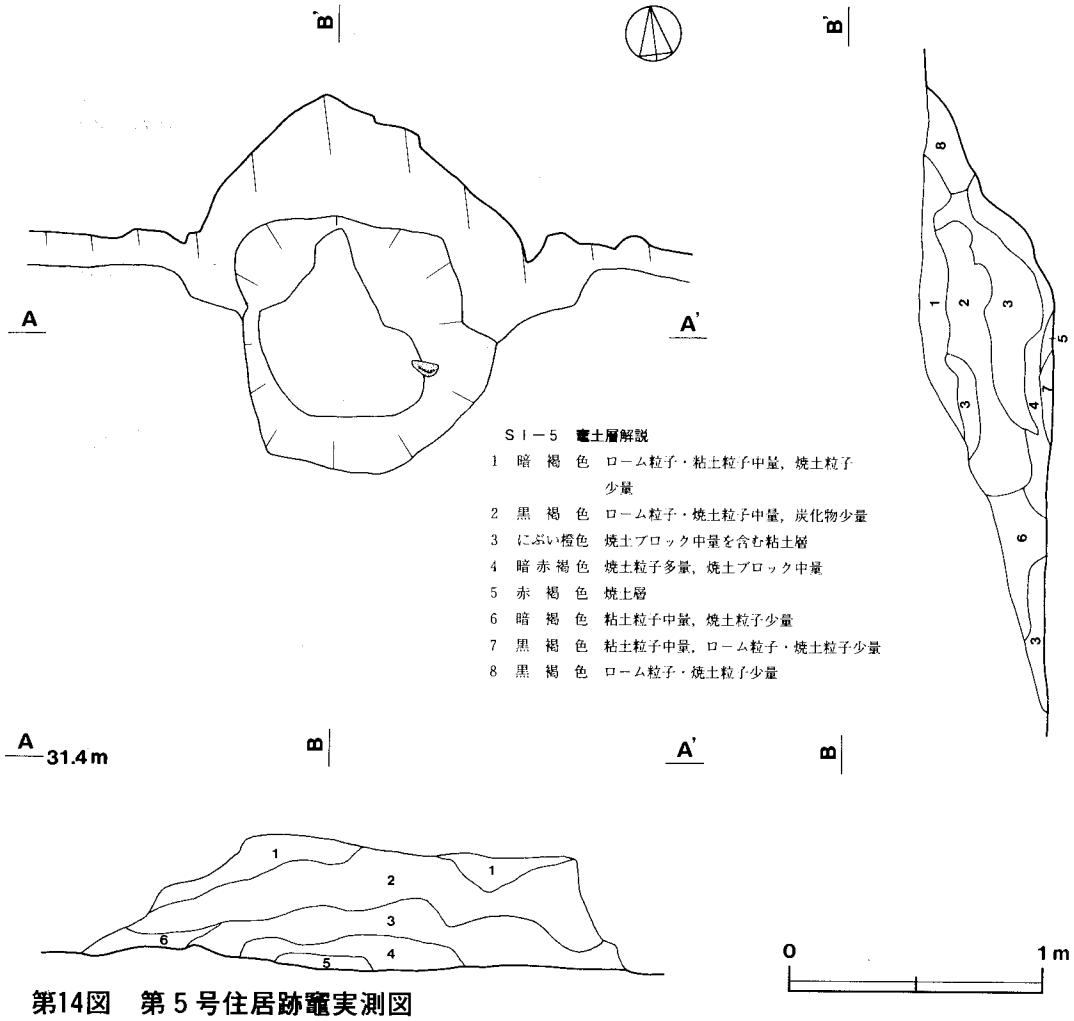
3　黒褐色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子少量

4　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量

5　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量

6　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・粘土ブロック中量

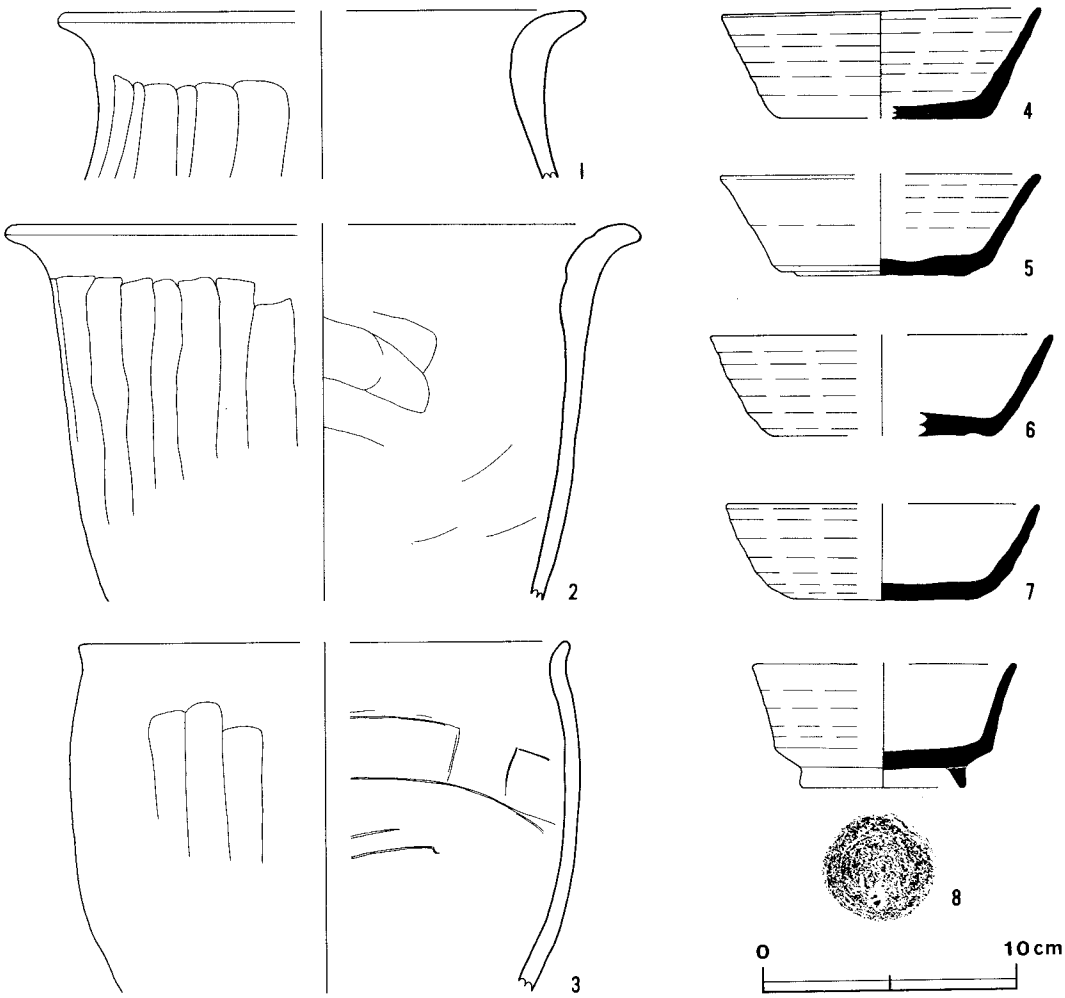
第13図　第５号住居跡実測図



第14図　第５号住居跡竈実測図

第５号住居跡出土土器観察表

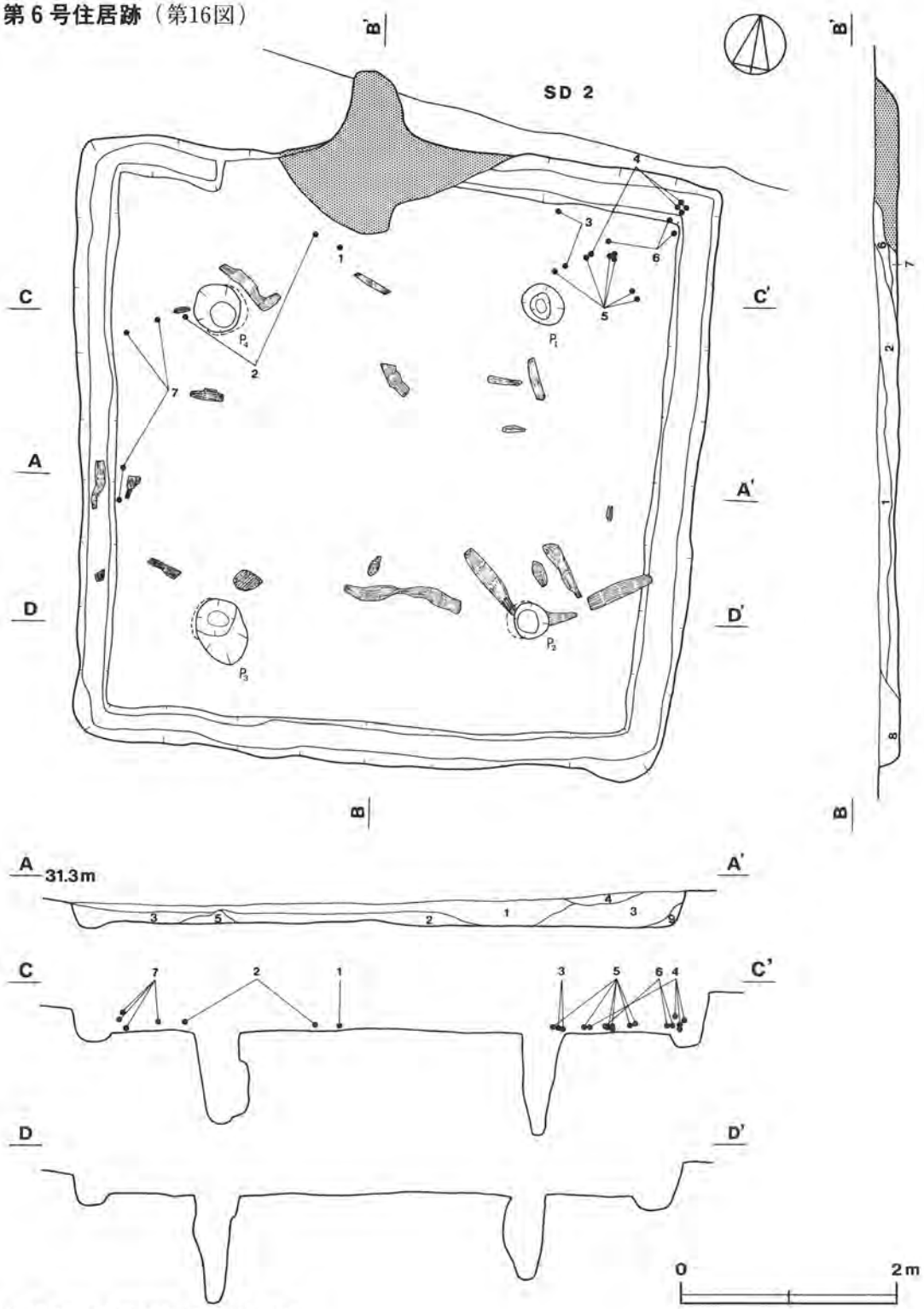
図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第15図 1	甕 土師器	A〔20.3〕 B(6.7)	胴下半部欠損。頸部は肥厚し，強くくびれ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面縦位のヘラ削り。	砂粒・長石 橙色 普通	P15　10% 竈中央部・東側覆土下層
2	甑 土師器	A〔24.1〕 B(14.9)	胴下半部欠損。胴部はやや外傾しながら立ち上がり，頸部で肥厚し，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色，普通	P16　10% 中央部床面
3	甑 土師器	A〔19.4〕 B(13.9)	胴下半部欠損。胴部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P17　10% 南壁西側付近覆土下層
4	坏 須恵器	A 12.6 B 4.4 C〔 8.2〕	平底。体部は外傾し，直線的に立ち上がる。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後，手持ちヘラ削り。	砂粒・長石 黄灰色 普通	P18　75% 南西コーナー付近覆土下層



第15図　第５号住居跡出土土器実測図

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第15図 5	坏 須恵器	A〔12.5〕 B　4.0 C　7.1	平底。体部は外傾し，直線的に立ち上がる。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒・長石 灰色 普通	P19　70% 竈東側覆土中層
6	坏 須恵器	A〔13.6〕 B　4.0 C〔 8.8〕	平底。体部は外傾し，直線的に立ち上がる。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後，手持ちヘラ削り。	砂粒・長石 灰色 普通	P20　30% 東部覆土下層
7	坏 須恵器	A〔12.4〕 B　3.8 C〔 7.1〕	平底。体部は外傾し，直線的に立ち上がる。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・長石・礫 オリーブ灰色 普通	P21　30% 南西コーナー付近覆土下層
8	高台付坏 須恵器	A〔10.4〕 B　4.9 D　6.6 E　0.8	底部は平底で，ほぼ直立する高台が付く。体部は外傾して立ち上がり，口縁部付近で軽く外反する。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。高台貼り付け。	砂粒・長石 灰色 普通	P22　60% 南東コーナー付近覆土中層

第６号住居跡（第16図）



第16図　第６号住居跡実測図

位置　調査区の中央部，E4b1区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の竈の煙道部は，第２号溝に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸5.76ｍ，短軸5.62ｍの方形を呈している。

主軸方向　Ｎ－４°－Ｅ。

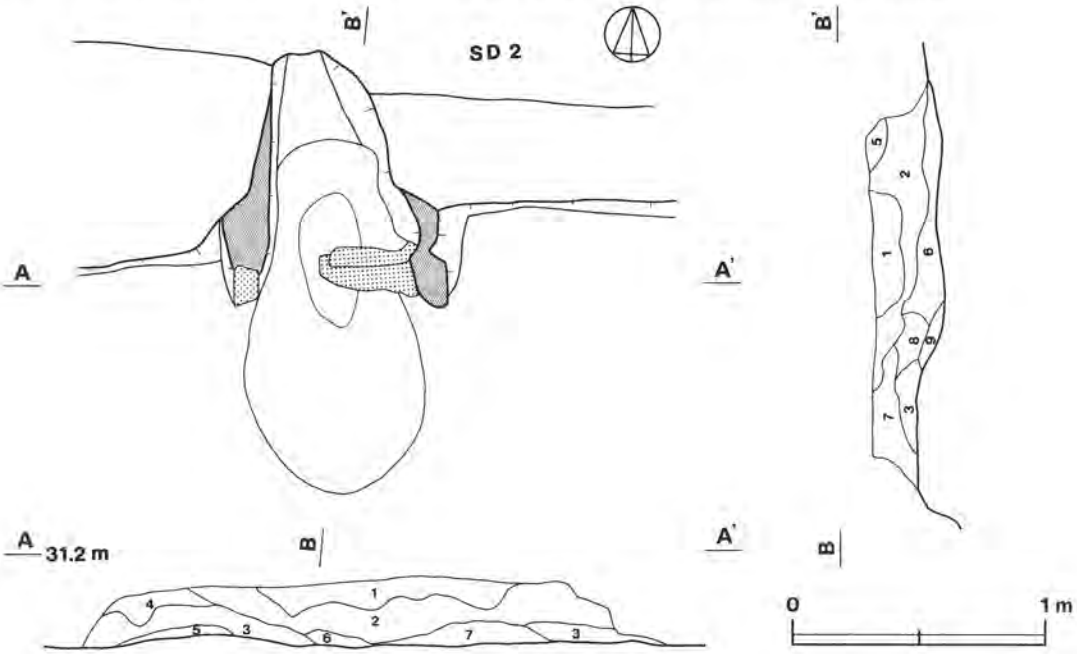
壁　壁高は22～38cmを測り，外傾して立ち上がっている。南壁と西壁は攪乱を受けている。

壁溝　壁下を全周している。上幅32～44cm，深さ14～16cmで断面形はＵ字状を呈している。

床　トレンチャーによる攪乱を受けているが，残存する床面は比較的平坦である。

ピット　４か所（P_1 ～ P_4）検出されている。P_1～P_4は径32～62cm，深さ81～100cmで，規模及び配列から主柱穴である。

竈　北壁中央部を72cm程壁外に掘り込み，砂混じりの粘土で構築されている。規模は，長さ175cm，幅95cmである。西袖部付近と火床部から，９cm×16cm×６cm，17cm×38cm×５cmの角形の粘土ブロックが検出されており，袖部・天井部を強化するために使われたと考えられる。



Ｓ１－６　土層解説

1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
2　暗褐色　ローム粒子・炭化物中量，焼土粒子少量
3　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
4　黒褐色　ローム粒子少量
5　暗褐色　焼土ブロック中量
6　灰黄褐色　炭化物中量，焼土ブロック・粘土ブロック少量
7　灰黄褐色　粘土粒子中量，焼土粒子・炭化物少量
8　黒褐色　ロームブロック・ローム粒子少量
9　暗褐色　ローム粒子多量

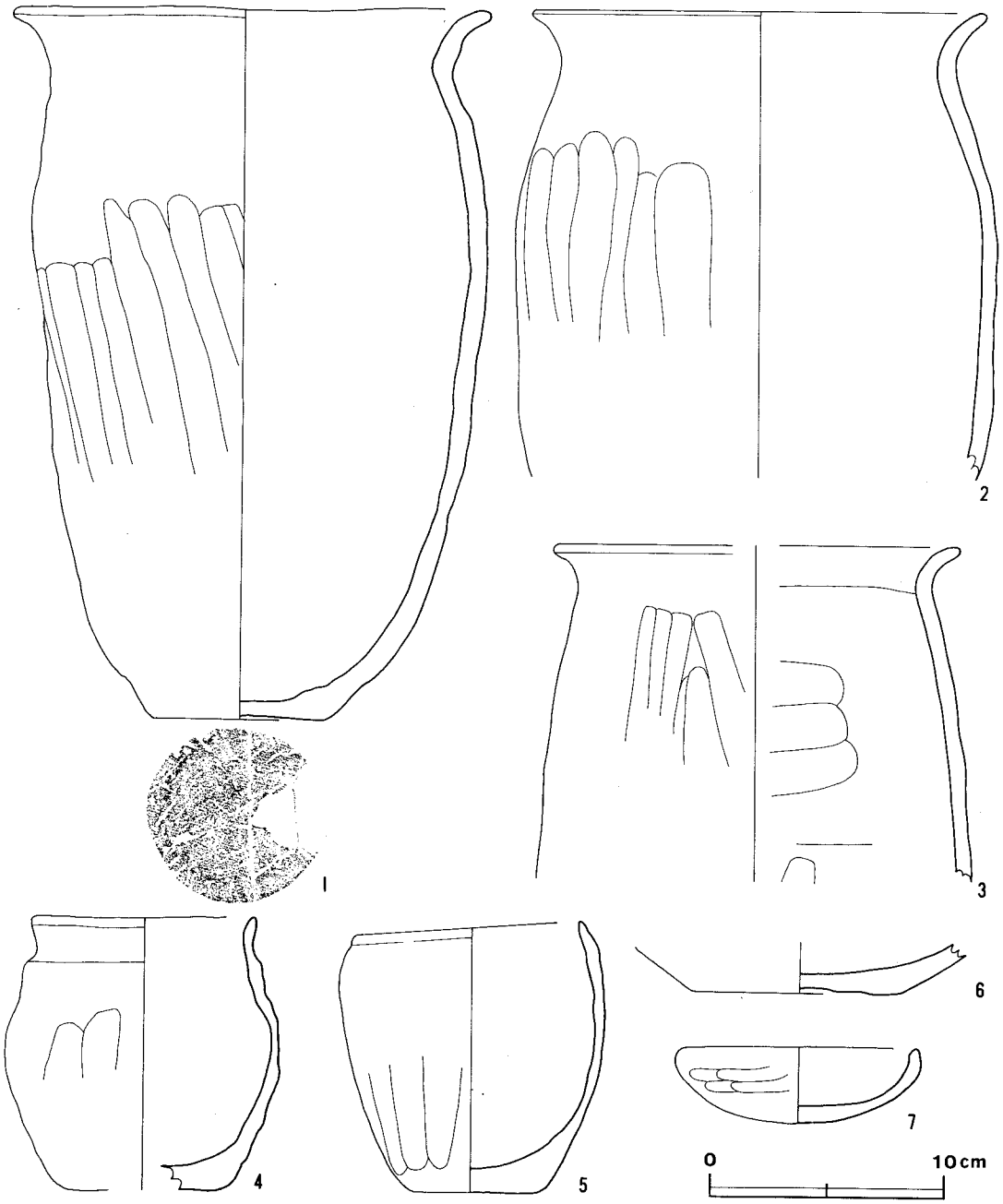
Ｓ１－６　竈土層解説

1　褐色　粘土ブロック中量，焼土粒子・炭化物少量
2　褐色　粘土粒子中量，ローム粒子・焼土粒子少量
3　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物少量
4　黒褐色　粘土ブロック・粘土粒子多量，炭化物少量
5　黒褐色　ロームブロック中量，炭化物少量
6　黒褐色　焼土ブロック多量，ローム粒子少量
7　暗褐色　粘土ブロック多量，焼土粒子少量
8　黒褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化物少量
9　暗褐色　粘土ブロック中量，焼土ブロック少量

第17図　第６号住居跡竈実測図

覆土　自然堆積。

遺物　竈東側の床面及び覆土から土師器(甕・坏)片，須恵器(坏)片が出土している。第18図(1)の土師器の甕が竈の南側の覆土下層から出土している。(7)の土師器の坏が西壁中央付近の覆土から出土している。そのほか，覆土からは縄文式土器片や古銭が出土しているが，これらは流れ込みと考えられる。



第18図　第6号住居跡出土土器実測図

所見　本跡は，遺構の形態や出土遺物から奈良時代の住居跡と考えられる。

また，本跡は覆土下層から多量の炭化材が出土している状態から，焼失家屋と思われる。

第6号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 1	甕 土師器	A 20.0 B 30.8 C 7.4	平底。胴部は内彎しながら立ち上がり，頸部から口縁部にかけて外反する。胴部最大径は上位に位置する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。底部に木葉痕が残る。	砂粒・長石・石英・パミス 黄橙色 普通	P23　90% 竈南側覆土下層
2	甕 土師器	A 19.2 B(20.1)	底部欠損。胴部は内彎しながら立ち上がり，頸部から口縁部にかけて外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・長石・礫 にぶい橙色 普通	P24　50% 北西部・竈南側覆土下層
3	甕 土師器	A〔17.2〕 B(14.4)	胴下半部欠損。胴部は内彎して立ち上がり，頸部はくびれ，口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面縦位のヘラ削り，内面上位横位のヘラ削り，下位縦位のヘラ削り。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P28　15% 北東部覆土下層
4	甕 土師器	A 9.5 B 11.8 C〔6.0〕	平底。胴部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り。	砂粒・スコリア 長石，浅黄橙色 普通	P25　75% 北東コーナー付近の壁溝覆土
5	甕 土師器	A 9.8 B 11.7 C 5.0	平底。胴部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。胴部縦位のヘラ削り。底部手持ちヘラ削り。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P26　75% 北東コーナー付近覆土下層
6	甕 土師器	B(2.2) C 9.1	平底で，胴部は外傾して立ち上がる。	底部手持ちヘラ削り。	砂粒・長石・礫 赤色 普通	P29　10% 北東コーナー付近覆土下層
7	坏 土師器	A 10.2 B 3.3	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は直立気味になる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り，内面ヘラ磨き。	砂粒・長石 浅黄色 普通	P27　80% 西壁中央付近の覆土

第7号住居跡（第19図）

位置　調査区の中央部，D3c7区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸5.36 m，短軸5.06 mの方形を呈している。

主軸方向　N－19°－W。

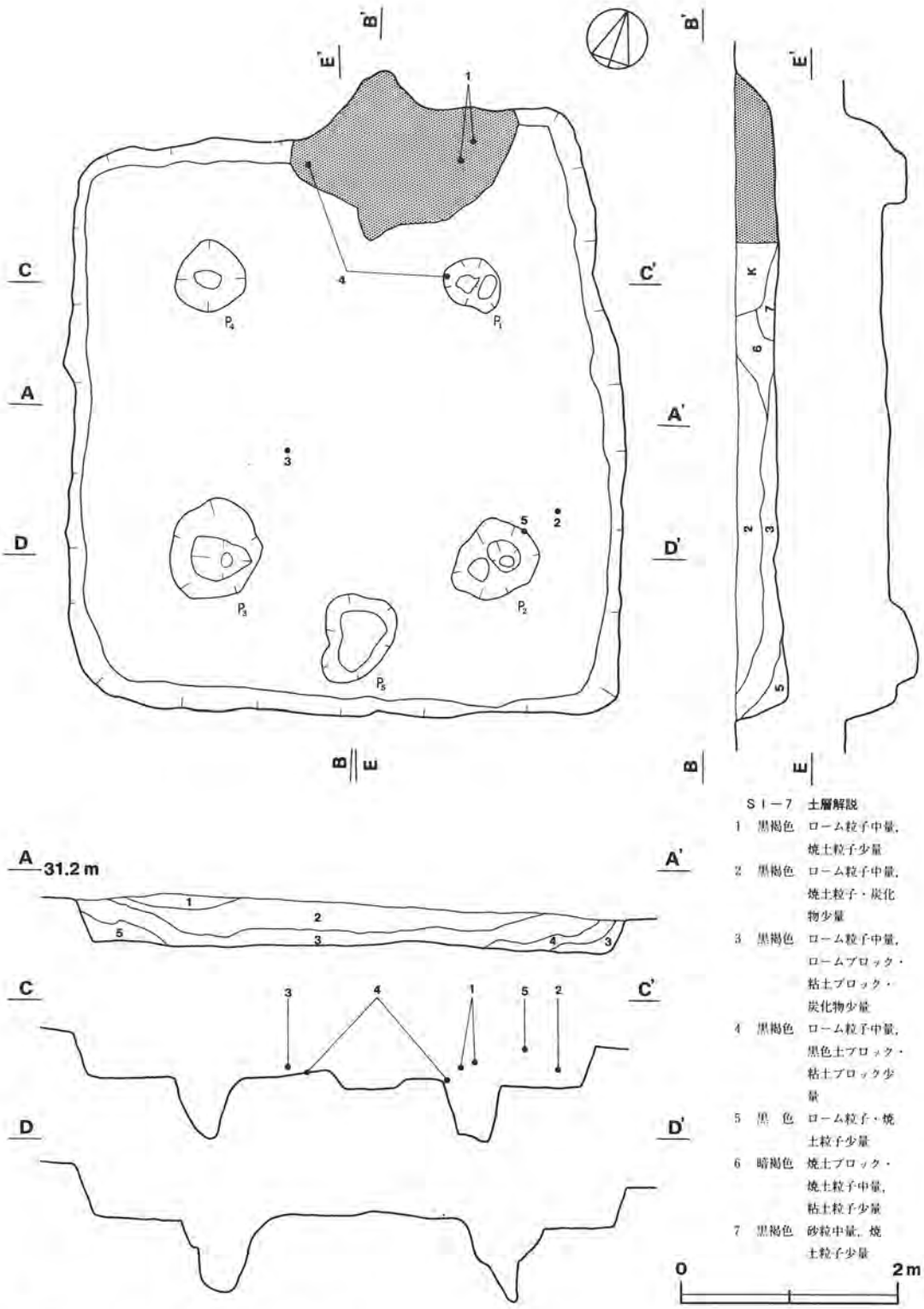
壁　鉄分の多い砂質ロームで，壁高は36～48cmを測り，外傾して立ち上がっている。

床　中央部がやや高くなっており，ロームと黒色土が混じった土を厚さ10～20cm程貼り固めている。

ピット　5か所（P_1～P_5）検出されている。P_1～P_4は径66～92cm，深さ55～69cmで，規模及び配列から主柱穴である。P_5は，径64～90cm，深さ28cmで，出入口の施設に伴う梯子ピットと考えられる。

竈　北壁やや東寄りの壁を31cm程壁外に掘り込み，砂混じりの粘土で構築されている。規模は，長さ214cm，幅111cmである。袖部から，5cm×18cm×5cm，9cm×24cm×10cmの角形の粘土ブロックが検出されており，袖部を強化するために使われたと考えられる。内部は赤く焼けている。

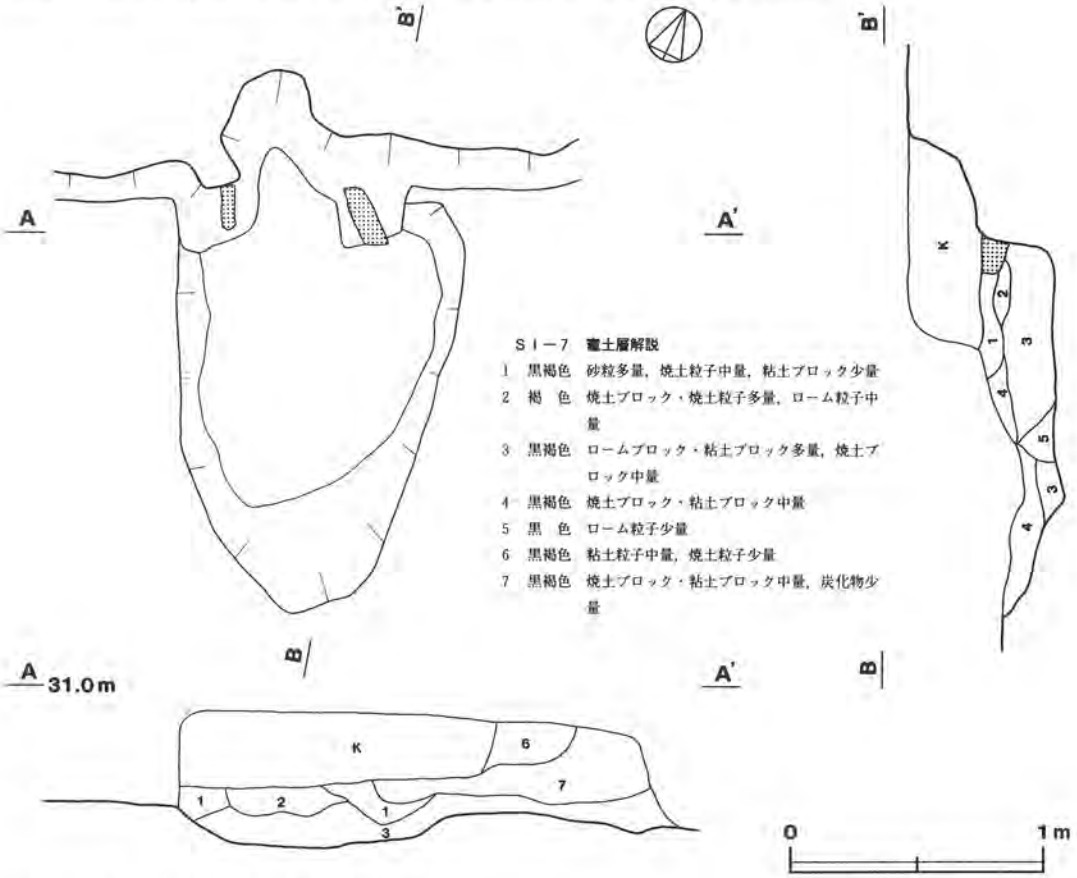
覆土　自然堆積。



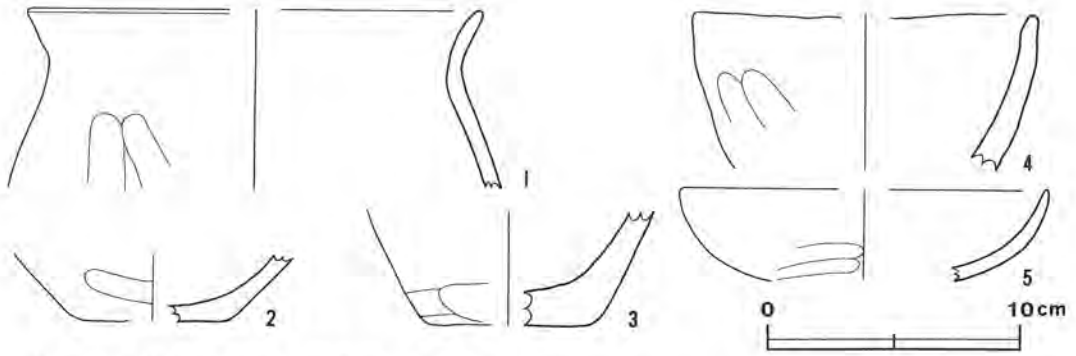
第19図　第７号住居跡実測図

遺物　住居跡の床面及び覆土下層から土師器(甕・坏・埦)片や須恵器(坏)片や鉄製品(器種不明)が出土している。第21図(1)の土師器の甕が竈東部の覆土下層から，(4)の土師器の埦は竈西部及び南側の覆土下層から出土している。そのほか，覆土からは縄文式土器片が出土しているが，これらは流れ込みと考えられる。

所見　本跡は，遺構の形態や出土遺物から奈良時代の住居跡と考えられる。



第20図　第７号住居跡竈実測図



第21図　第７号住居跡出土土器実測図

第7号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第21図 1	甕 土師器	A〔17.6〕 B(7.1)	胴下半部欠損。胴部は内彎して立ち上がり，頸部はくびれ，口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面縦位のヘラ削り。	砂粒・長石 橙色 普通	P30　10% 竈東部覆土下層
2	甕 土師器	B(2.6) C〔 5.8〕	平底で，胴部は外傾して立ち上がる。	底部及び胴部下端手持ちヘラ削り。	砂粒 暗褐色 普通	P31　5% 南東部覆土下層
3	甕 土師器	B(4.6) C〔 6.5〕	平底で厚い。胴部は外傾して立ち上がる。	底部及び胴部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・長石・雲母，明赤褐色 普通	P32　5% 中央部覆土下層
4	椀 土師器	A〔13.6〕 B(6.2)	底部欠損。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は直立気味になる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・石英 赤橙色 普通	P33　30% 竈西部・南側覆土下層
5	坏 土師器	A〔14.5〕 B(3.6)	丸底で，体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面下端ヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P34　15% 南東部覆土上層

第8号住居跡（第22図）

位置　調査区の中央部，D3a4区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸3.88 m，短軸3.38 mの方形を呈している。

主軸方向　N－17°－E。

壁　壁高は22～32cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝　壁下を全周している。上幅12～38cm，深さ32～44cmで，断面形はU字形を呈している。

床　平坦で，硬く踏み固められている。

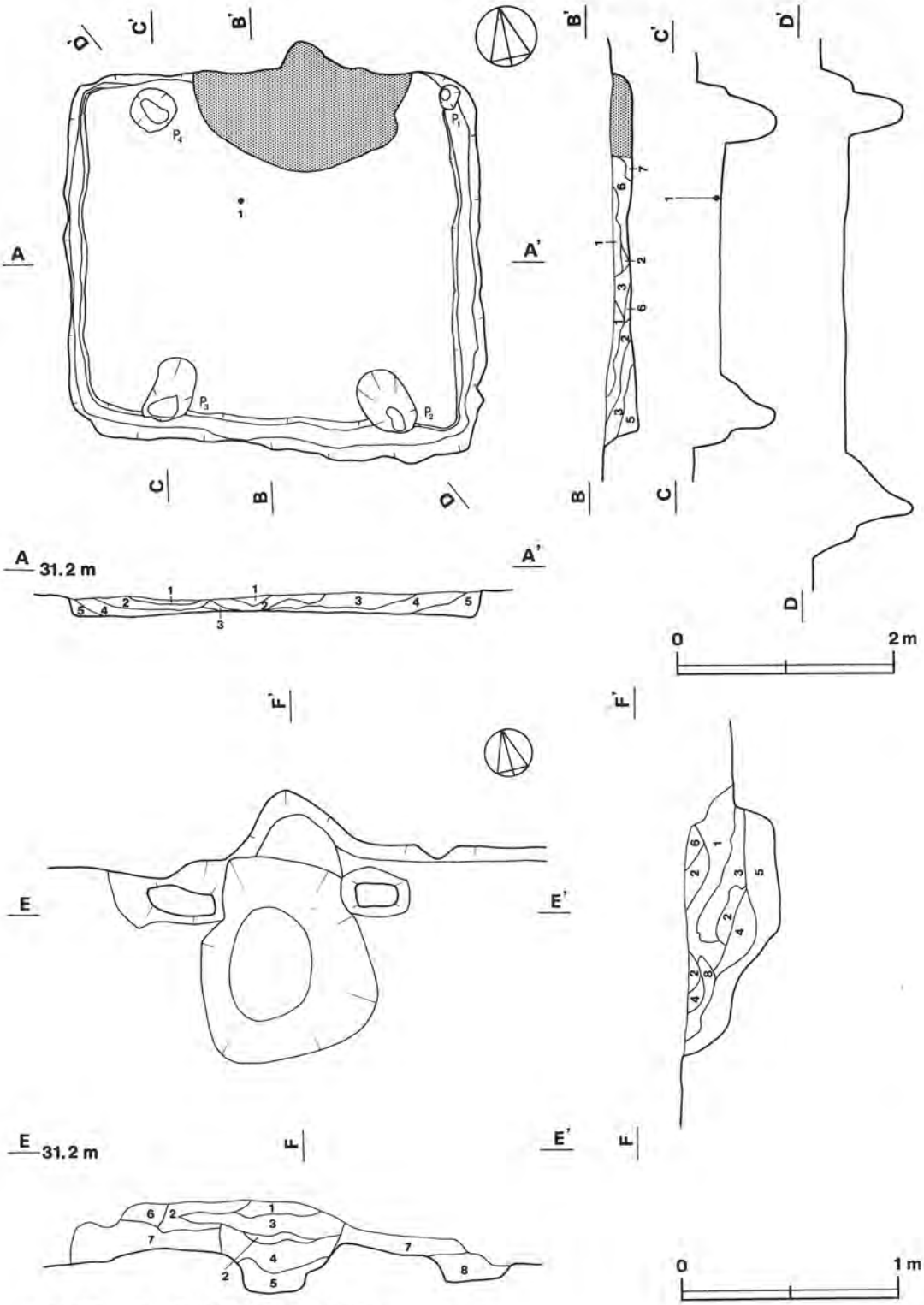
ピット　4か所(P_1～P_4)検出されている。P_1～P_4は径20～64cm，深さ52～75cmで，規模及び配列から主柱穴である。

竈　北壁中央部を28cm程壁外に掘り込み，砂混じりの粘土で構築されている。天井部は崩落しており，袖部がわずかに残存している。火床は，床面を20cm程掘り窪めている。煙道は，火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積。

遺物　住居跡の中央部から北側にかけて土師器(甕・坏)片，須恵器(坏)片が出土している。第23図(1)の須恵器の坏は中央部やや北寄りの覆土下層から出土している。そのほか，覆土からは縄文式土器片が出土しているが，これらは流れ込みと考えられる。

所見　本跡は，遺構の形態や出土遺物から奈良時代の住居跡と考えられる。



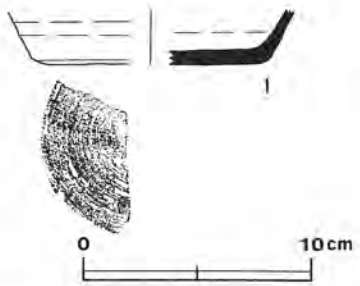
第22図　第８号住居跡・竈実測図

S I－8　土層解説

1　黒褐色　ローム粒子少量
2　黒褐色　ローム粒子・炭化物・粘土ブロック少量
3　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
4　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
5　黒褐色　ロームブロック中量，砂粒少量
6　暗褐色　粘土ブロック多量，焼土粒子中量
7　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子少量

S I－8　竈土層解説

1　黒　褐　色　粘土粒子多量，焼土粒子少量
2　黒　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック中量，焼土粒子少量
3　黒　褐　色　ローム粒子・粘土粒子少量
4　褐　　色　焼土ブロック多量，ローム粒子・炭化物少量
5　黒　褐　色　砂粒中量，焼土粒子少量
6　黒　褐　色　ローム粒子・粘土粒子少量
7　オリーブ黄色　焼土粒子少量を含む粘土層
8　褐　　色　粘土ブロック多量，焼土粒子少量



第23図　第8号住居跡出土土器実測図

第8号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第23図 1	坏 須恵器	B(2.4) C〔 9.0〕	平底。体部は外傾して立ち上がる。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・長石 灰色 普通	P35　20% 中央部やや北寄り覆土下層

第9号住居跡（第24図）

位置　調査区の北部，C3f5区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸(5.02ｍ)，短軸4.84ｍの方形を呈するものと推定される。

主軸方向　N－22°－E。

壁　南西壁は消失している。壁高は10～14cmを測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

床　全体に平坦であり，周辺部と比較して中央部が硬く締まっている。

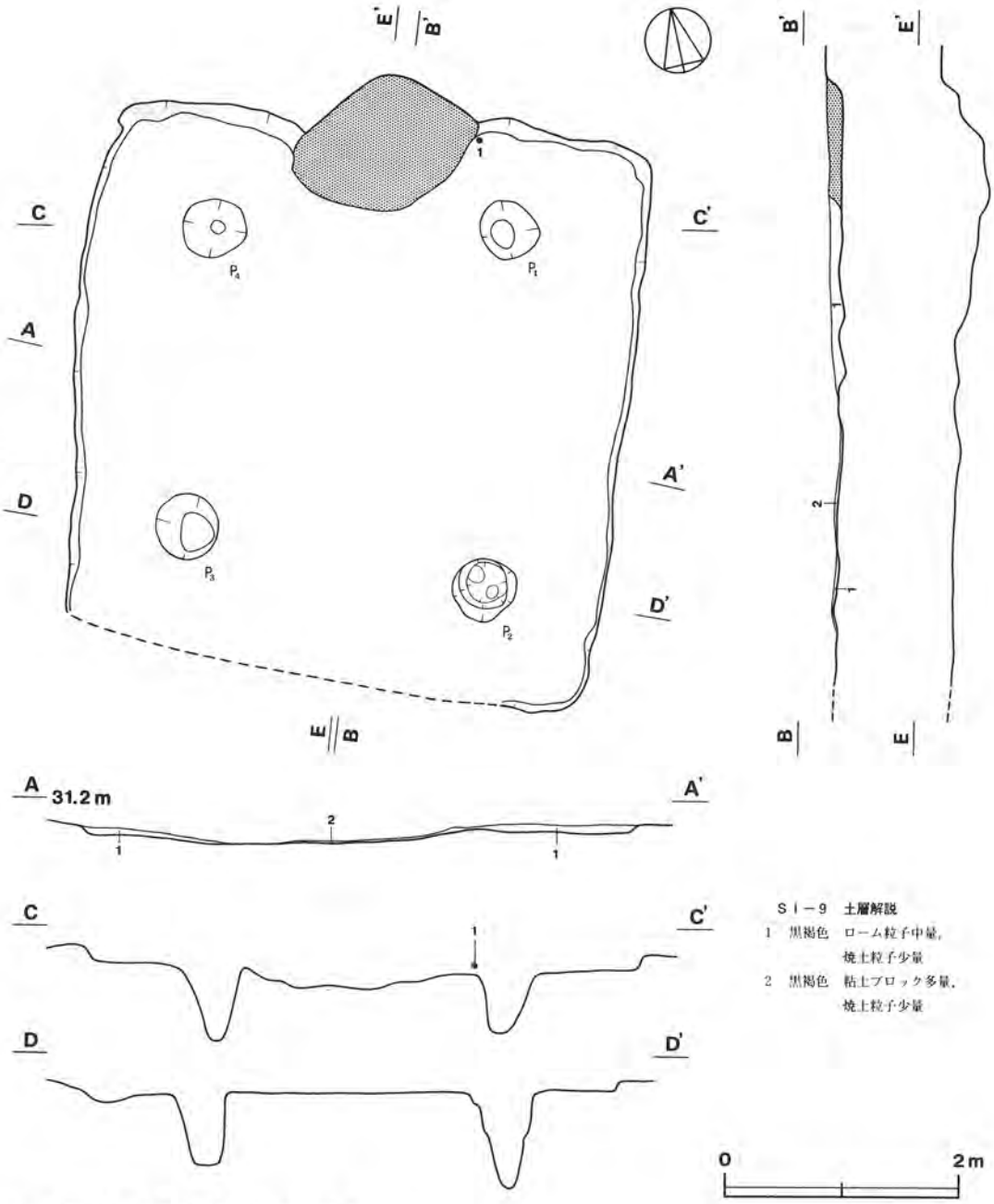
ピット　4か所(P1～P4)検出されている。P1～P4は径48～56cm，深さ50～84cmで，規模及び配列から主柱穴である。

竈　北壁中央部付近にわずかな痕跡が検出されている。火床は，床面を40cm程掘り窪めている。

覆土　自然堆積。

遺物　主に竈東側の床面及び覆土下層から，土師器(甕・坏)片，須恵器(坏)片，鉄製品(釘)が出土している。第26図(1)の土師器の甕は，竈東側の覆土から出土している。そのほか，覆土からは縄文式土器片が出土しているが，これらは流れ込みと考えられる。

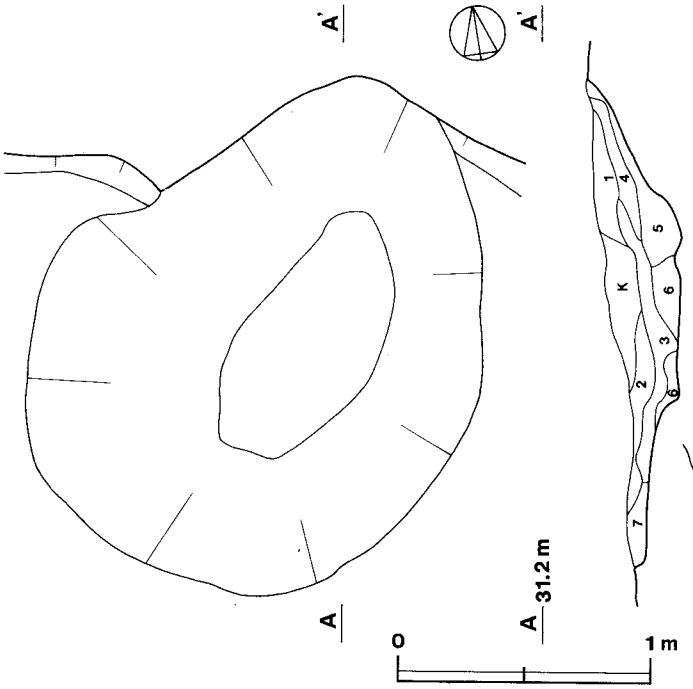
所見　本跡は，遺構の形態や出土遺物から奈良時代の住居跡と考えられる。

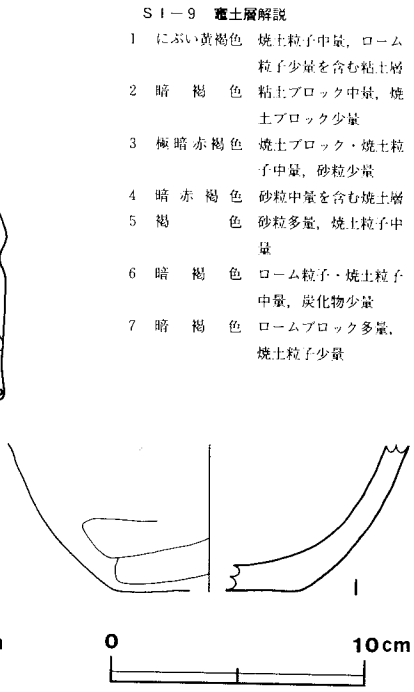


第24図　第９号住居跡実測図

第９号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第26図 1	甕 土師器	B(5.8) C[7.4]	平底。胴部は内彎気味に立ち上がる。	底部及び胴部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P36　10% 竈東側覆土





第25図　第９号住居跡竈実測図

第26図　第９号住居跡出土土器実測図

第10号住居跡（第27図）

位置　調査区の北部，C3c5区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸3.68ｍ，短軸3.66ｍの方形を呈している。

主軸方向　N－37°－E。

壁　壁高は18～22cmを測り，外傾して立ち上がっている。

床　全体に平坦である。

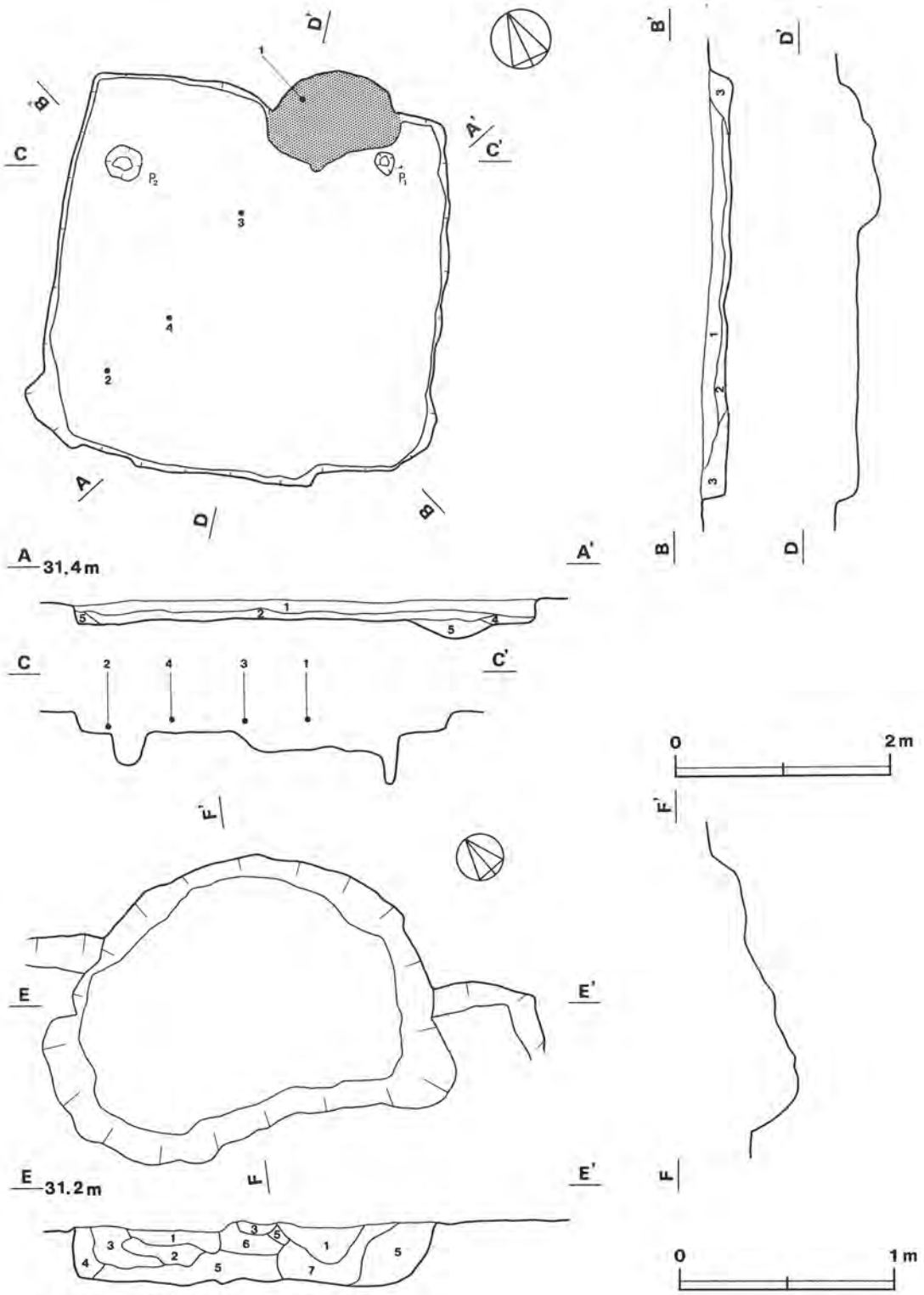
ピット　２か所（P_1・P_2）検出されている。P_1・P_2は径18～34cm，深さ30cmで，規模及び配列から主柱穴である。その他の主柱穴は検出されなかった。

竈　北壁中央部からやや東寄りにわずかに竈の痕跡が検出されている。袖部は残存していない。

覆土　自然堆積。

遺物　竈付近と南西コーナー付近から土師器（甕・坏）片が出土している。第28図(2)の土師器の甕は南西コーナー付近の覆土下層から，(4)の土師器の坏は中央部の覆土中層から出土している。そのほか，覆土からは縄文式土器片が出土しているが，これらは流れ込みと考えられる。

所見　本跡は，遺構の形態や出土遺物から奈良時代の住居跡と考えられる。



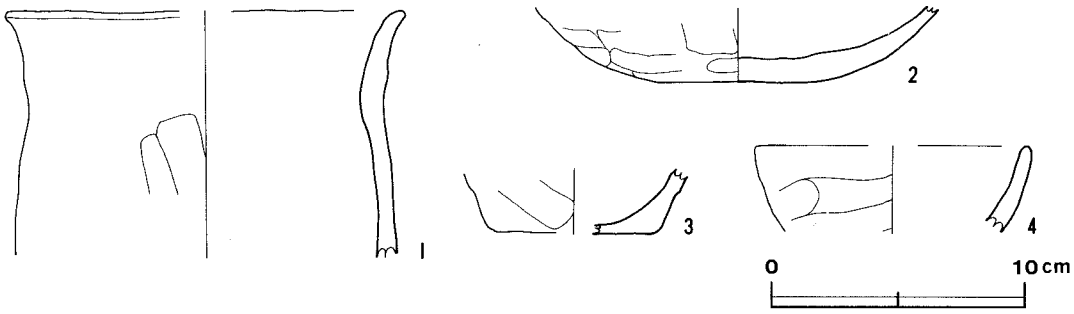
第27図　第10号住居跡・竈実測図

SI－10　土層解説

1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子少量
2　黒褐色　ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
3　黒褐色　ロームブロック・ローム粒子少量
4　暗褐色　ロームブロック多量
5　暗褐色　ローム粒子多量

SI－10　竈土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量
2　暗　褐　色　焼土ブロック・粘土粒子少量
3　オリーブ黄色　焼土粒子少量を含む粘土層
4　暗　褐　色　粘土ブロック中量，焼土粒子少量
5　黄　褐　色　ローム粒子多量
6　にぶい黄褐色　焼土粒子中量，砂粒少量
7　にぶい黄褐色　砂粒少量



第28図　第10号住居跡出土土器実測図

第10号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第28図 1	甕 土師器	A〔15.6〕 B(9.8)	胴下半部欠損。胴部は内彎しながら立ち上がり，口縁部で軽く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部縦位のヘラ削り。	砂粒・長石・スコリア 赤褐色，普通	P37　10% 竈西部覆土中層
2	甕 土師器	B(3.0) C　6.6	平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	底部及び胴部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・長石・スコリア 暗赤褐色，普通	P38　10% 南西コーナー付近覆土下層
3	甕 土師器	B(2.6) C〔 6.2〕	平底。底部と胴部の境が肥厚する。	底部及び胴部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P39　5% 中央部覆土中層
4	坏 土師器	A〔10.6〕 B(3.5)	底部欠損。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P40　40% 中央部覆土中層

第11号住居跡（第29図）

位置　調査区の南部，G6d2区を中心に確認されている。

規模と平面形　長軸3.26ｍ，短軸3.22ｍの方形を呈している。

主軸方向　N－7°－W。

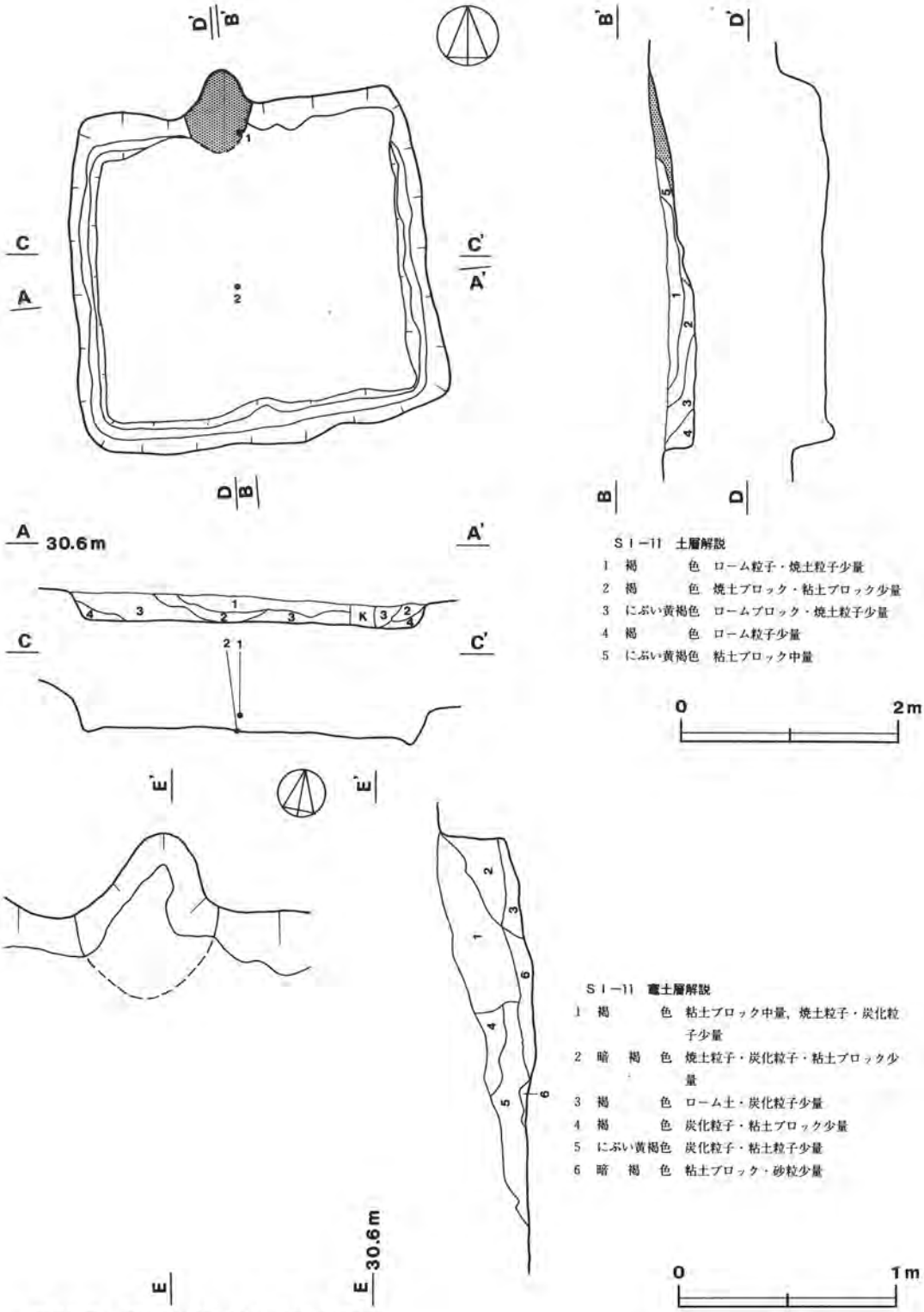
壁　壁高は28～30cmを測り，外傾して立ち上がっている。

壁溝　北壁中央部やや東寄りの部分を除いて，全ての壁下に検出されている。上幅24～36cm，深さ7～8cmで，断面形はU字状を呈している。

床　全体に平坦で，硬く締まっている。

ピット　検出されない。

竈　北壁中央部からやや西寄りの壁を掘り込み，砂混じりの粘土で構築されていたが，右側の袖



S I −11　土層解説

1　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子少量
2　褐　　色　焼土ブロック・粘土ブロック少量
3　にぶい黄褐色　ロームブロック・焼土粒子少量
4　褐　　色　ローム粒子少量
5　にぶい黄褐色　粘土ブロック中量

S I −11　竈土層解説

1　褐　　色　粘土ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗　褐　色　焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック少量
3　褐　　色　ローム土・炭化粒子少量
4　褐　　色　炭化粒子・粘土ブロック少量
5　にぶい黄褐色　炭化粒子・粘土粒子少量
6　暗　褐　色　粘土ブロック・砂粒少量

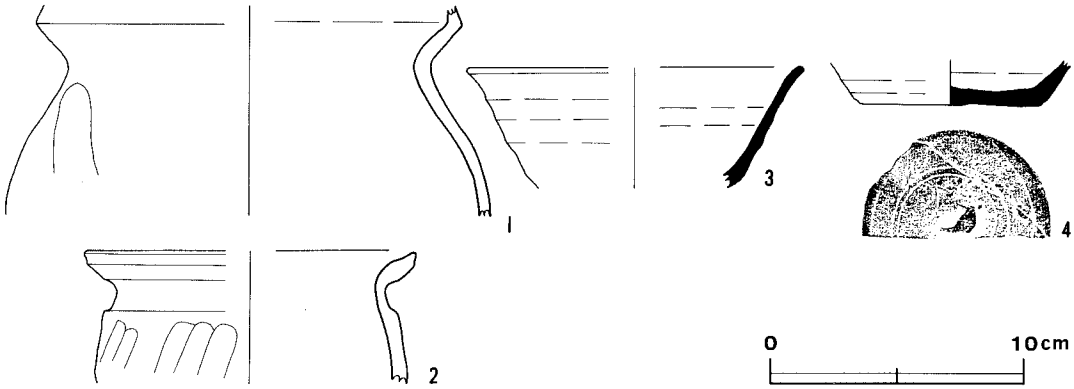
第29図　第11号住居跡・竈実測図

部がわずかに残存しているだけである。火床の掘り込みは認められない。

覆土　自然堆積。

遺物　竈燃焼部や床面中央部から土師器(甕・坏)片や須恵器(坏)片等が出土している。第30図(1)の土師器の甕は竈燃焼部から，(2)の土師器の甕は中央部の床面から出土している。そのほか，覆土からは縄文式土器片が出土しているが，これらは流れ込みと考えられる。

所見　本跡は，遺構の形態や出土遺物から平安時代の住居跡と考えられる。



第30図　第11号住居跡出土土器実測図

第11号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第30図 1	甕 土師器	B(8.3)	胴中央部以下欠損。胴部は内彎して立ち上がり，頸部でくびれ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母，にぶい褐色 普通	P41　10% 竈燃焼部
2	甕 土師器	A〔13.0〕 B(5.2)	胴中央部以下欠損。胴部は内彎しながら立ち上がり，頸部はくびれ，口縁部で外反する。	口縁部外面横ナデ。胴上半部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・長石・スコリア，にぶい橙色，普通	P42　10% 中央部床面
3	坏 須恵器	A〔13.1〕 B(4.7)	底部欠損。体部は外傾して直線的に立ち上がり，口縁部を丸くおさめる。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 オリーブ灰色 普通	P43　30% 覆土中層
4	坏 須恵器	B(1.8) C　7.2	平底。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・長石 灰色 普通	P44　25% 覆土中層

第12号住居跡（第31図）

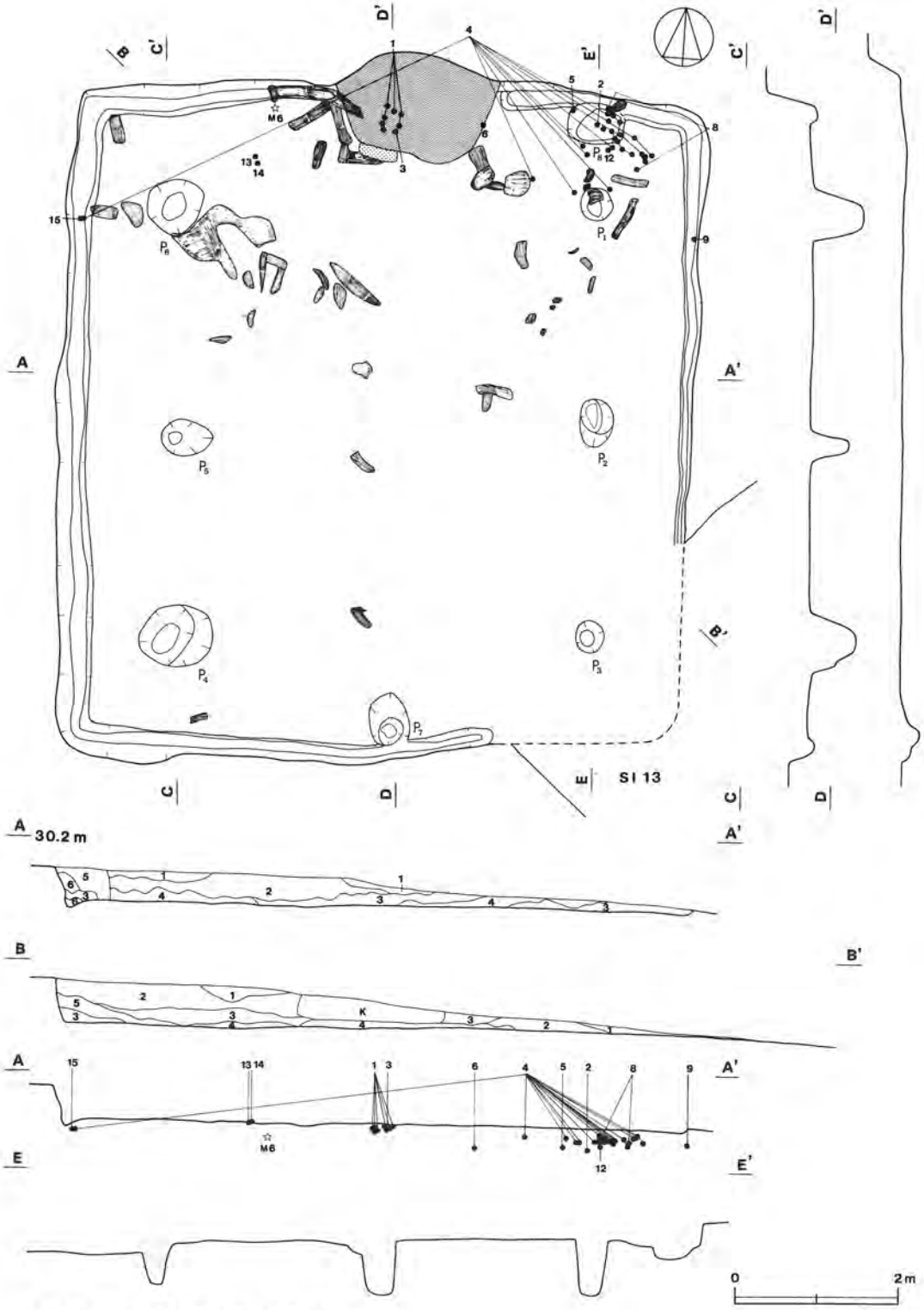
位置　調査区の南部，G6h3区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の南東コーナーは，第13号住居跡の西部に掘り込まれている。

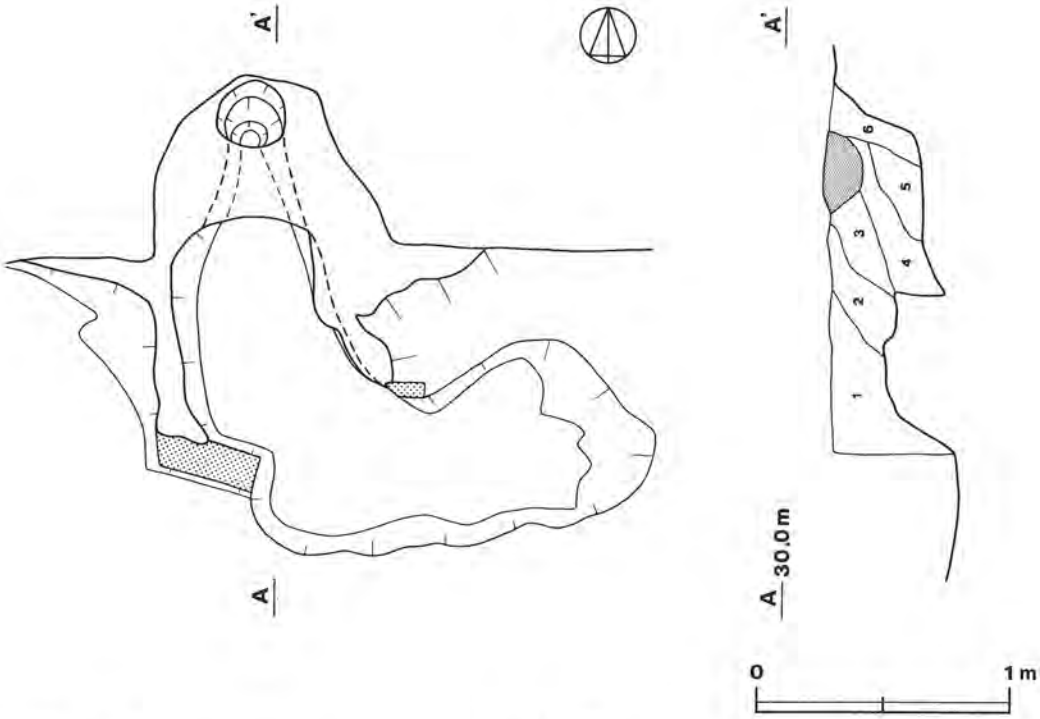
規模と平面形　長軸9.36 m，短軸7.86 mの長方形を呈している。

主軸方向　N－0°。

壁　南東コーナーの壁は，第13号住居跡に削平されているが，その他の壁は，壁高24～56cmを測り，外傾して立ち上がっている。



第31図　第12号住居跡実測図



S I－12 土層解説

1 にぶい黄褐色 ローム粒子中量，炭化粒子少量
2 にぶい黄褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量
3 暗 褐 色 炭化物中量，焼土ブロック少量
4 黒 褐 色 炭化物多量，焼土ブロック中量
5 黒 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック少量
6 黒 褐 色 ロームブロック中量，炭化粒子少量

S I－12 竈土層解説

1 褐 色 砂粒中量，焼土ブロック・炭化粒子・礫少量
2 褐 色 焼土ブロック中量，炭化粒子・砂粒少量
3 暗 褐 色 焼土ブロック・炭化粒子中量，砂粒少量
4 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量，炭化粒子・砂粒少量
5 黄 褐 色 粘土ブロック中量
6 にぶい赤褐色 炭化粒子・砂粒少量

第32図　第12号住居跡竈実測図

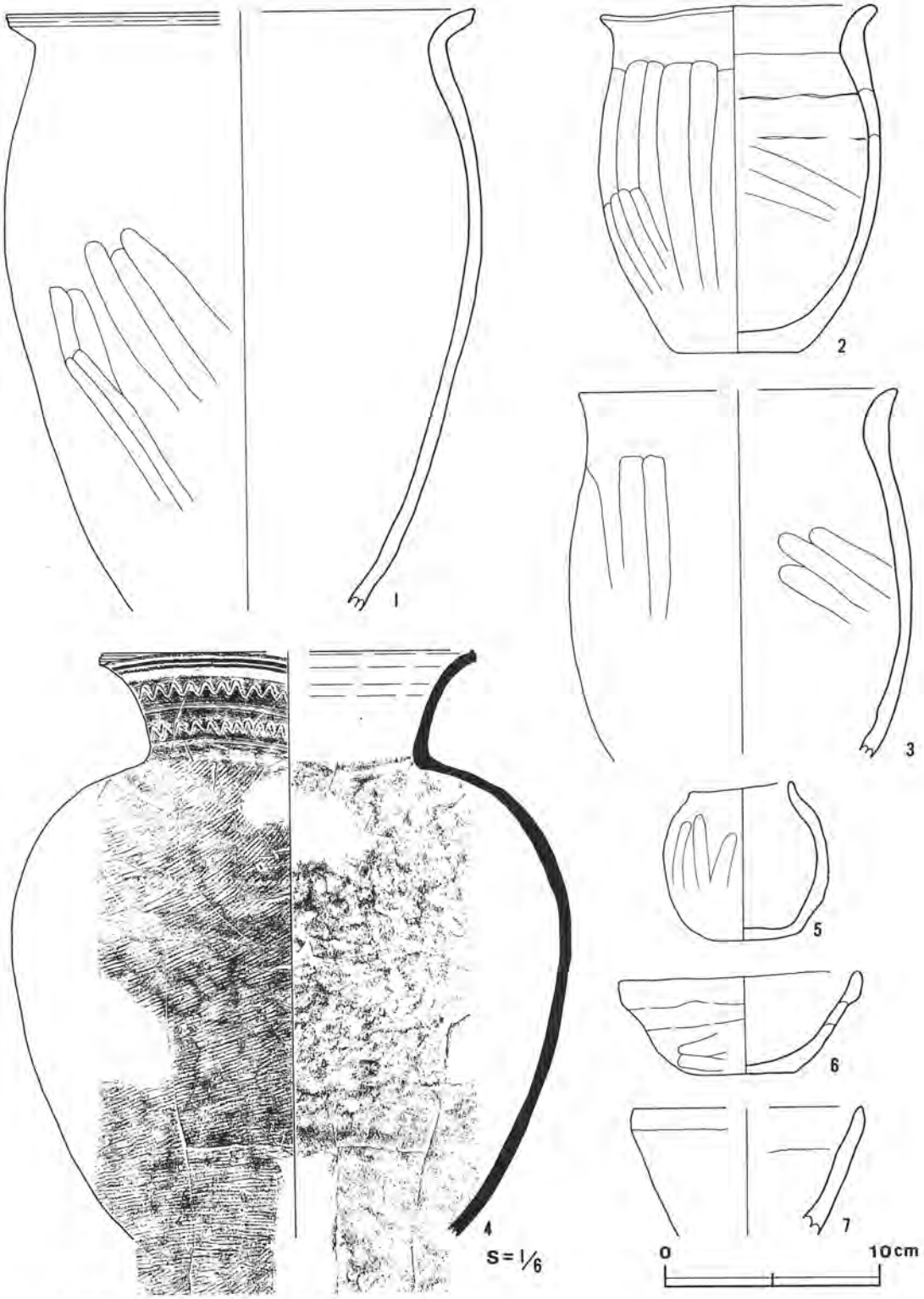
壁溝　削平された部分を除き，全周している。上幅20～44㎝，下幅8～20㎝，深さ9～10㎝で，断面形は皿状を呈している。

床　全体的に平坦であるが，赤く焼けている。

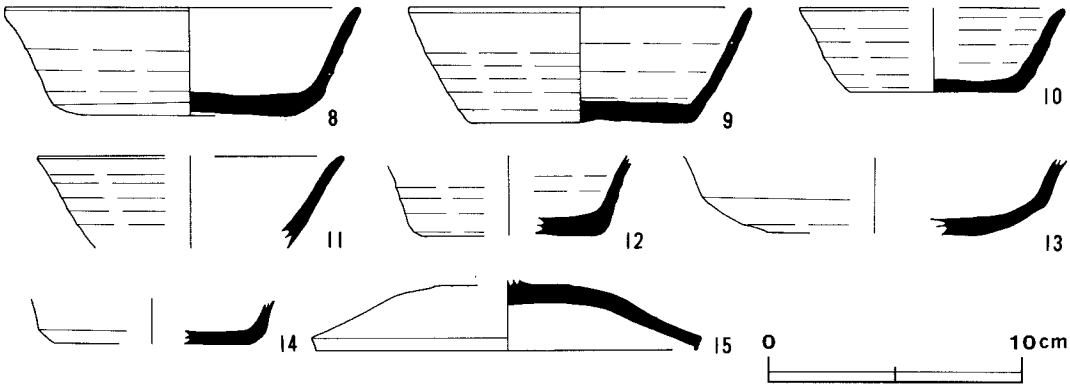
ピット　8か所（P_1～P_8）検出されている。P_1～P_6は径40～90㎝，深さ48～69㎝で，規模及び配列から主柱穴である。P_7は径48～60㎝，深さ18㎝で，出入口の施設に伴う梯子ピットと考えられる。P_8は径48～70㎝，深さ19㎝で，他のピットと比べて浅く，主柱穴とは考えられない。

竈　北壁中央部を63㎝程壁外に掘り込み，砂混じりの粘土で構築されている。規模は，長さ191㎝，幅245㎝を測る。天井部は崩落しているが，袖部は残存している。両袖部の南側から，14㎝×42㎝×6㎝，6㎝×14㎝×5㎝の角形の粘土ブロックが検出されており，袖部を強化するために使われたと考えられる。火床は床面を8㎝程掘り窪めている。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　自然堆積。



第33図　第12号住居跡出土土器実測図（Ⅰ）



第34図　第12号住居跡出土土器実測図(Ⅱ)

遺物　土師器(甕・坏)片，須恵器(坏・蓋)片，砥石，鉄製品(鎌・刀子・釘)等が，主に竈燃焼部や竈東側の床面及び覆土下層から出土している。第33図(1)の土師器の甕が竈燃焼部から，(2)の土師器の甕は竈東側の床面から出土している。第34図(8)の須恵器の坏は竈東側の覆土下層から出土している。

所見　本跡は，遺構の形状と出土遺物から平安時代の住居跡と考えられる。

また，本跡は床面から多量の炭化材が出土している状態から，焼失家屋と思われる。

第12号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第33図 1	甕 土師器	A〔21.7〕 B(28.2)	底部欠損。胴部は内彎しながら立ち上がり，頸部でくびれ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色，普通	P45　70% 竈燃焼部
2	甕 土師器	A 12.6 B 16.2 C 5.8	平底。胴部は内彎しながら立ち上がり，頸部はくびれ，口縁部で外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面縦方向のヘラ削り，内面斜位のヘラナデ。底部手持ちヘラ削り。輪積み痕が残る。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P46　100% 竈東側床面
3	甕 土師器	A〔14.7〕 B(17.2)	底部欠損。胴部は内彎しながら立ち上がり，頸部はくびれ，口縁部は軽く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面縦位のヘラ削り,内面ヘラナデ。	砂粒・長石・スコリア 橙色，普通	P47　10% 竈燃焼部
4	甕 須恵器	A〔34.4〕 B(55.0)	底部欠損。胴部は内彎気味に外傾した後，中位で頸部に向け大きく内彎して立ち上がる。頸部はくびれ，口縁部は外反し，端部は上方につまみ出される。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面横位の平行叩き目。	砂粒・長石 灰色 良好	P51　40% 北東コーナー付近・北西部覆土下層
5	甕 土師器	A 4.8 B 7.5 C 2.7	平底。胴部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は直立する。	胴部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ底部手持ちヘラ削り。	砂粒・長石・スコリア 浅黄色，普通	P48　100% 竈東側覆土下層
6	埦 土師器	A 11.0 B 4.7 C 4.6	平底。体部は内彎しながら立ち上がり,口縁部は直立気味となる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。底部手持ちヘラ削り。外面に輪積み痕が残る。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P49　100% 竈東袖部付近床面
7	手捏土器 土師器	A〔10.6〕 B(6.0)	底部欠損。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は軽く内彎する	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P50　20% 覆土下層

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第34図 8	坏 須恵器	A 14.1 B 4.4 C 8.5	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後，一方向のヘラ削り。	砂粒・長石 オリーブ灰色 普通	P52　95% 竈東側の覆土下層，底部にヘラ記号あり
9	坏 須恵器	A 13.5 B 4.6 C 8.9	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後，一方向のヘラ削り。	砂粒・長石 灰色 普通	P53　60% 東壁北部付近覆土下層
10	坏 須恵器	A〔10.6〕 B 3.4 C 6.6	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒 灰色 普通	P54　15% 竈覆土
11	坏 須恵器	A〔12.0〕 B(3.7)	底部欠損。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	P55　10% 覆土
12	坏 須恵器	B(3.2) C〔 7.0〕	平底。体部は外傾して立ち上がる。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。底部手持ちヘラ削り。	砂粒・長石 褐灰色 普通	P56　20% 北東コーナー付近覆土下層
13	坏 須恵器	B(3.0) C〔 8.5〕	平底。体部は外傾して立ち上がる。体部下位に稜を持つ。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・長石 緑灰色 普通	P57　10% 北西部覆土下層
14	坏 須恵器	B(1.8) C〔 7.8〕	平底。	体部内面横ナデ。体部下端回転ヘラ削り。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P58　10% 北西部覆土下層
15	蓋 須恵器	A 15.2 B(2.8)	つまみ欠損。天井部は丸く，なだらかに下降する。口縁部は屈曲し，端部は短く垂下する。	天井部回転ヘラ削り。	砂粒 灰白色 普通	P59　80% 西壁付近覆土下層　転用硯

第13号住居跡（第35図）

位置　調査区の南部，G6i_4区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の西部は，第12号住居跡の南東コーナーを掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸6.74 m，短軸5.94 mの方形を呈している。

主軸方向　残存している北壁から推定すると〔N－48°－E〕である。

壁　北壁と南部コーナー付近のみ検出されている。壁高は，5～8 cmを測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。

床　中央部から東側が高くなっている。中央部から西側は硬くなっている。

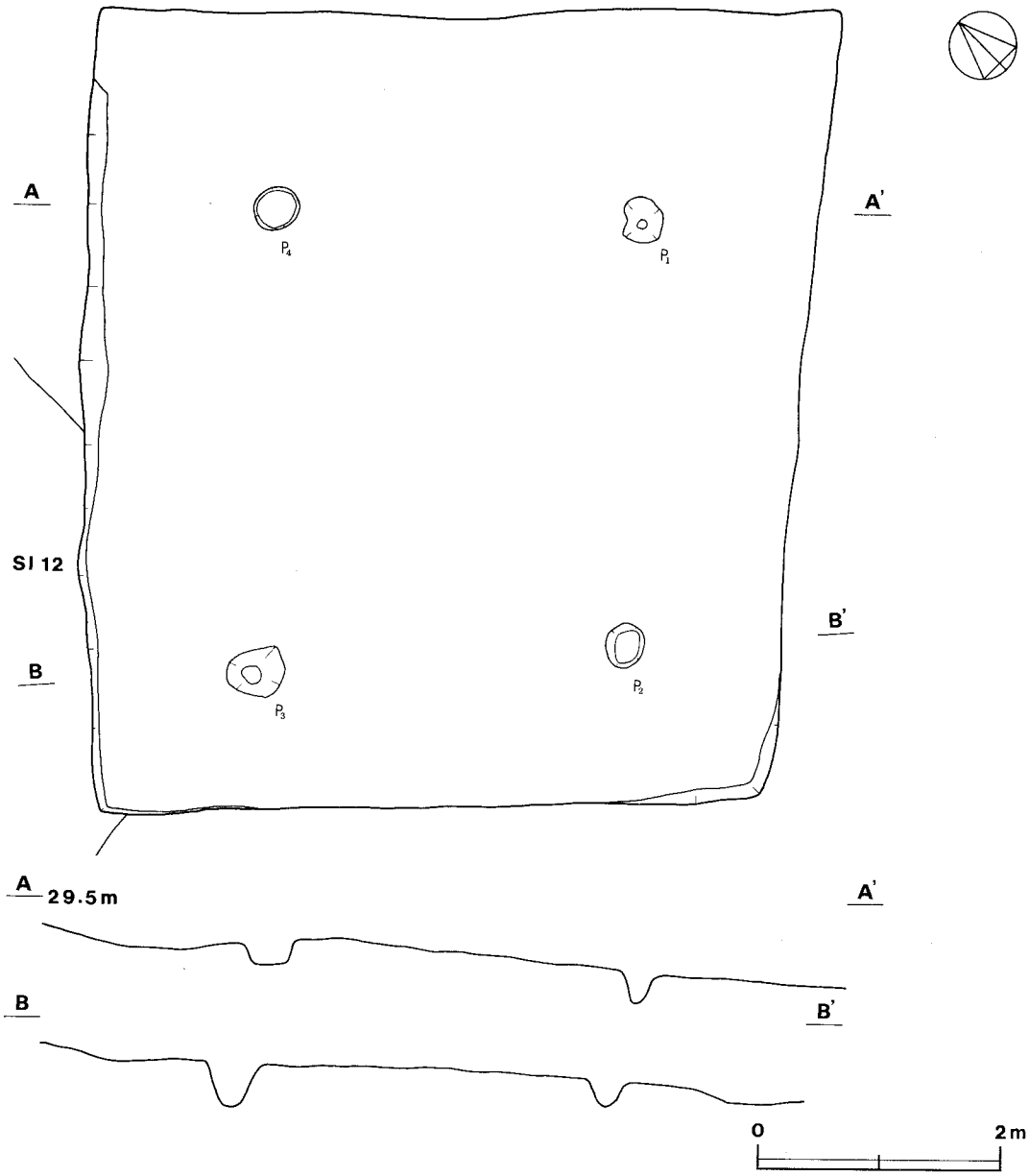
ピット　4か所(P_1～P_4)検出されている。P_1～P_4は径30～50 cm，深さ20～34 cmで，規模及び配列から主柱穴である。

竈　検出されない。

覆土　削平されており，堆積状況は不明である。

遺物　出土していない。

所見　本跡は，平安時代に比定される第12号住居跡を掘り込んでいることから，それ以降に構築されたと考えられる。



第35図　第13号住居跡実測図

2　土坑

当調査区からは，７基の土坑が検出されている。出土遺物が少なく，全て時期や性格を明らかにするまでには至らなかった。遺物が出土した土坑２基については，以下のとおり記載し，他は一覧表の中に掲載した。

第２号土坑（第36図）

位置　調査区の北部，B2f9区を中心に確認されている。

重複関係　本跡の北東部は，第１号溝に掘り込まれている。

規模と平面形　長径(3.06ｍ)，短径2.98ｍ，深さ0.28ｍ。楕円形を呈すると考えられる。

長径方向　N－55°－E。

壁面　外傾して立ち上がっている。

底面　おおむね平坦であるが，第１号溝に向かって緩やかに傾斜している。

覆土　自然堆積。

遺物　覆土中層，下層から，土師器片が出土している。第38図(1)の土師器の甕が中央部南寄りの覆土下層から，(2)の土師器の甕が中央部の覆土下層から出土している。覆土上層から縄文式土器片が出土している。

所見　本跡は，重複関係から第１号溝より古い時期に構築されたと考えられる。

第３号土坑（第36図）

位置　調査区の北部，B2f9区を中心に確認されている。

重複関係　本跡が第１号溝を掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸1.52ｍ，短軸(1.02ｍ)，深さ0.46ｍ。本跡の東部は調査区外に延びているが，ほぼ隅丸長方形を呈すると考えられる。

長軸方向　N－46°－W。

壁面　ローム質の砂層で，外傾して立ち上がっている。

底面　ローム質の砂層で，平坦である。

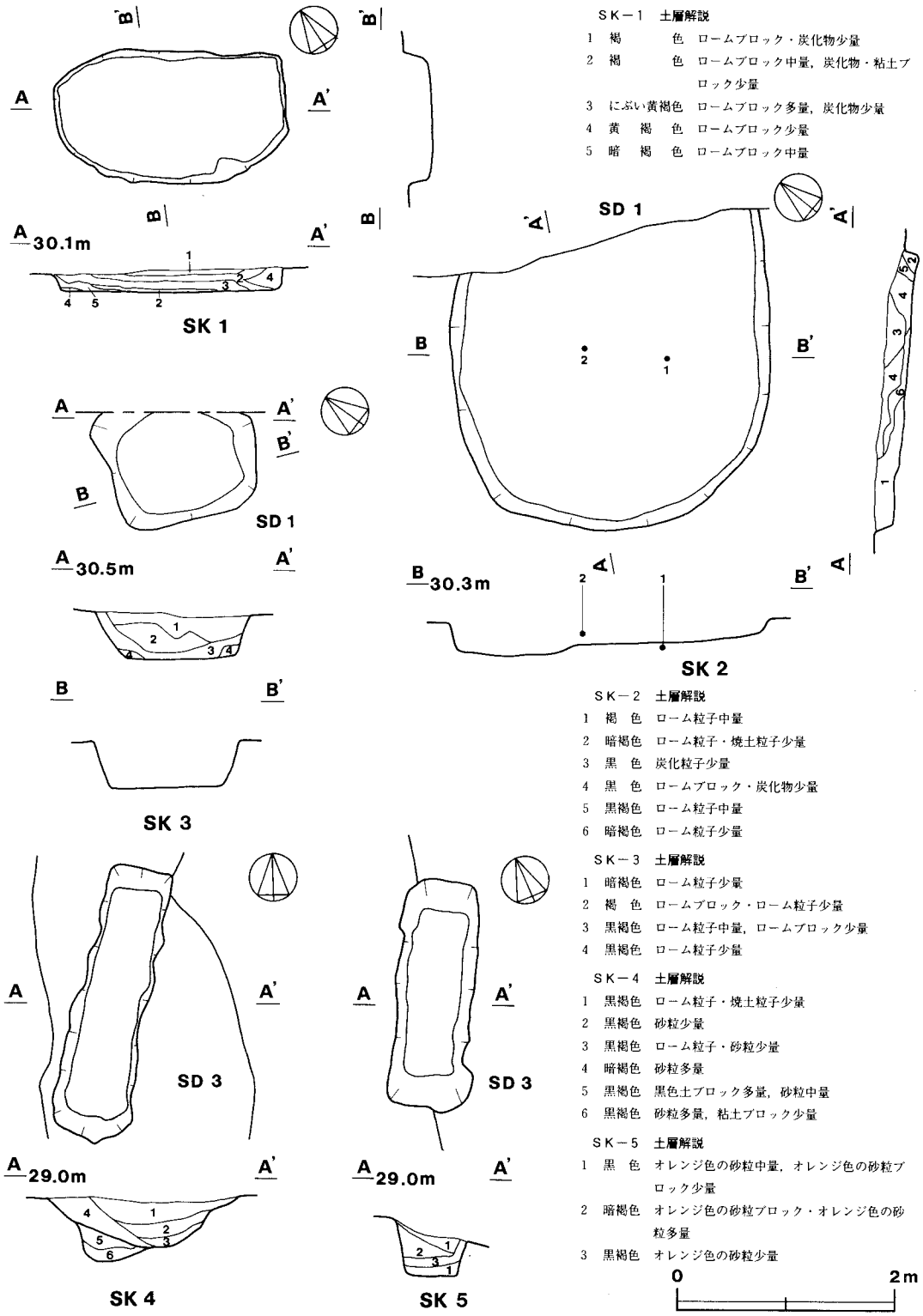
覆土　自然堆積。

遺物　覆土上層から，土師器(甕・坏)片と縄文式土器片が出土している。

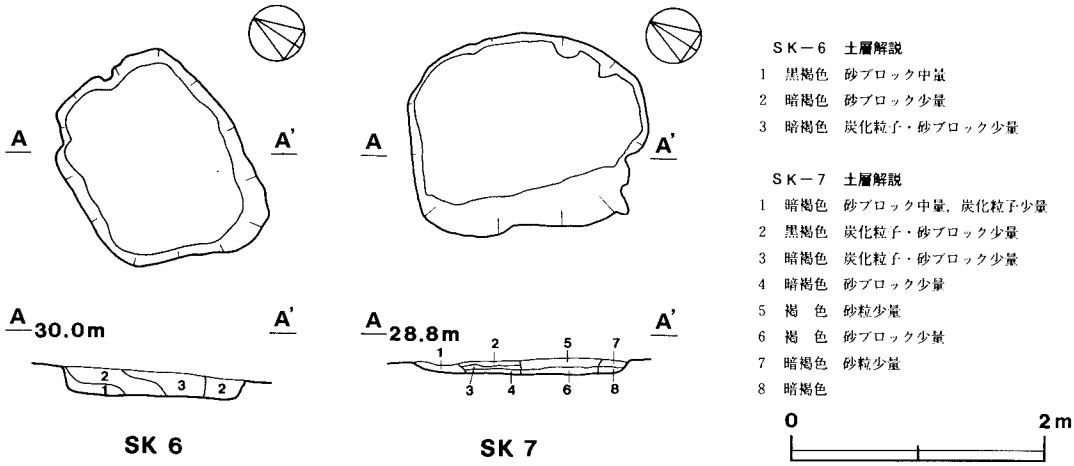
所見　本跡は，第１号溝との重複関係から奈良時代以降に構築されたと考えられる。

第２・３号土坑出土土器観察表

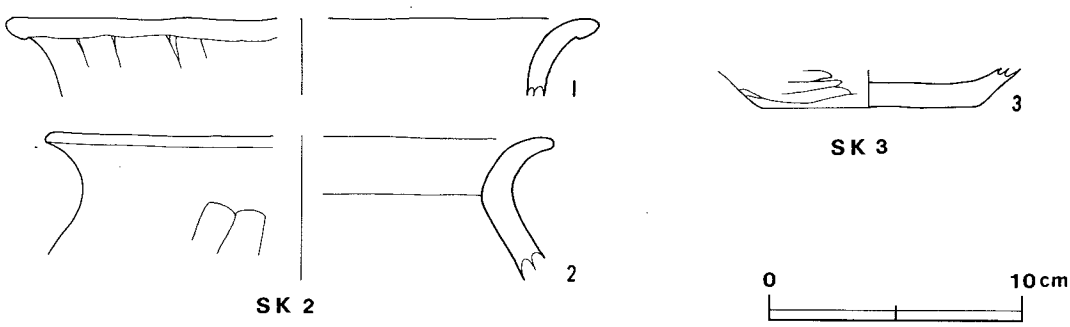
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 1	甕 土師器	A〔23.0〕 B(3.1)	胴部以下欠損。頸部はくびれ，口縁部で外反する。	口縁部外面横ナデ。	砂粒・長石 赤褐色 普通	P60，5％，第２号土坑中央部南寄り覆土
2	甕 土師器	A〔19.8〕 B(5.7)	胴部以下欠損。頸部はくびれ，口縁部で外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母，にぶい褐色 普通	P61，5％，第２号土坑中央部覆土下層
3	甕 土師器	B(1.5) C 8.6	平底。	底部及び胴部手持ちヘラ削り。	砂粒・長石・スコリア，にぶい橙色，普通	P62，5％，第３号土坑覆土


SK－1　土層解説
1　褐　　色　ロームブロック・炭化物少量
2　褐　　色　ロームブロック中量，炭化物・粘土ブロック少量
3　にぶい黄褐色　ロームブロック多量，炭化物少量
4　黄　褐　色　ロームブロック少量
5　暗　褐　色　ロームブロック中量
A 30.1m
SK 1
SD 1
A 30.5m
SK 3
SD 1
B 30.3m
SK 2
SK－2　土層解説
1　褐　色　ローム粒子中量
2　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子少量
3　黒　色　炭化粒子少量
4　黒　色　ロームブロック・炭化物少量
5　黒褐色　ローム粒子中量
6　暗褐色　ローム粒子少量
SK－3　土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量
2　褐　色　ロームブロック・ローム粒子少量
3　黒褐色　ローム粒子中量，ロームブロック少量
4　黒褐色　ローム粒子少量
SK－4　土層解説
1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子少量
2　黒褐色　砂粒少量
3　黒褐色　ローム粒子・砂粒少量
4　暗褐色　砂粒多量
5　黒褐色　黒色土ブロック多量，砂粒中量
6　黒褐色　砂粒多量，粘土ブロック少量
SK－5　土層解説
1　黒　色　オレンジ色の砂粒中量，オレンジ色の砂粒ブロック少量
2　暗褐色　オレンジ色の砂粒ブロック・オレンジ色の砂粒多量
3　黒褐色　オレンジ色の砂粒少量
0
2m
SD 3
A 29.0m
SK 4
SD 3
A 29.0m
SK 5

第36図　土坑実測図（Ⅰ）



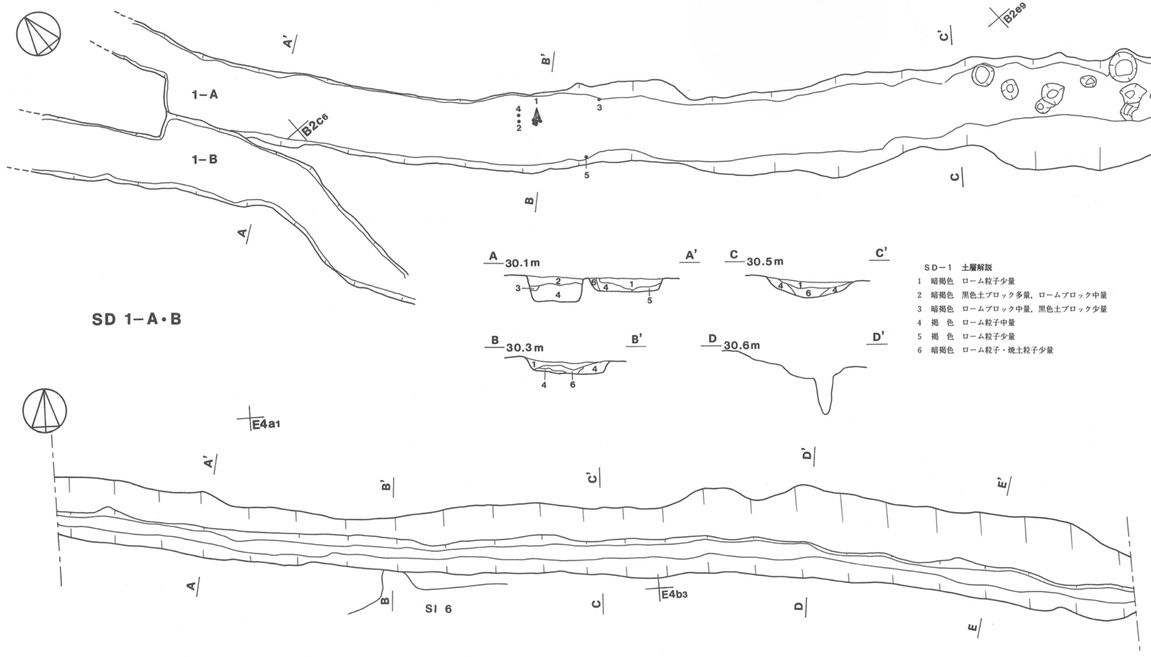
第37図　土坑実測図(Ⅱ)



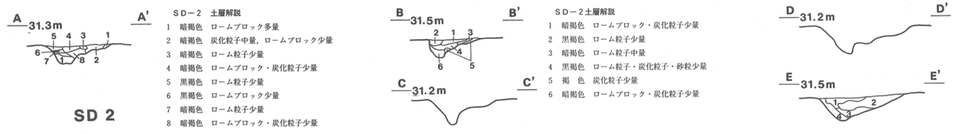
第38図　第２・３号土坑出土土器実測図

表２　東原遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向(長軸方向)	平面形	規模(m) 長径×短径(長軸×短軸)	規模(m) 深さ	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考	図版番号
1	B2c7	N－56°－W	隅丸長方形	2.12×1.22	0.28	外傾	平坦	自然			第36図
2	B2d6	N－55°－E	〔楕円形〕	(3.06)×2.98	0.28	外傾	平坦	自然	土師器片38点(甕片,坏片),縄文式土器片８点	ＳＤ－１と重複	第36図
3	B2f9	N－46°－W	〔隅丸長方形〕	1.52×(1.02)	0.46	外傾	平坦	自然	土師器片12点(甕片,坏片),縄文式土器片１点	ＳＤ－１と重複	第36図
4	F4b0	N－17°－E	隅丸長方形	2.56×0.58	0.58	垂直	皿状	自然		ＳＤ－３と重複	第36図
5	F4b0	N－33°－E	隅丸長方形	2.12×0.72	0.56	垂直	平坦	自然		ＳＤ－３と重複	第36図
6	F5g5	N－27°－E	隅丸長方形	1.76×1.38	0.24	外傾	平坦	自然			第37図
7	F5g5	N－40°－W	楕円形	1.88×1.52	0.12	外傾	平坦	自然			第37図



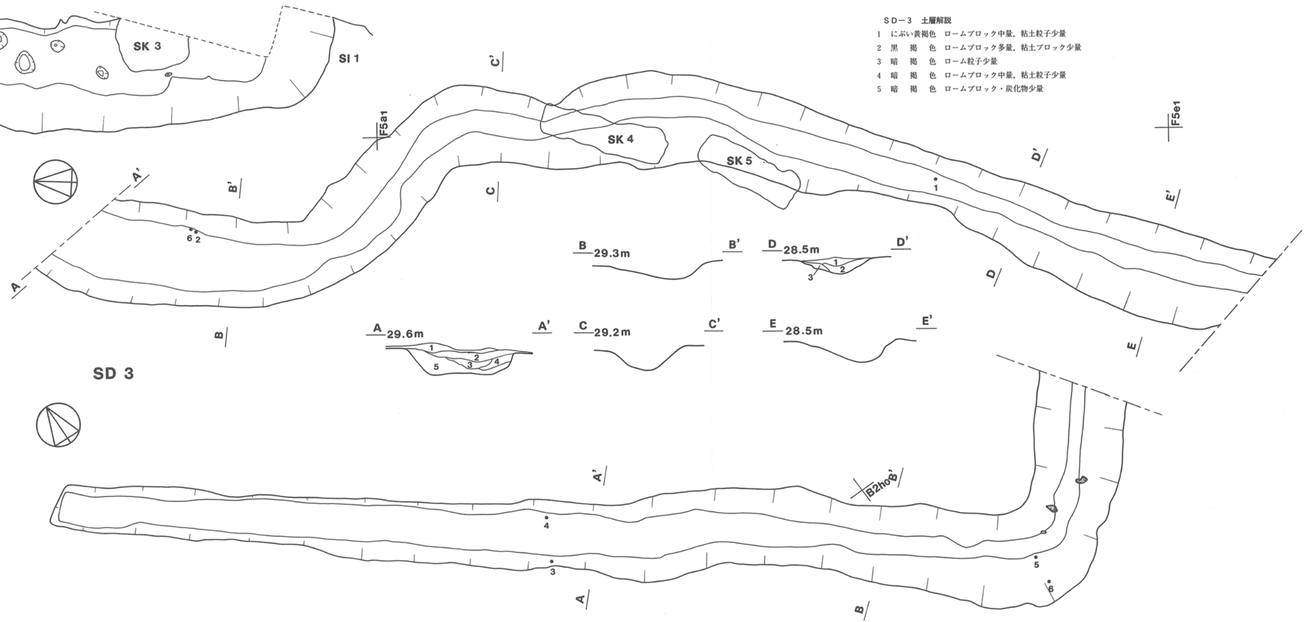
SD−1 土層解説
1 暗褐色 ローム粒子少量
2 暗褐色 黒色土ブロック多量，ロームブロック中量
3 暗褐色 ロームブロック中量，黒色土ブロック少量
4 褐 色 ローム粒子中量
5 褐 色 ローム粒子少量
6 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量



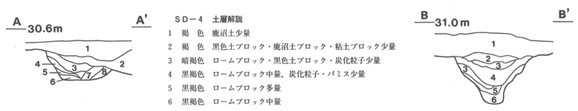
SD−2 土層解説
1 暗褐色 ロームブロック多量
2 暗褐色 炭化粒子中量，ロームブロック少量
3 暗褐色 ローム粒子少量
4 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
5 黒褐色 ローム粒子少量
6 黒褐色 ロームブロック少量
7 暗褐色 ローム粒子少量
8 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

SD−2土層解説
1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
2 黒褐色 ローム粒子少量
3 暗褐色 ローム粒子中量
4 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量
5 褐 色 炭化粒子少量
6 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

SD−2 土層解説
1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
2 暗褐色 ロームブロック中量
3 暗褐色 ローム粒子少量
4 褐 色 ローム粒子少量



SD−3 土層解説
1 にぶい黄褐色 ロームブロック中量，粘土粒子少量
2 黒 褐 色 ロームブロック多量，粘土ブロック少量
3 暗 褐 色 ローム粒子少量
4 暗 褐 色 ロームブロック中量，粘土粒子少量
5 暗 褐 色 ロームブロック・炭化物少量



SD−4 土層解説
1 褐 色 腐沼土少量
2 褐 色 黒色土ブロック・腐沼土ブロック・粘土ブロック少量
3 暗褐色 ロームブロック・黒色土ブロック・炭化粒子少量
4 黒褐色 ロームブロック中量，炭化粒子・パミス少量
5 黒褐色 ロームブロック多量
6 黒褐色 ロームブロック中量
7 黒褐色 ロームブロック中量
8 褐 色 ローム粒子少量

SD−4 土層解説
1 暗褐色 耕作土
2 暗褐色 ロームブロック少量
3 黒褐色 ロームブロック中量
4 黒褐色 ローム粒子中量，ロームブロック少量
5 黒褐色 ローム粒子多量，黒色土ブロック少量
6 褐 色 パミス中量

0 2m

第39図 第1−A・1−B・2・3・4号溝実測図

第１－Ａ号溝（第39図）

位置　調査区の北部，B2区に確認されている。本跡の両端は調査区外に伸びている。

重複関係　B2g_0区で第１号住居跡を掘り込み，B2f_9区で第３号土坑に掘り込まれている。B2b_5区で第１－Ｂ号溝と重複している。

規模と形状　全長は約27.56ｍ，上幅0.82～2.32ｍ，下幅0.70～1.36ｍ，深さ18～32㎝で，断面形は皿状を呈し，北東部に凹凸があるが，ほぼ全体的に平坦である。

方向　B2g_0区で北東から北西（Ｎ－47°－Ｗ）へ向きを変え，ほぼ直線的に延びている。

覆土　自然堆積。

遺物　底面及び覆土から，土師器（甕・坏）片，須恵器（坏・高台付坏）片，縄文式土器片，砥石，古銭が出土している。第40図(1)，(2)の土師器の甕と(3)の土師器の坏が北西部の底面から出土している。

所見　奈良時代に比定される第１号住居跡を掘り込んでいることから，それ以降に構築されたと考えられる。

第１－Ｂ号溝（第39図）

位置　調査区の北部，B2区に確認されている。本跡の両端は調査区外に延びている。

重複関係　B2b_5区で，第１－Ａ号溝と重複している。

規模と形状　全長は約8.80ｍ，上幅0.44～1.44ｍ，下幅0.28～1.22ｍ，深さ52～58㎝で，断面形は「Ｕ」字状を呈し，底面は平坦である。

方向　B2c_5区で北から北西（Ｎ－47°－Ｗ）へ向きを変え，直線的に延びている。

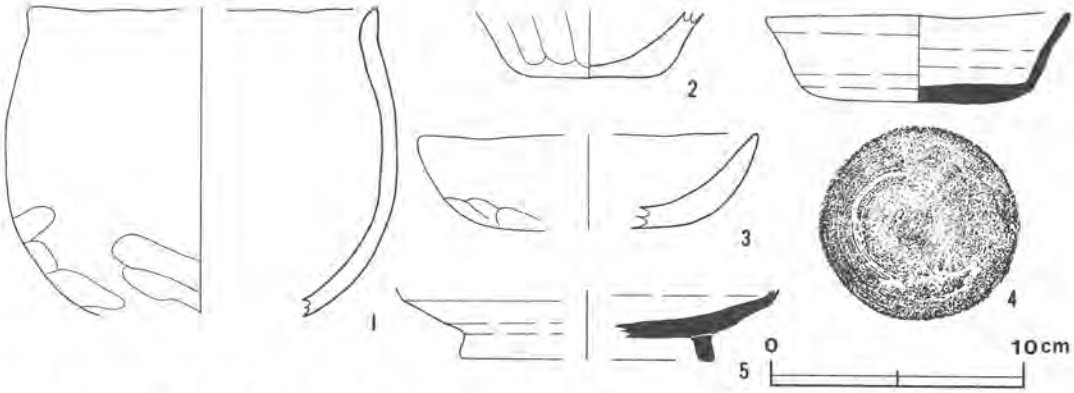
覆土　自然堆積。

遺物　覆土から，土師器や須恵器の細片が少量出土している。

所見　本跡の全容を把握することができず，出土遺物が細片で時期を決定することはできなかった。

第１－Ａ号溝出土土器観察表

図版番号	器種	法量(㎝)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 1	甕 土師器	A〔14.0〕 B(12.3)	底部欠損。胴部は内彎しながら立ち上がり，頸部は軽くくびれ，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母，にぶい橙色 普通	P66　30% 北西部の底面
2	甕 土師器	B(2.7) C〔 5.6〕	平底。底部と胴部の境が肥厚する。	底部及び胴部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・長石 橙色 普通	P67　10% 北西部の底面
3	坏 土師器	A〔13.5〕 B(3.8) C〔 6.5〕	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内面横ナデ。体部外面ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 橙色，普通	P68　25% 北西部の底面



第40図　第１－Ａ号溝出土土器実測図

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第40図 4	坏 須恵器	A 12.1 B 3.7 C 7.8	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部で軽く外反する。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。底部及び体部下端回転ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 灰色，普通	P69　90% 北西部の覆土
5	高台付坏 須恵器	B(2.8) D[10.0] E 1.0	底部は平底で，ほぼ直立する高台が付く。体部は外傾して立ち上がる。体部と口縁部との境に稜を有する。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・長石 明褐灰色 普通	P70　10% 北西部の覆土下層

第２号溝（第39図）

位置　調査区の中央部，E3・E4区に確認されている。本跡の両端は，調査区外に延びている。

重複関係　本跡は，E4a1区で第６号住居跡の竈を掘り込んでいる。

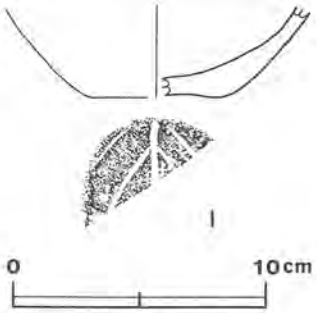
規模と形状　全長は約21.74ｍ，上幅1.18～1.90ｍ，下幅0.36～0.40ｍ，深さ40～54㎝で，断面形は逆台形を呈し，底面は凹凸している。

方向　E4b4区からほぼ西（Ｎ－80°－Ｗ）へ直線的に延びている。

覆土　自然堆積。

遺物　覆土上層から，土師器（甕）片，須恵器（坏）片が少量と鉄製品（釘）が出土している。

所見　本跡は，奈良時代の第６号住居跡を掘り込んでいることから，この時代以降の溝と思われる。



第41図　第２号溝出土土器実測図

第２号溝出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第41図 1	甕 土師器	B(3.7) C[5.5]	平底。胴部は内彎ぎみに立ち上がる。	胴部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。底部に木葉痕が残る。	砂粒・長石・石英，にぶい褐色 普通	P71　5% 覆土上層

第３号溝（第39図）

位置　調査区の南部，E4・F4・F5区に確認されている。本跡の両端は調査区外に延びている。

重複関係　本跡は，F4b₀区で第４号土坑と第５号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状　全長は約25.04ｍ，上幅1.06～2.06ｍ，下幅0.24～1.26ｍ，深さ38～52㎝で，断面形は逆台形を呈し，底面は凹凸している。

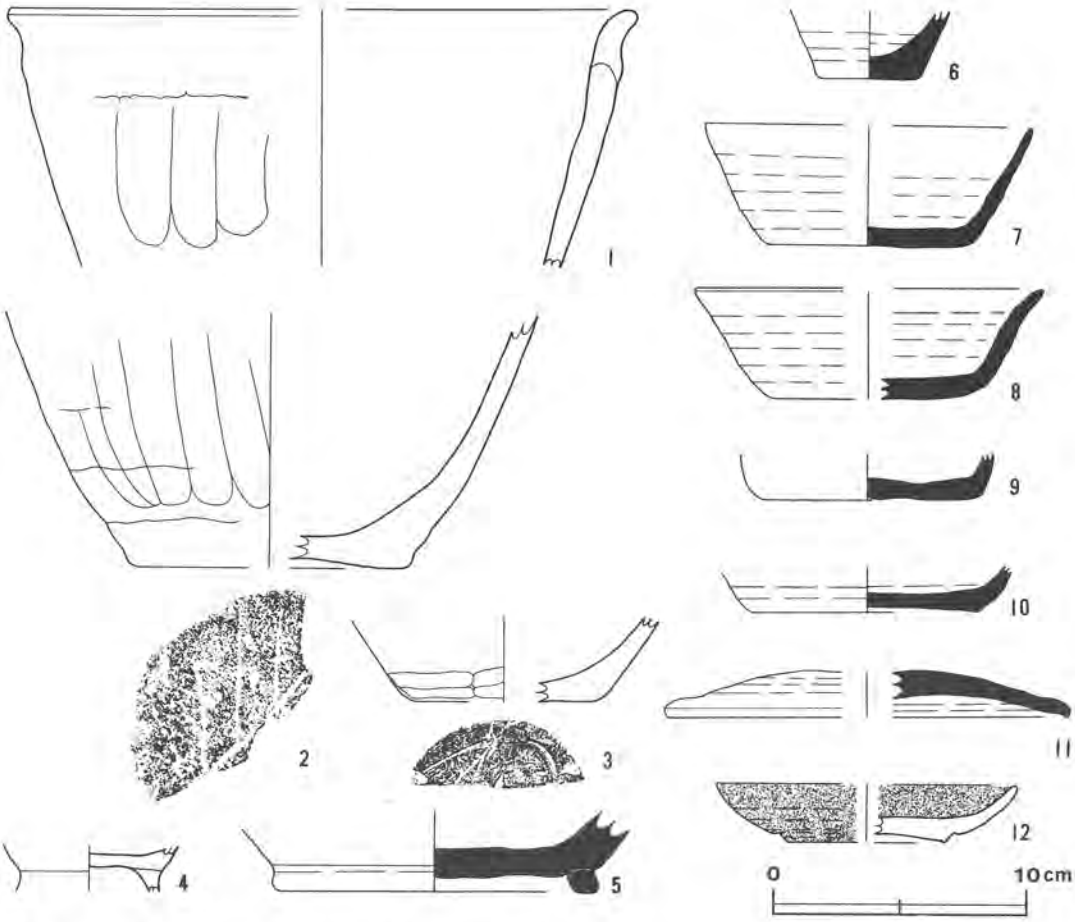
方向　F4e₀区からほぼ北東（Ｎ－20°－Ｅ）へ蛇行しながら延びている。

覆土　自然堆積。

遺物　覆土から，土師器（甕・高台付坏）片，須恵器（壺・坏）片や陶器片が出土している。

また，砥石，敲石，磨石，石皿等が，投棄された状態でまとまって出土している。

所見　遺物は流れ込みと考えられ，本跡の時期を決定することはできなかった。



第42図　第３号溝出土土器実測図

第3号溝出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42図 1	甕 土師器	A〔24.6〕 B(10.2)	胴下半部欠損。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は器厚を減じながら外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部縦位のヘラ削り。	砂粒・長石・雲母，暗赤褐色 普通	P72　20% 南西部覆土下層
2	甕 土師器	B(10.1) C〔11.0〕	平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部外面ヘラ削り。内面は摩耗が激しく整形不明。外面に輪積み痕が残る。底部に木葉痕が残る。	砂粒・長石 明赤褐色 不良	P73　20% 北部覆土
3	甕 土師器	B(3.4) C〔 7.4〕	平底。胴部は外傾して立ち上がる。	胴部外面下端横位のヘラ削り，内面ヘラナデ。底部に木葉痕が残る。	砂粒・長石 橙色 普通	P74　5% 東部覆土
4	高台付坏 土師器	B(1.8) E(0.8)	平底。底部と体部との境にほぼ直立する高台が付く。	底部内面ヘラナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P75　20% 覆土
5	壺 須恵器	B(3.2) D 12.8 E 0.8	底部と胴部との境に短く外側へ張る高台が付く。	高台貼り付け。	砂粒・長石・礫 灰白色 良好	P76　5% 覆土
6	壺 須恵器	B(2.7) C 3.8	平底。胴部は外傾して立ち上がる。	底部及び胴部下端手持ちヘラ削り。	砂粒 黄灰色 普通	P77　10% 北部覆土
7	坏 須恵器	A〔12.9〕 B 4.8 C 7.6	平底。体部は外傾して直線的に立ち上がる。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。底部及び体部下端回転ヘラ削り。	砂粒・長石 黄灰色 普通	P78　40% 東部覆土
8	坏 須恵器	A〔13.8〕 B 4.4 C〔 7.4〕	平底。体部は外傾して直線的に立ち上がり，口縁部で外反する。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。底部及び体部下端回転ヘラ削り。	細砂・長石・礫 灰白色 普通	P79　10% 東部覆土
9	坏 須恵器	B(1.8) C 8.4	平底。	体部内・外面ナデ。底部手持ちヘラ削り。	砂粒・パミス・長石，にぶい橙色，普通	P80　15% 覆土
10	坏 須恵器	B(1.8) C〔 9.0〕	平底。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。底部及び体部回転ヘラ削り。	細砂・長石 黄灰色 良好	P81　15% 東部覆土
11	蓋 須恵器	A〔16.0〕 B(1.9)	天井部は丸く，なだらかに下降する。口縁部は屈曲し，端部は短く垂下する。	水挽き成形。天井部回転ヘラ削り。	砂粒・長石 黄灰色 普通	P82　20% 覆土
12	皿 灰釉陶器	A〔12.0〕 B 2.3 D〔 6.3〕 E 0.4	平底で，短い高台が付く。体部は内彎気味に立ち上がり，口唇部を丸くおさめる。	水挽き成形。	砂粒 灰白色 普通	P83　10% 覆土

第4号溝（第39図）

位置　調査区の北部，B2・B3区に確認されている。

規模と形状　全長約23.50m，上幅0.94～1.96m，下幅0.20～0.88m，深さ80～106cmで，断面形は逆台形を呈し，底面は平坦である。

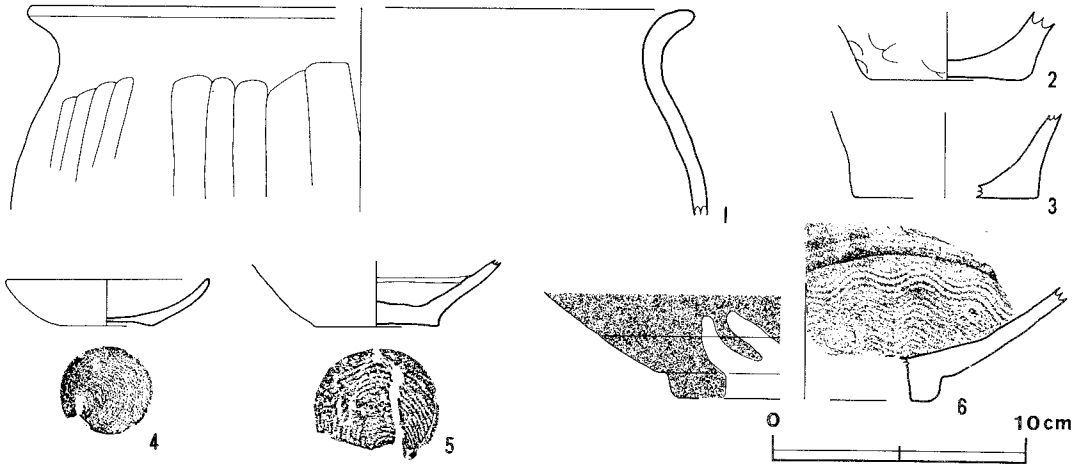
方向　B2h₀区で南西から北西（N－48°－W）へ向きを変え，ほぼ直線的に延びている。

覆土　全体的にロームブロックを含んでおり，人為的に埋め戻された様相を呈している。

遺物　覆土上・中層から土師器（甕・坏）片，陶器片，砥石，石器（敲石・磨石・打製石斧），土製

品（土器片錘），鉄製品(釘)，古銭が出土している。

所見　遺物は流れ込みと考えられ，本跡の時期を決定することはできなかった。



第43図　第４号溝出土土器実測図

第４号溝出土土器観察表

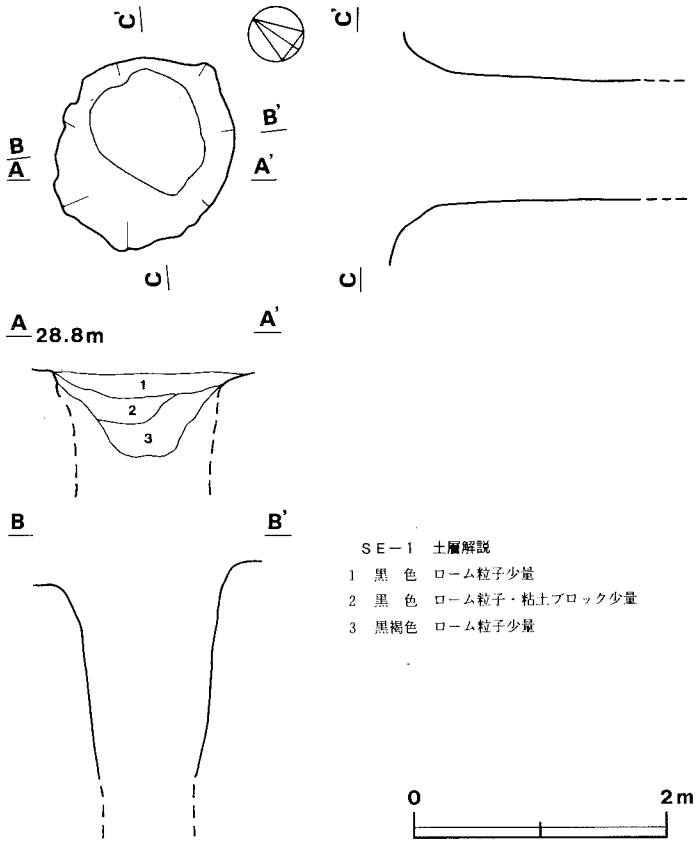
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第43図 1	甕 土師器	A〔26.0〕 B(8.1)	胴下半部欠損。胴部は内彎しながら立ち上がり，頸部でくびれ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面縦位のヘラ削り。	砂粒・長石 橙色 普通	P84　10% 覆土
2	甕 土師器	B(2.7) C　6.6	平底。底部と胴部の境が肥厚している。胴部は外傾して立ち上がる。	底部及び胴部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・長石・石英，にぶい橙色 普通	P85　5% 覆土
3	甕 土師器	B(3.4) C〔 7.4〕	平底。胴部は外傾して立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ。底部手持ちヘラ削り。	砂粒・石英・長石，にぶい黄橙色，普通	P86　5% 北西部覆土
4	坏 土師質土器	A　7.9 B　1.8 C　3.8	平底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部に至る。	体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア・パミス・石英・雲母・長石，にぶい黄橙色，普通	P87　98% 北西部覆土
5	坏 土師質土器	B　2.6 C　5.0	平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内面ヘラナデ。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア・雲母・礫，にぶい橙色，普通	P88　30% 南東部覆土
6	皿 陶器	B(4.6) D〔10.2〕 E　1.0	平底で，ほぼ直立する高台が付く。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面横ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	P89　5% 南東部覆土

4　井戸

第１号井戸（第44図）

位置　調査区の南部，F5h6区に確認されている。

規模と形状　掘り方は，上面が，長径1.66ｍ，短径1.44ｍの不正円形を呈し，深さは2.00ｍで，円筒形を呈している。

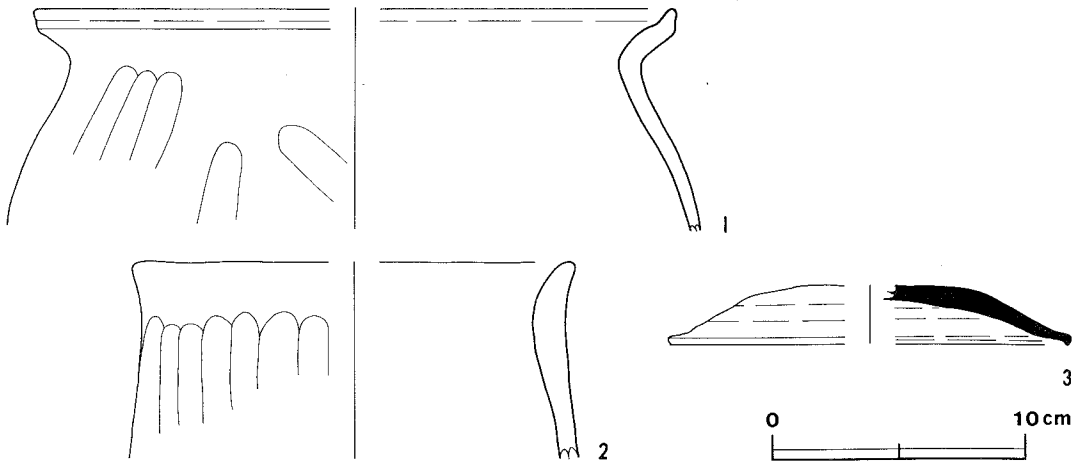


第44図　第１号井戸実測図

覆土　自然堆積。

遺物　覆土から土師器(甕)片や須恵器(蓋)片が出土している。

所見　素掘りの井戸で，確認面から2.00ｍの深さまで調査したが，涌き水による壁の崩落が著しく，それ以下の調査は不可能であった。



第45図　第１号井戸出土土器実測図

第１号井戸出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 1	甕 土師器	A〔25.3〕 B(8.8)	胴部は内彎気味に立ち上がり，頸部はくびれ，口唇部をつまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 明褐色，普通	P63　10% 覆土
2	甕 土師器	A〔17.0〕 B(7.8)	胴下半部穴損。胴部は直立ぎみに立ち上がり，口縁部は軽く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色，普通	P64　10% 覆土
3	蓋 須恵器	A〔15.8〕 B(2.3)	天井部は丸く，なだらかに下降する。口縁部は屈曲し，端部は短く垂下する。	水挽き成形。天井部は回転ヘラ削り。	砂粒・長石・礫 黄灰色 普通	P65　40% 覆土

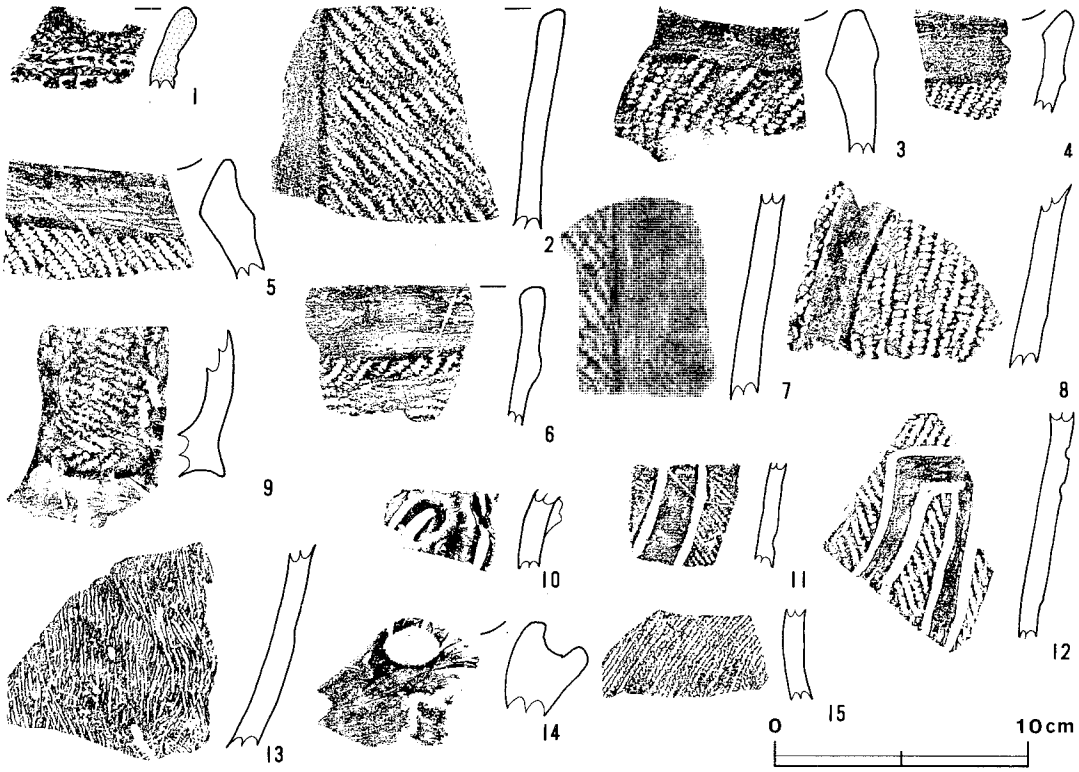
5　その他の遺物

(1)　遺構外出土土器

当調査区からは，遺構に伴わない縄文式土器片，弥生式土器片，土師器片，須恵器片及び陶器片が出土している。これらの遺物について，拓影図，実測図及び観察表でその一部を紹介する。

縄文式土器拓影図（第46図）

１は口縁部片で，横位に刺突が施されている。前期前葉の黒浜式に比定される。２～６は口縁部片である。２は，縄文を地文とし，これを幅広に磨消して文様帯を構成している。３・４・５は，口唇直下を無文とし，その下に縄文を施している。６は，隆帯により，無文帯と縄文帯を区

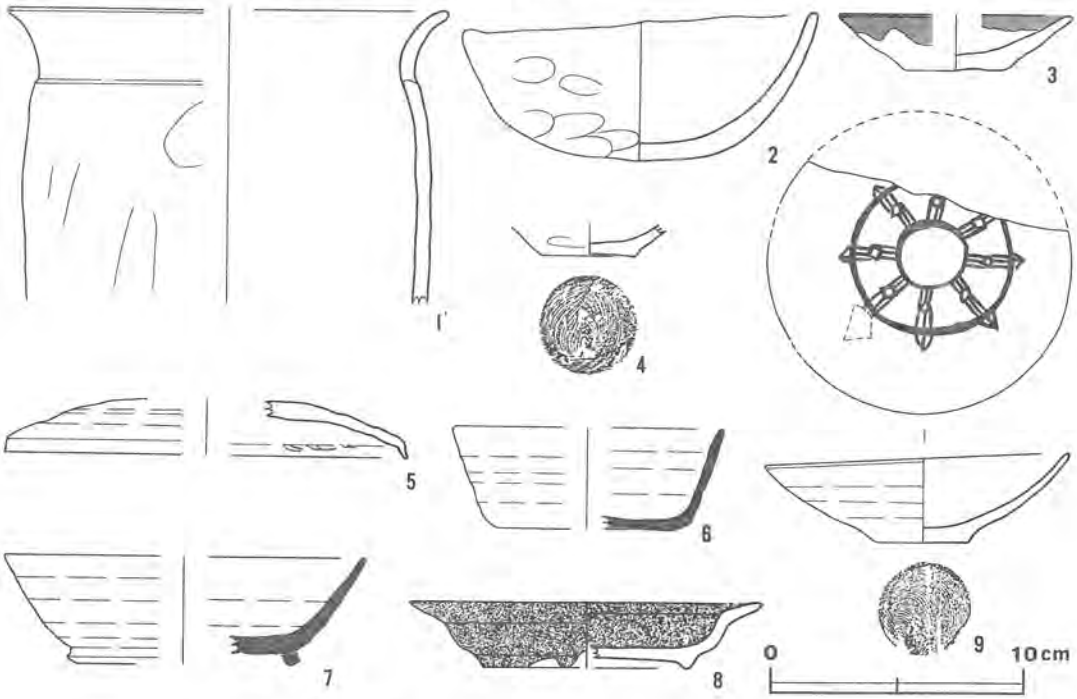


第46図　遺構外出土土器拓影図

画している。7・8は胴部片で，縄文を地文とし，これを幅広に磨消して文様帯を構成している。9は橋状把手で，外面に縄文が施されている。2～9は加曽利E式に比定される。10は胴部片で，連鎖状隆線が施されている。11～13は胴部片である。11・12は縄文を地文とし，沈線による区画内を磨消して文様帯を構成している。13は無節縄文が施されている。11～13は後期の称名寺式に比定される。14は口縁部片で，口縁部が肥厚しており，後期の堀之内式に比定される。

弥生式土器拓影図（第46図）

15は胴部片で，付加条1種の縄文が施されている。



第47図　遺構外出土土器実測図

遺構外出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 1	甕 土師器	A〔17.4〕 B(11.6)	胴下半部欠損。胴部は直立気味に立ち上がり，頸部でくびれ，口縁部で外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母，明褐色 普通	P90　20% 表採
2	椀 土師器	A 14.0 B 6.0	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部を丸くおさめる。	体部外面雑なヘラ削り，内面ヘラナデ。底部手持ちヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 橙色，普通	P92　75% 表採
3	燈明皿 土師質 土器	A〔9.2〕 B 2.2 C〔4.0〕	平底。体部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。底部手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母 褐色 普通	P96　30% 表採，体部内・外面油煙付着
4	皿 土師器	B(1.3) C 3.8	平底。	体部下端ヘラ削り。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア・長石・雲母・礫，にぶい橙色 普通	P97　30% 表採

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 5	蓋 土師器	A〔16.0〕 B(2.2)	天井部は丸く，なだらかに下降する。口縁部は屈曲し，端部は短く垂下する。	天井部回転ヘラ削り。	砂粒・スコリア・パミス・石英・長石・雲母，にぶい黄橙色，普通	P98 30% 表採
6	坏 須恵器	A〔10.7〕 B 4.0 C〔 7.2〕	平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部を丸くおさめる。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・長石 灰色 良好	P99 25% 表採
7	高台付坏 須恵器	A〔14.2〕 B 4.3 D〔 8.4〕 E 0.6	平底。底部と体部の境に「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒 褐灰色 良好	P100 30% 表採
8	段皿 陶器	A〔14.0〕 B 2.6 D〔 8.2〕 E 0.5	平底で，短い高台が付く。体部は外傾して立ち上がり，上位に稜を持つ。	底部回転ヘラ削り。	砂粒・礫 灰白色 良好	P101 60% 表採
9	皿 土師質土器	A 12.0 B 3.6 C 3.6	平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は丸みを持つ。	水挽き成形後，体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。	砂粒・長石 橙色 普通	P103 70% 表採 体部内面墨描あり

(2) 石器・石製品，土製品，金属製品，古銭

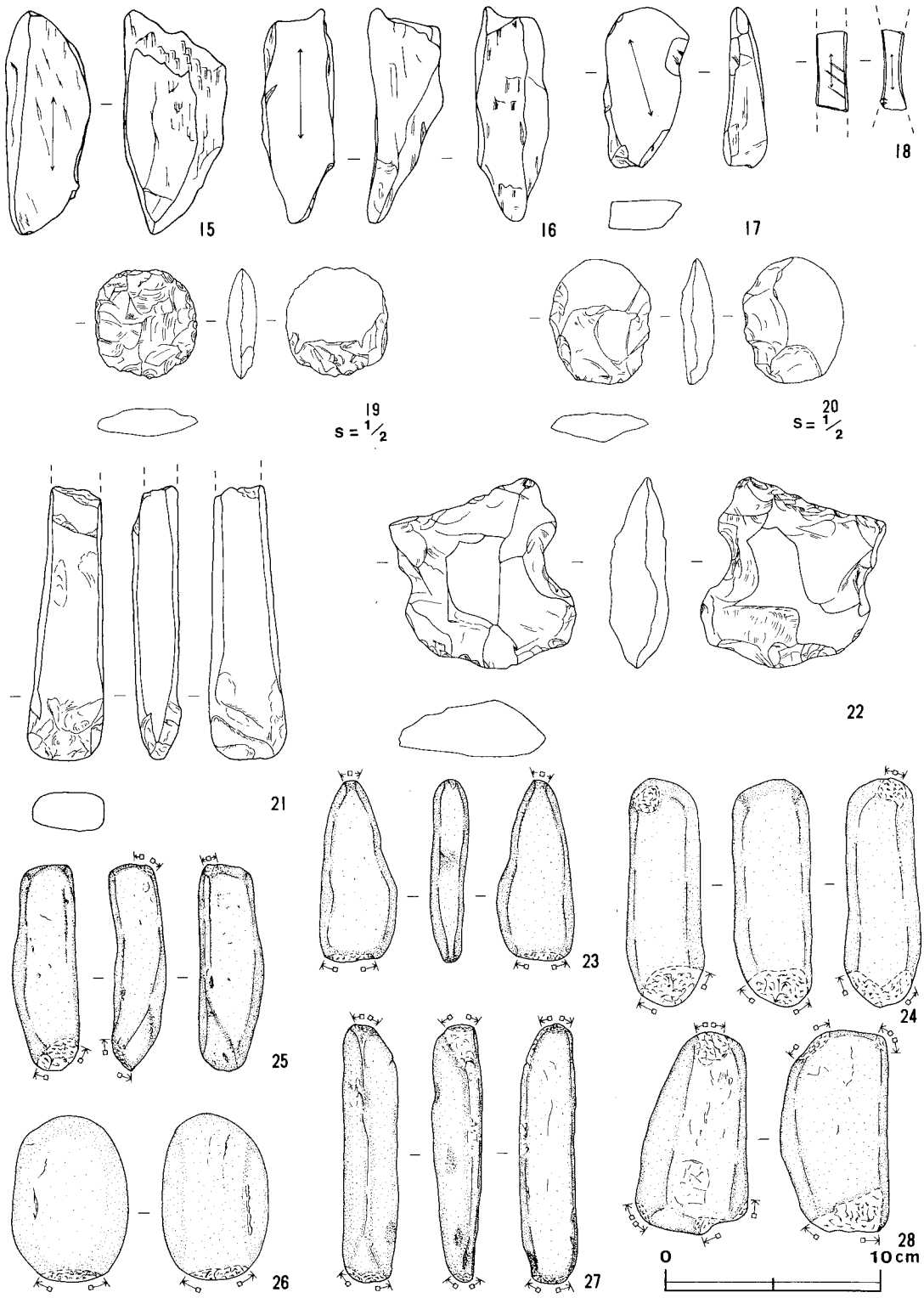
当調査区からは，石器・石製品，土製品，金属製品及び古銭等が出土している。それぞれの遺物の出土位置，法量等については一覧表にして掲載する。

表3 石器・石製品一覧表

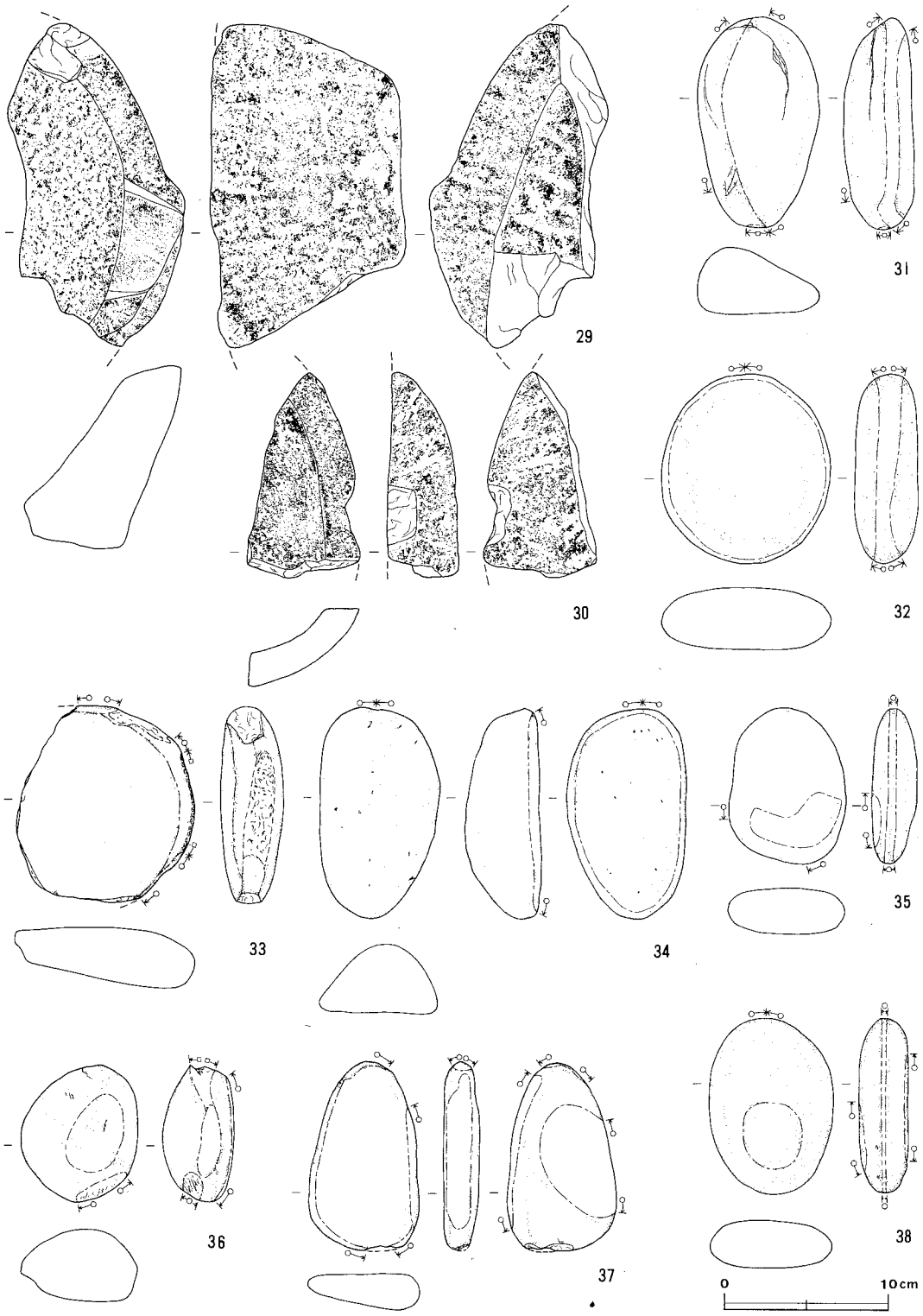
図版番号	器種	法量				石質	出土地点	台帳番号	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第48図 1	砥石	8.9	3.8	8.6	338.7	砂岩	SI－12	Q 1	
2	砥石	9.6	3.1	2.2	77.8	凝灰岩	SD－1	Q 2	
3	砥石	(13.9)	5.9	4.2	(489.8)	砂岩	SD－3	Q 3	
4	砥石	13.3	4.5	4.9	423.6	雲母片岩	SD－3	Q 4	
5	砥石	9.1	3.9	4.1	163.4	凝灰岩	SD－3	Q 5	
－	砥石	(3.3)	2.4	1.7	(13.3)	凝灰岩	SD－3	Q 6	
6	砥石	(8.4)	3.0	2.0	(54.2)	凝灰岩	SD－3	Q 7	
－	砥石	(7.6)	5.4	4.4	(189.1)	凝灰岩	SD－3	Q 8	
7	砥石	10.9	3.5	2.8	107.5	凝灰岩	SD－4	Q 9	
8	砥石	7.6	5.2	3.5	130.2	砂岩	SD－4	Q10	
－	砥石	(9.3)	3.9	1.8	(77.1)	凝灰岩	表採	Q11	
－	砥石	(8.4)	3.7	2.1	(94.1)	凝灰岩	表採	Q12	
－	砥石	(9.7)	3.4	2.4	(80.4)	凝灰岩	表採	Q13	
9	砥石	(9.3)	3.9	1.9	(81.2)	凝灰岩	表採	Q14	
10	砥石	13.1	2.7	2.2	84.7	凝灰岩	表採	Q15	
11	砥石	11.6	2.8	2.7	94.1	凝灰岩	表採	Q16	
12	砥石	11.1	3.7	1.0	44.5	凝灰岩	表採	Q17	
13	砥石	13.8	3.8	4.9	166.5	雲母片岩	表採	Q18	

図版番号	器種	法量				石質	出土地点	台帳番号	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第48図 14	砥石	13.0	(2.2)	2.7	(100.4)	雲母片岩	表採	Q19	
第49図 15	砥石	10.5	3.9	4.8	189.1	雲母片岩	表採	Q20	
16	砥石	10.1	3.4	3.6	106.9	雲母片岩	表採	Q21	
17	砥石	7.5	3.4	2.0	50.4	凝灰岩	表採	Q22	
—	砥石	(4.7)	4.9	1.7	(47.3)	雲母片岩	表採	Q23	
—	砥石	(3.6)	2.9	0.8	(10.0)	凝灰岩	表採	Q24	
18	砥石	(3.8)	(1.5)	(1.2)	(8.7)	凝灰岩	表採	Q25	
19	剝片	3.4	3.1	0.9	9.8	チャート	表採	Q26	
20	剝片	3.9	3.1	1.0	12.3	チャート	表採	Q27	
21	打製石斧	(12.8)	3.9	2.2	(143.7)	結晶片岩	SD－4	Q28	短冊形
22	打製石斧	8.9	7.9	2.6	191.2	安山岩	表採	Q29	分銅形
23	敲石	8.5	3.6	1.8	67.2	砂岩	SD－3	Q31	
24	敲石	10.7	3.6	3.6	229.4	砂岩	SD－3	Q32	
25	敲石	9.6	3.0	2.4	106.9	砂岩	SD－3	Q33	
26	敲石	7.8	5.4	4.9	308.1	石英	SD－4	Q34	
27	敲石	12.2	2.7	2.6	96.6	砂岩	表採	Q35	
28	敲石	9.5	5.2	5.1	338.1	砂岩	表採	Q36	
第50図 29	石皿	(19.9)	(9.7)	6.0	(1591.2)	砂岩	SD－3	Q38	
30	石皿	(12.6)	(6.8)	(2.0)	(202.9)	安山岩	SD－3	Q37	
—	磨石	10.7	10.6	5.0	637.5	砂岩	SI－4	Q39	
31	磨石	12.9	7.6	4.2	525.3	砂岩	SD－3	Q30	
—	磨石	10.6	7.9	2.9	281.3	粘板岩	SD－3	Q42	
32	磨石	11.6	10.3	3.9	673.8	砂岩	SD－3	Q43	
33	磨石	(12.1)	(10.8)	3.8	(667.0)	砂岩	SD－3	Q44	
—	磨石	8.2	9.6	3.6	572.4	砂岩	SD－3	Q45	
34	磨石	13.0	7.4	4.4	545.5	砂岩	SD－3	Q46	
—	磨石	10.8	6.3	5.0	481.7	砂岩	SD－3	Q47	
35	磨石	9.5	7.2	2.8	264.6	砂岩	SD－3	Q48	
—	磨石	(9.9)	(7.8)	(4.7)	(472.4)	砂岩	SD－3	Q49	
—	磨石	(10.1)	8.3	4.1	(415.3)	砂岩	SD－3	Q50	
—	磨石	(9.2)	8.1	3.6	(338.1)	砂岩	SD－3	Q51	
—	磨石	7.8	5.6	3.6	234.1	凝灰岩	SD－3	Q52	
—	磨石	(12.0)	(10.2)	(3.9)	(435.8)	砂岩	SD－3	Q53	
—	磨石	(9.5)	12.2	4.7	(619.6)	砂岩	SD－4	Q54	
36	磨石	8.4	7.1	4.3	312.7	砂岩	SE－1	Q40	
—	磨石	8.8	7.5	4.6	437.8	砂岩	SE－1	Q41	
37	磨石	11.5	6.8	2.3	210.9	砂岩	表採	Q55	
38	磨石	10.7	7.5	3.0	362.2	砂岩	表採	Q56	
—	磨石	(7.6)	7.3	3.5	(197.9)	砂岩	表採	Q57	
—	磨石	(10.6)	(5.8)	(3.9)	(265.4)	砂岩	表採	Q58	

第48図　石器・石製品実測図（Ⅰ）



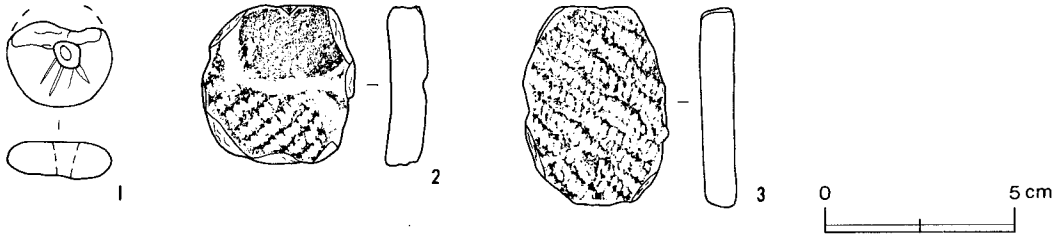
第49図　石器・石製品実測図(Ⅱ)



第50図　石器実測図(Ⅲ)

表4　土製品一覧表

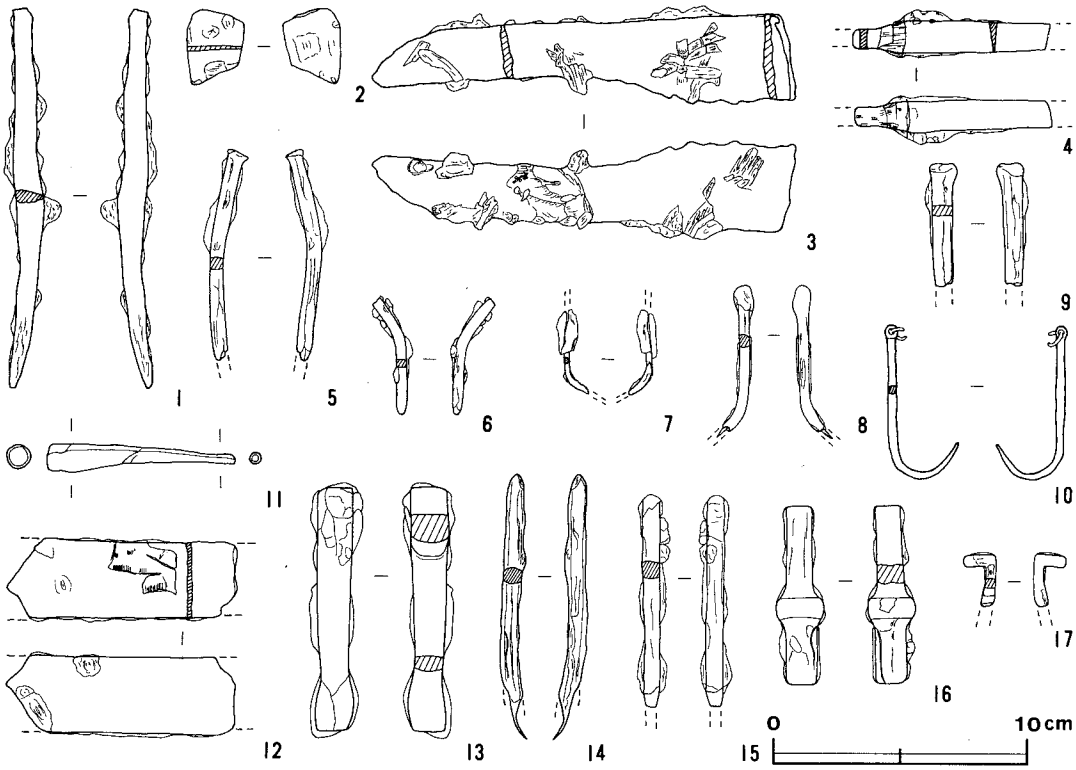
図版番号	器　　種	法　　量				出土地点	備　　考
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第51図 1	有孔円板	(2.3)	2.8	0.7	(5.1)	表採	DP 1
2	土器片錘	4.2	4.0	—	20.0	SD－4覆土	DP 3
3	土器片錘	5.3	3.9	—	23.2	表採	DP 2



第51図　土製品実測図

表5　金属製品一覧表

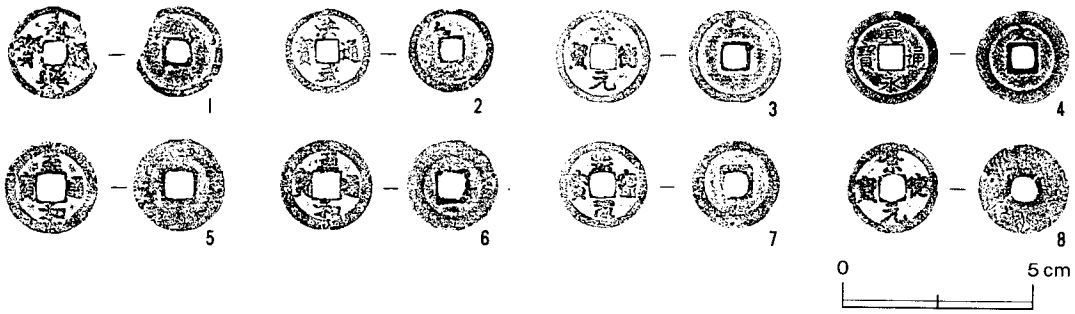
図版番号	器　　種	法　　量			備　　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
第52図 1	不　　明	15.2	1.1	0.5	SI-4の北壁中央付近の床面から出土　鉄　M 1
2	不　　明	(3.0)	2.2	0.2	SI-7の覆土から出土　鉄　M 3
3	鎌	(16.8)	3.5	0.2	SI-12の竈西側の床面から出土　鉄　M 6
4	刀　　子	(7.7)	1.3	0.3	SI-12の覆土から出土　鉄　M 7
5	釘	8.5	0.7	0.5	SI-12の覆土から出土　鉄　M 8
6	釘	(4.5)	0.4	0.3	SD-2の覆土から出土　鉄　M 9
7	釘	(3.4)	0.8	0.2	SD-2の覆土から出土　鉄　M10
8	釘	(6.0)	0.4	0.5	SD-4の覆土から出土　鉄　M11
9	釘	(4.9)	1.1	0.4	表採　鉄　M20
10	釣手金具	6.2	0.5	0.3	表採　銅　M22
11	煙　　管	7.5	1.1	—	表採　鉄　M25
12	不　　明	(9.1)	3.3	0.2	表採　鉄　M12
13	不　　明	10.1	1.5	0.6～1.1	表採　鉄　M13
14	不　　明	10.6	0.8	0.6	表採　鉄　M14
15	不　　明	(8.4)	0.7	0.6	表採　鉄　M15
16	不　　明	7.1	2.1	0.8	表採　鉄　M16
17	不　　明	(2.1)	0.5	0.4	表採　鉄　M24



第52図　金属製品実測図

表6　古銭一覧表

図版番号	名　称	初　鋳　年	出土地点	備　考	図版番号	名　称	初　鋳　年	出土地点	備　考
第53図 1	永楽通宝	明　永楽6年(1408年)	SI－6	M36　銅	第53図 7	熙寧元宝	北宋　熙寧元年(1068年)	表　採	M43　銅
—	判読不明		SD1－A	M37	8	景徳元宝	北宋　景徳元年(1044年)	表　採	M44　銅
2	洪武通宝	明　洪武元年(1368年)	SD　4	M38　銅	—	判読不明		表　採	M45
3	景徳元宝	北宋　景徳元年(1044年)	表　採	M39　銅	—	判読不明		表　採	M46
4	寛永通宝	江戸　寛文8年(1668年)	表　採	M40　銅	—	判読不明		表　採	M47
5	至和通宝	北宋　至和元年(1054年)	表　採	M41　銅	—	判読不明		表　採	M48
6	至和通宝	北宋　至和元年(1054年)	表　採	M42　銅					



第53図　古銭拓影図

第3節　考察

1　竪穴住居跡と出土土器について

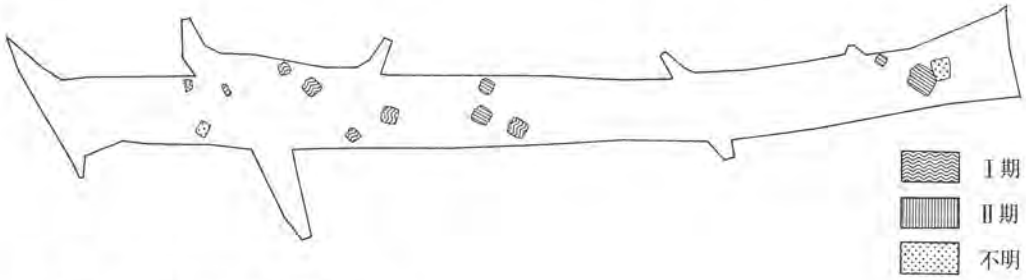
今回の調査で検出された竪穴住居跡は，これまで述べてきたように13軒である。その中の11軒（第1～2，4～12号住居跡）は，出土遺物や住居跡の構造等から次のようにⅠ期，Ⅱ期に分けることができる。

Ⅰ期（奈良時代，8世紀前半）……第1・2・6・7・8・9・10号住居跡

Ⅱ期（平安時代，8世紀末～9世紀前半）……第4・5・11・12号住居跡

（第3・13号住居跡からは，出土遺物がなく，そのうえ住居跡の大部分が攪乱を受けて，その住居の形状を明確に捉えることができないことから，考察から省いた。）

ここでは，各時期毎に住居跡と出土土器について概観することにする。



第54図　東原遺跡住居跡分布図

(1)　Ⅰ期　奈良時代（8世紀前半）

① 竪穴住居跡について

Ⅰ期に該当する住居跡は，第1・2・6・7・8・9・10号住居跡の7軒である。住居跡は調査区の北部から4軒，中央部から3軒検出されている。7軒中6軒は，2軒ずつ近接して検出されている。第6号住居跡だけは離れて検出されており，多量の炭化材が出土していることから，焼失家屋と考えられる。このうち他の遺構に掘り込まれた第1号住居跡，農道にかかって完掘できなかった第2号住居跡の2軒を除く5軒（第6・7・8・9・10号住居跡）の住居跡について，規模や内部構造等の特徴について述べたい。

住居跡の形状は5軒とも全てが方形で，規模は，一辺5m台が3軒，一辺3m台が2軒である。第6号住居跡は，当遺跡の該期で最大の規模を持ち，長軸5.76m，短軸5.62mを測る。

柱穴は，4軒の住居跡からはそれぞれ4か所検出され，いずれも対角線上に規則的に配置されているが，第10号住居跡だけは2か所しか検出されなかった。

竈は，5軒の住居跡に付設されている。北壁中央部あるいは中央部からやや東寄りに，壁を約

30～70㎝程掘り込み，砂混じりの粘土によって構築されている。第６・７号住居跡からは，袖部や天井部を強化するために使われたと考えられる角形の粘土ブロックが検出されている。

主軸方向は，第７号住居跡だけが西に傾いているが，他の住居跡は東に傾いていおり，０～40°以内に集中する傾向がみられる。

床面積は，最大が第６号住居跡の32.4㎡，最小が第８号住居跡の13.5㎡であり，該期の住居跡５軒の平均床面積は22.1㎡である。

床面は全体的に平坦で，よく踏み固められており硬い。各住居跡とも長い期間使われたと考えられる。

近隣における東原遺跡Ⅰ期と同時期の住居跡は，那珂町の森戸遺跡から３軒検出されている。３軒とも形状は方形を呈し，規模は一辺が３ｍ台である。床面からは柱穴４か所と出入口の施設に伴う梯子ピットが検出されている。竈は，３軒とも北壁中央部に砂混じりの粘土で構築されている。主軸方向は，３軒ともやや西に傾いている。

当遺跡と森戸遺跡から検出された住居跡を比べると，地形的な関係により主軸方向に北東と北西の相違点がみられるが，住居跡の形状が方形を呈することや，柱穴はほとんどの住居跡から４か所検出されていること，竈は北壁に構築されていることなどに共通点がみられる。

② 出土遺物について

該期の出土土器は土師器が中心で，須恵器も少量出土している。器種としては土師器の甕，埦，坏と，須恵器の坏が出土している。

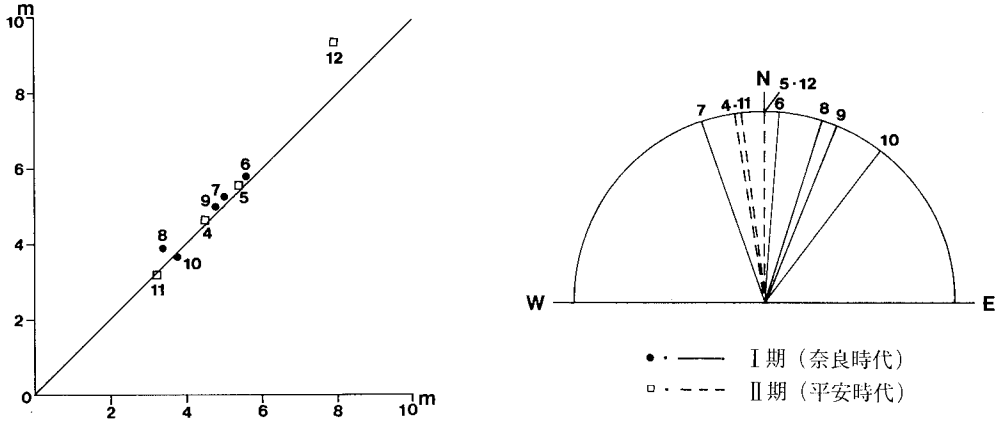
土師器の中では，甕の出土が最も多く，実測できた個体は14個を数える。器形は，平底で，胴部は内彎して立ち上がり，頸部はくびれ，口縁部は大きく外反している。口縁部の内・外面に横ナデ，胴部外面はヘラ削り，胴部内面はヘラナデが施されている。底部に木葉痕が残るもの，底部にヘラ削りがなされているもの，底部及び胴部下端にヘラ削りがなされているものがある。器高12㎝程度の小形甕も出土している。埦は，体部が内彎気味に立ち上がり，口縁部は直立するものと，軽く外傾するものがみられる。口縁部内・外面にナデ，体部外面にヘラ削りあるいはヘラ削り後ナデ調整が施されている。坏は，丸底を呈し，体部は内彎気味に立ち上がる。体部外面に横位のヘラ削りがなされ，内面にはヘラナデが施されている。

須恵器の坏は，全て平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がり，底部は回転ヘラ削りがなされ，底部全面を丁寧に調整している。

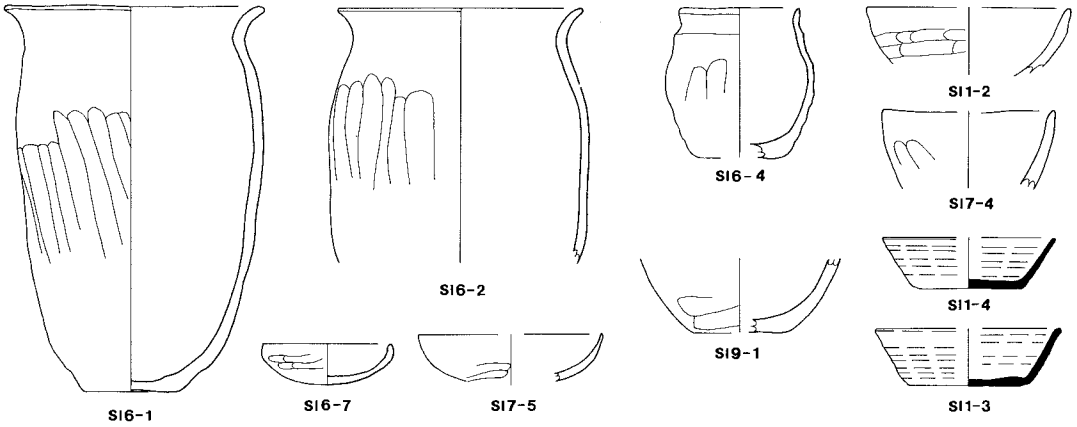
東原遺跡Ⅰ期と同時期の森戸遺跡の住居跡からは，土師器を中心に出土し，須恵器の出土量が少ない。器種としては土師器，須恵器とも甕，坏が出土している。土師器の甕は，当遺跡から出土した甕と同様に胴部外面にヘラ削り調整された甕が出土しているほか，胴部にヘラ磨き調整された甕が出土している。土師器の坏は，当遺跡から出土した坏と同様の丸底を呈する坏が出土し

ているほか，盤状を呈する坏や内黒の坏が出土している。当遺跡から出土した須恵器の坏は全て平底であるが，森戸遺跡からは丸底の坏が出土している。そのほか，胴部が球状を呈する須恵器の甕は，森戸遺跡からは出土しているが，当遺跡のⅠ期からは出土していない。

Ⅰ期の実年代としては，出土土器から8世紀前半と考えられるが，第6・7号住居跡からは，やや古い様相をみせる遺物が出土していることから，当該住居跡は第1・2・8・9・10号住居跡よりも多少先行することが推定される。



第55図　東原遺跡住居跡規模・主軸方向



第56図　Ⅰ期出土土器実測図

(2)　Ⅱ期　平安時代（8世紀末～9世紀前半）

①　竪穴住居跡について

Ⅱ期に該当する住居跡は，第4・5・11・12号住居跡の4軒である。住居跡は，調査区の中央部から2軒，南部から2軒検出されている。第12号住居跡は，床面から多量の炭化材が出土していることから，焼失家屋と考えられる。

住居跡の形状は，第12号住居跡が長方形を呈する以外は全て方形である。規模は，長軸9.36m，

短軸7.86ｍの第12号住居跡が最大で，長軸3.26ｍ，短軸3.22ｍの第11号住居跡が最小である。規模には大きな差があることが窺える。

柱穴は，２軒の住居跡から４か所，１軒の住居跡から６か所検出されたが，第11号住居跡からは検出されなかった。４か所の柱穴の場合，Ⅰ期と同様に対角線上に規則的に配列されている。

６か所の場合も４か所が対角線上に検出され，残りの２か所は，柱穴と柱穴の中間点に検出されている。

竈は４軒の住居跡に付設されている。北壁中央部あるいは東寄り，又は，西寄りに，壁を30㎝～65㎝程掘り込み，砂混じりの粘土で構築されている。第４・12号住居跡からは，Ⅰ期の住居跡にもみられた角形の粘土ブロックが検出されており，袖部と天井部を強化するために使われたと考えられる。

主軸方向は，ほぼ真北を指すものが２軒で，他の２軒はやや西に傾いており，Ⅰ期と比べてより北を意識して住居跡が構築されたものと考えられる。

床面積は，最大が第12号住居跡の73.6㎡，最小が第11号住居跡の10.5㎡であり，該期の住居跡４軒の平均床面積は33.7㎡である。

床面は，Ⅰ期同様全体的に平坦で，よく踏み固められており硬い。各住居跡とも長い期間使われたと考えられる。

近隣における東原遺跡Ⅱ期と同時期の住居跡は，前出の森戸遺跡や東海村の石神外宿Ａ遺跡から検出されている。

森戸遺跡からは，該期の住居跡が５軒検出されている。規模及び形状をみると，一辺が4.0～5.0ｍの隅丸方形・長方形を呈する住居跡が２軒，一辺が2.5～3.0ｍの隅丸方形・長方形を呈するものが３軒である。柱穴は４か所検出された住居跡が２軒で，全く検出されなかった住居跡が３軒である。竈は，５軒とも北壁中央部に構築されている。主軸方向は，５軒ともやや東に傾いている。

石神外宿Ａ遺跡からは，該期の住居跡が15軒検出されている。規模及び形状をみると，一辺が5.0～7.0ｍの方形・長方形を呈する住居跡が４軒で，一辺3.0～4.0ｍの方形・長方形を呈する住居跡が11軒である。柱穴は４か所検出された住居跡が３軒で，全く検出されなかった住居跡が９軒である。竈は，13軒の住居跡が北壁中央部に構築されているが，１軒は東壁に構築されている。主軸方向はほとんどがやや西に傾いているが，１軒は東に傾いている。

当遺跡と森戸遺跡，石神外宿Ａ遺跡から検出された住居跡を比べると，地形的な関係により，北，北東，北西と主軸方向には相違点がみられるが，規模は大形から小形まで検出されており，形状は方形あるいは長方形を呈する住居跡であること，柱穴は４か所を基本とするが，全く検出されない住居跡もあること，竈はほとんどが北壁に構築されていることなどに共通点がみられる。

② 出土土器について

該期の出土土器は，土師器が中心であるが，Ⅰ期よりも須恵器が多く出土している。器種としては土師器の甕，甑，坏，埦，手捏土器が，須恵器の坏，高台付坏，蓋が出土している。

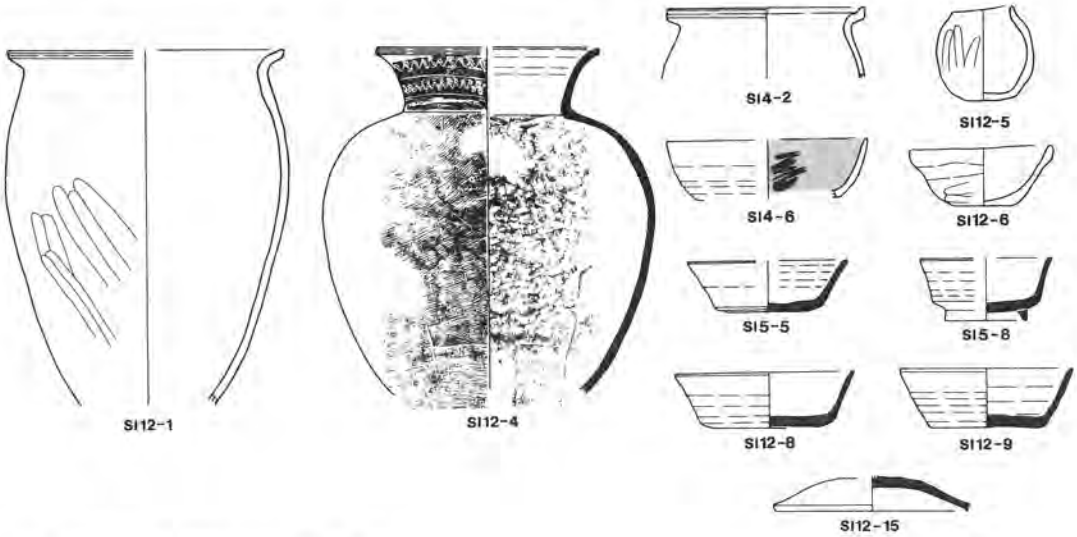
土師器の甕は，Ⅰ期と同様の甕もみられるが，他に口唇部をつまみ上げるという特徴を持つものも出土している。整形技法は，胴部外面にヘラ削り，内面にヘラナデが施されている。底部はヘラ削りにより調整されている。この甕は完形品がなく，胴部の整形技法が不明であるが，常陸型甕であろうと推定される。該期からはⅠ期同様小形甕も出土している。坏は，口縁部と体部の境に不明瞭な稜を有し，内面はヘラ磨き調整後，黒色処理がなされている。埦は，平底で，体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は直立気味となる。体部外面にヘラ削り調整が施されている。

須恵器の坏は，平底で，体部は外傾して立ち上がっている。底部の整形技法には３つの種類がみられる。回転ヘラ切り後，回転ヘラ削りがなされているもの，回転ヘラ切り後，手持ちヘラ削りがなされているもの，回転ヘラ切り後無調整のものである。その他，ヘラ削りが体部下端にまで及ぶものもある。高台付坏は，ほぼ直立する高台を貼付けており，底部は回転ヘラ削り調整が施されている。蓋は，天井部が丸く，なだらかに下降し，口縁部は短く垂下するが，かえりはない。天井部は回転ヘラ削り調整されている。甕は，大形で胴部に横方向の平行叩き目が見られる。

東原遺跡Ⅱ期と同時期の森戸遺跡の住居跡から出土した土器をみると，東原遺跡Ⅱ期の住居跡と同様に土師器を中心に出土しており，８世紀前半に構築された住居跡から出土した土器と比較して須恵器の出土量が増加している。器種としては土師器の甕，坏，鉢と，須恵器の坏，高台付坏，盤が出土している。土師器の甕は，ほとんどが常陸型の甕である。土師器の坏では，当遺跡と同様にヘラ磨き調整後，内面黒色処理が施された坏が出土している。須恵器の坏は，当遺跡から出土した坏と同様に平底であり，調整技法にも共通点がみられる。

また，東原遺跡Ⅱ期と同時期の石神外宿Ａ遺跡の住居跡から出土した土器は，当遺跡と同様に土師器が中心であるが，須恵器も割合としては多く出土している。器種としては土師器の甕，坏，高台付坏，皿，蓋と，須恵器の坏，高台付坏，盤，蓋，壺，器台が出土している。土師器では当遺跡と同様に甕の出土量が多いが，当遺跡と比べて内面に黒色処理が施された土師器の出土量が多いという特徴もみられる。

Ⅱ期の実年代は，出土土器から８世紀末～９世紀前半と考えられる。



第57図　Ⅱ期出土土器実測図

以上，当遺跡で調査された住居跡について，Ⅰ・Ⅱ期に分けて時期毎に概観してきた。その結果は前述のとおりで，8世紀前半からこの場所に人々が定住し，集落を形成していたものと考えられる。その後，9世紀の前半までは集落が形成されていたと考えられるが，それ以降の生活の痕跡は認められない。

参考文献

(1)　勝田市教育委員会　「高野寺畑遺跡調査報告書」　1979年

(2)　東海村教育委員会　「小澤野」　1978年

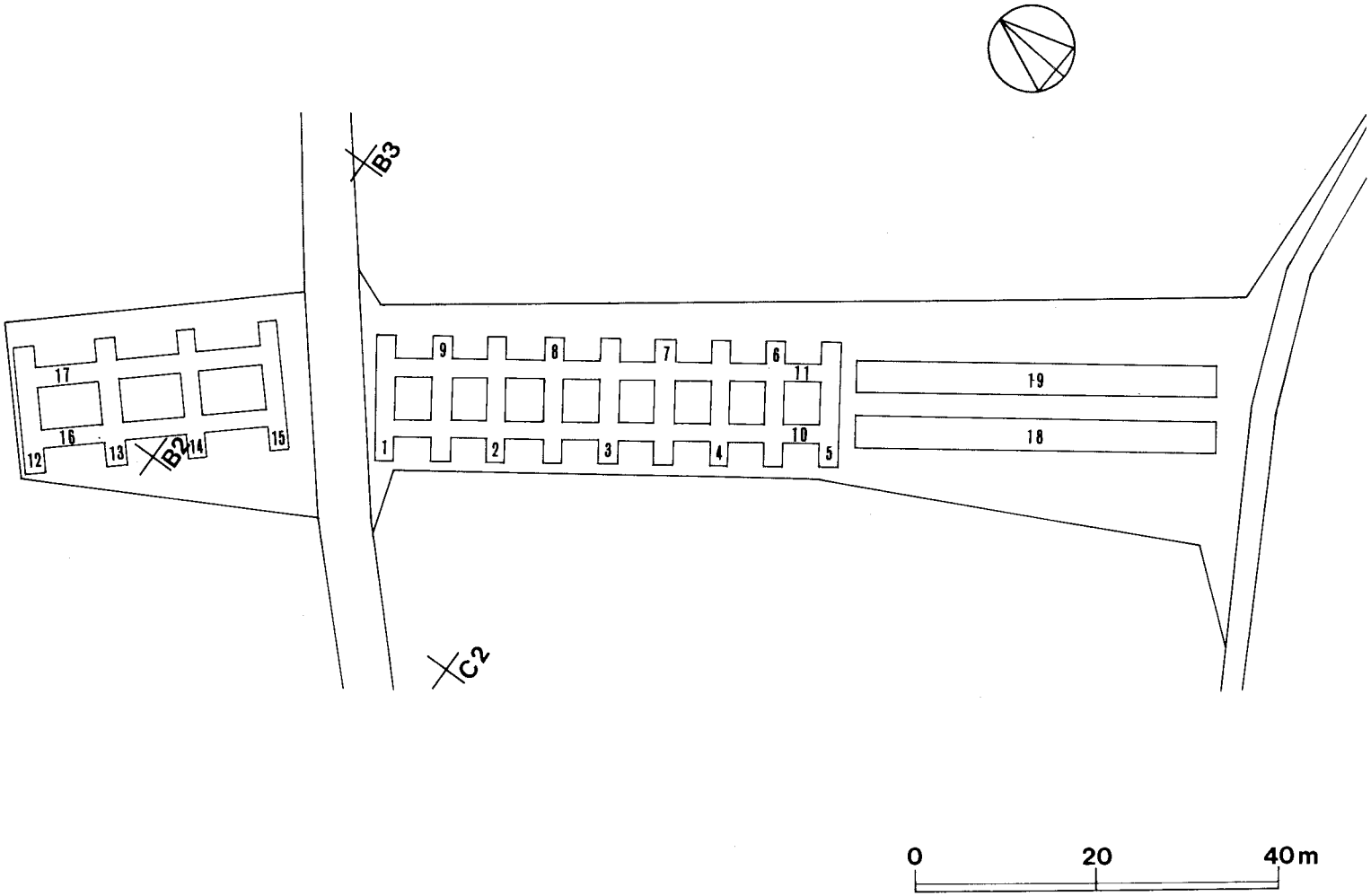
(3)　水戸市大鋸町遺跡発掘調査会　「水戸市大鋸町遺跡」　1988年

(4)　茨城県教育財団　「二本松古墳・石神外宿A遺跡・石神外宿B遺跡」　茨城県教育財団文化財調査報告第23集　1983年

(5)　茨城県教育財団　「北郷C遺跡・森戸遺跡」　茨城県教育財団文化財調査報告第55集　1990年

表7　東原遺跡住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸(m)×短軸(m)	規模 壁高(cm)	床面	柱穴数	竈	覆土	出土遺物	備考
1	B2g9	〔N－38°－W〕	不明	(3.92 ×2.72)	26	平坦	1	－	自然	土師器片32,縄文式土器片47	第1号溝と重複
2	B3j1	〔N－30°－E〕	〔長方形〕	〔4.40 ×3.64〕	20～34	平坦	1	－	自然	土師器片56,須恵器片1,縄文式土器片23	
3	B2j8	〔N－90°　〕	〔長方形〕	〔4.44 ×3.78〕	10	平坦	0	－	不明	なし	
4	D4h3	N－ 8°－W	方形	4.58 ×4.54	36～50	平坦	4	N	自然	土師器片232,須恵器片35,縄文式土器片6	
5	D4i1	N－ 0°	方形	5.52 ×5.38	46～56	平坦	4	N	自然	土師器片497,須恵器片53,縄文式土器片7	
6	E4b1	N－ 4°－E	方形	5.76 ×5.62	22～38	平坦	4	N	自然	土師器片382,須恵器片7,縄文式土器片3	第2号溝と重複
7	D3c7	N－19°－W	方形	5.36 ×5.06	36～48	凹凸	4	N	自然	土師器片413,須恵器片20,縄文式土器片12	
8	D3a4	N－17°－E	方形	3.88 ×3.38	22～32	平坦	4	N	自然	土師器片151,須恵器片2,縄文式土器片6	
9	C3f5	N－22°－E	〔方形〕	(5.02)×4.84	10～14	平坦	4	N	自然	土師器片53,須恵器片2,縄文式土器片11	
10	C3c5	N－37°－E	方形	3.68 ×3.66	18～22	平坦	2	N	自然	土師器片123,縄文式土器片28	
11	G6d2	N－ 7°－W	方形	3.26 ×3.22	28～30	平坦	0	N	自然	土師器片54,須恵器片9,縄文式土器片6,弥生式土器片2	
12	G6h3	N－ 0°	長方形	9.36 ×7.86	24～56	平坦	6	N	自然	土師器片511,須恵器片43,縄文式土器片24,弥生式土器片38	第13号住居跡と重複
13	G6i4	〔N－48°－E〕	方形	6.74 ×5.94	5～8	凹凸	4	－	不明	なし	第12号住居跡と重複



第58図　石伏南遺跡全体図

第５章　石伏南遺跡

第１節　遺跡の概要

石伏南遺跡は，東海村の南西部，那珂台地の中央部標高30～35ｍの台地上に位置している。遺跡は，中央部から南東に向かって緩やかに傾斜している。調査区は，東西約20ｍ，南北約135ｍ，面積2,797㎡で，現況は道路を挟み北側が山林で，南側が畑地である。

当遺跡は調査前から縄文式土器片が採集され，縄文時代の遺跡として知られていた。

調査は，まず，トレンチを設定して試掘を行い，遺構の確認を試みたが，住居跡等の遺構は確認されなかった。

遺物は，試掘の段階で，少量の縄文式土器片，土師器片，石器，鉄製品が出土した。これらの遺物は，遺物収納コンテナ(60×40×20㎝)に１箱出土している。

第２節　トレンチによる土層観察

当遺跡の基本層序については，第１章で述べたとおりである。ここでは，トレンチによって確認した土層について記述する。

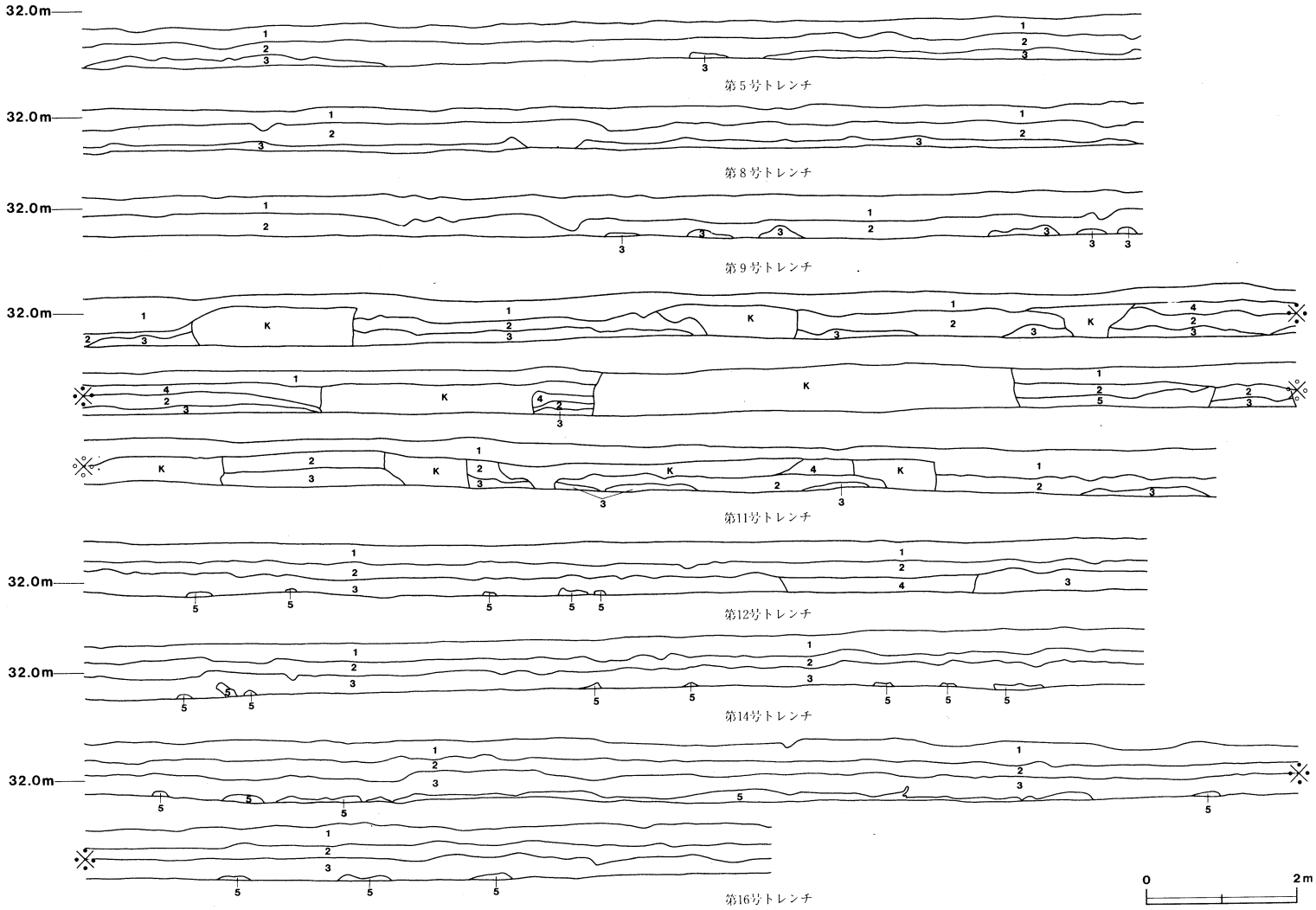
１　第５・８・９・11号トレンチ（第59図）

第１層は，18～48㎝の厚さを有する耕作土で，暗褐色を呈している。第２層は，10～24㎝の厚さを有する黒褐色土で，ロームブロックを少量含んでいる。第３層は，６～22㎝の厚さを有する黄褐色土で，黒色土ブロックを多量に含んでいる。この層の下面が遺構確認面である。第４層は，８～20㎝の厚さを有する褐色土で，ローム粒子を少量含んでいる。第５層は，12～28㎝の厚さを有する黒色土で，ローム粒子・焼土粒子を少量含んでいる。

２　第12・14・16号トレンチ（第59図）

第１層は，20～34㎝の厚さを有する表土で，暗褐色を呈している。第２層は，10～28㎝の厚さを有する暗褐色土で，ローム粒子を少量含んでいる。第３層は，16～30㎝の厚さを有する黒色土で，ローム粒子を少量含みやや締まりがある。この層の下面が遺構確認面にあたる。第４層は，20～24㎝の厚さを有する黒褐色土で，ロームブロック及びローム粒子を多量に含んでいる。第５層は，６～18㎝の厚さを有するローム質の黄褐色土で，黒色土ブロックとパミスを少量含んでいる。

以上，７本のトレンチにより調査区の土層を観察した結果，一部耕作による撹乱を受けているが，おおむね自然堆積の状況を呈している。



第59図　第5・8・9・11・12・14・16号トレンチ土層断面図

第３節　出土遺物

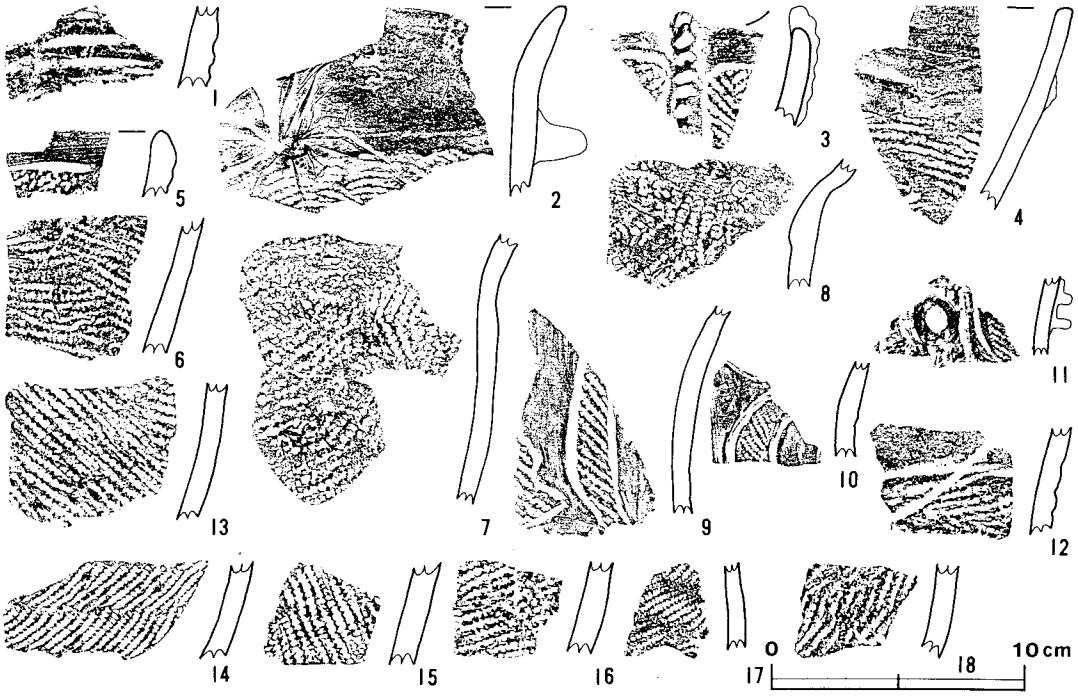
１　トレンチ出土土器（第60図）

当遺跡の試掘の段階で出土した縄文式土器片は，次のとおりである。

１は胴部片で，太めの沈線が横位に施されており，早期中葉の田戸下層式に比定される。

２～５は口縁部片である。２は，断面三角形の隆帯により，口唇直下の無文帯とその下の縄文帯に区画している。隆帯上には舌状突起が見られる。３は，縦位の棒状隆帯が施され，隆帯上には棒状工具による押圧が見られる。沈線による区画内を縄文により充填している。４は，断面三角形の隆帯により，口唇直下の無文帯とその下の縄文帯に区画している。５は，沈線により，無文帯と縄文帯に区画している。

６～18は胴部片である。６は，単節ＬＲの縄文を横位，斜位に施している。７・８は，単節ＬＲの縄文を斜位に施している。同一個体と思われる。９・10は，縄文を地文とし，沈線による区画内を磨消して文様帯を構成している。11は，刺突を施した縦位の隆帯上に粘土の輪を貼りつけている。沈線内を縄文によって充填している。12は，沈線により，無文帯と縄文帯を区画している。13～17は，単節ＬＲの縄文が施されている。18は，表面が磨滅しているが，無節Ｌの縄文が施されている。２～18は後期の称名寺式に比定される。



第60図　トレンチ出土土器拓影図

2　石器，鉄製品

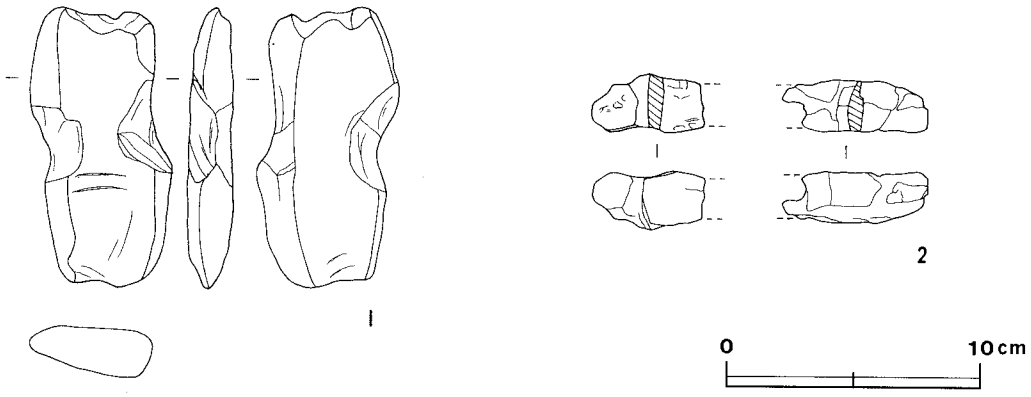
当調査区から出土した石器，鉄製品は一覧表のとおりである。

表8　石器一覧表

図版番号	器　種	法　量				石　質	出土地点	台帳番号	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第61図 1	打製石斧	11.1	4.9	1.6	159.0	雲母片岩	表採	Q1	分銅形

表9　鉄製品一覧表

図版番号	器　種	法　量			備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
第61図 2	不明	(10.1)	2.3	0.6	表採　M2



第61図　石器，鉄製品実測図

第4節　考察

当遺跡の調査では，試掘の段階で少量の縄文式土器片や土師器片等が出土したが，住居跡等の遺構は検出されなかった。縄文式土器片は，早期中葉の田戸下層式に比定されるもの1点，後期前葉の称名寺式に比定されるもの17点である。土師器片は細片が45点出土しているが，時期の比定はできなかった。

遺物の出土状況から，縄文時代早期からこの地において人間が生活を営んでいたことが推定されるが，集落は道路建設予定地外に形成されていることも考えられる。

資料不足のため，以上のことを述べるに留め，遺跡の性格等の考察は控えたい。今後，新しい資料が得られれば，遺跡の性格や時期についてさらに解明されるものと思われる。

結　　語

平成元年10月から平成２年３月にかけて実施された勝田市高野に所在する東原遺跡，東海村船場に所在する石伏南遺跡の発掘調査は，主要地方道瓜連馬渡線道路改良工事に伴うもので，平成３年10月から平成４年３月までの整理作業をもって完了の運びとなった。

調査の結果，東原遺跡からは竪穴住居跡13軒，土坑７基，溝５条，井戸１基が検出されている。

竪穴住居跡は，13軒中７軒が奈良時代の住居跡で，４軒が平安時代の住居跡である。うち９軒の住居跡からは北壁付近に竈が検出されている。

遺物は，土師器，須恵器を中心に，石器・石製品，金属製品，古銭等が出土している。土師器は甕，埦，坏，甑等，須恵器は坏，高台付坏，蓋等が出土している。そのほか，少量ではあるが，縄文式土器の破片が出土している。

石伏南遺跡の調査では，遺構は検出されず，縄文式土器の破片や石器等がわずかに出土しているだけである。今回の調査は道路幅という限定された範囲内の調査であり，遺物の出土状況から遺構は調査区域外に存在することが推定される。

以上のように，東原・石伏南遺跡の発掘調査によって得られた成果をまとめてきたが，本報告書が，今後，当地域の歴史を解明するためのささやかな一助となれば幸いである。

なお，本報告書をまとめるにあたり，勝田市教育委員会，東海村教育委員会をはじめ，関係各位から御指導，御協力をいただいたことに対し，感謝の意を表する次第である。

写真図版

東原遺跡

石伏南遺跡

東原遺跡全景

調査前全景

遺構確認状況

第１号住居跡

第２号住居跡

第３号住居跡

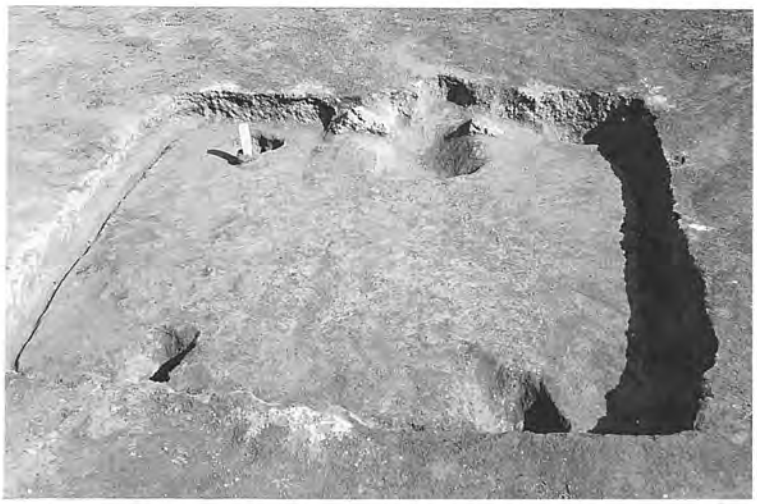
第４号住居跡

第５号住居跡

第６号住居跡

第６号住居跡
遺物出土状況

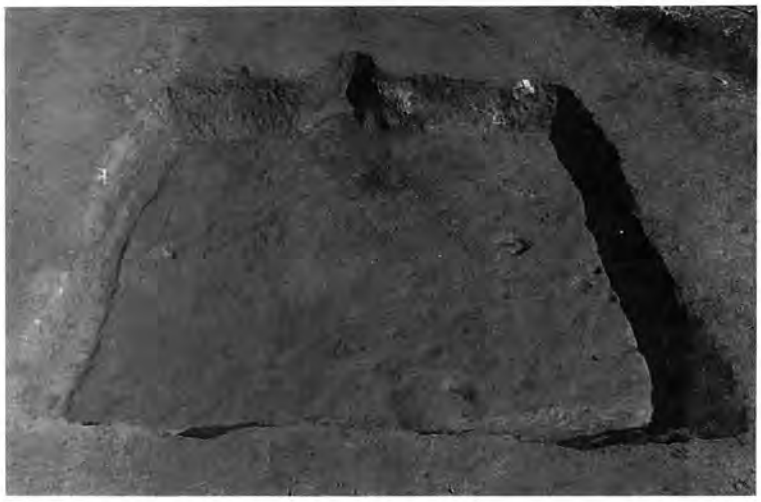
第７号住居跡



第８号住居跡

第９号住居跡

第10号住居跡



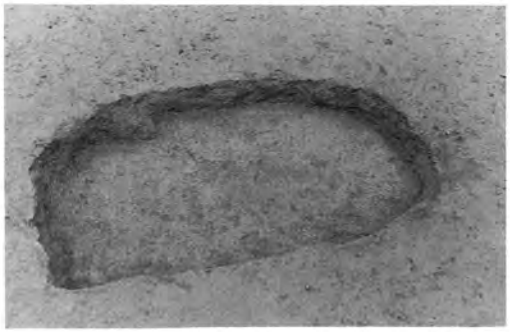
第11号住居跡

第12号住居跡

第12号住居跡竈

第12号住居跡
遺物出土状況

第13号住居跡



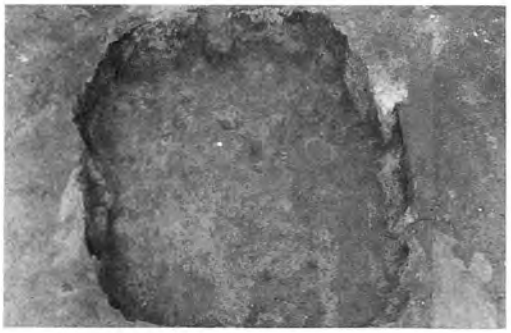
第１号土坑

第２号土坑

第３号土坑

第４号土坑

第５号土坑



第６号土坑

第７号土坑

第１号井戸

第１－Ａ・Ｂ号溝遺物出土状況

第１－Ａ号溝遺物出土状況

第２号溝

第３号溝

第３号溝遺物出土状況

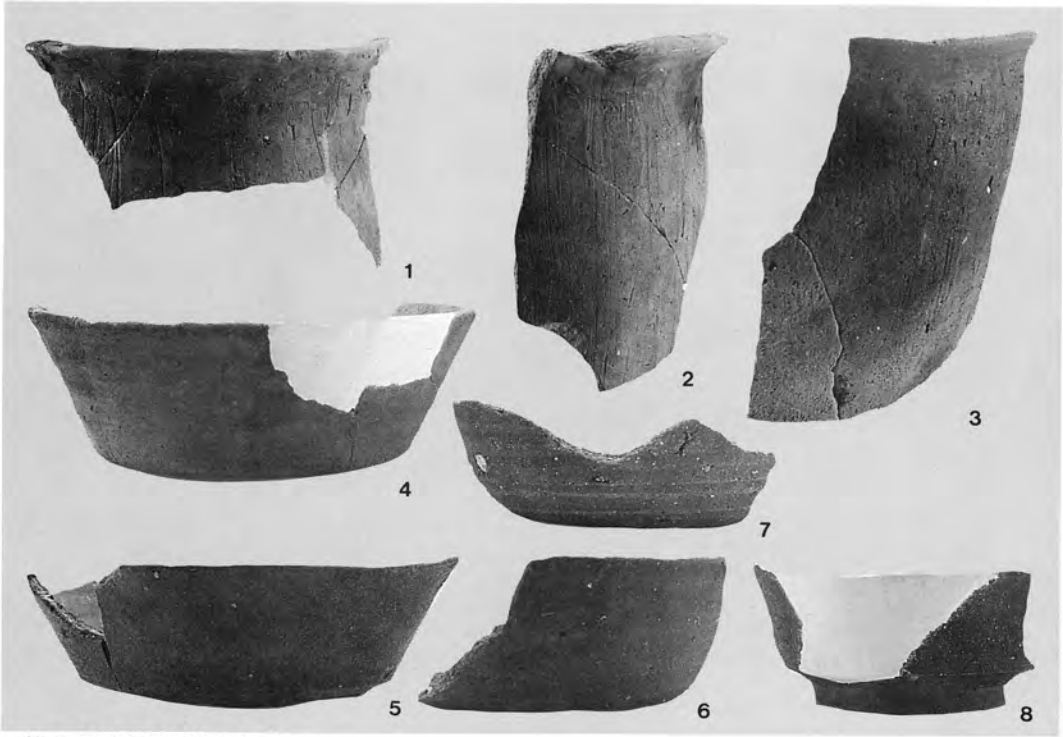
第４号溝

作業風景

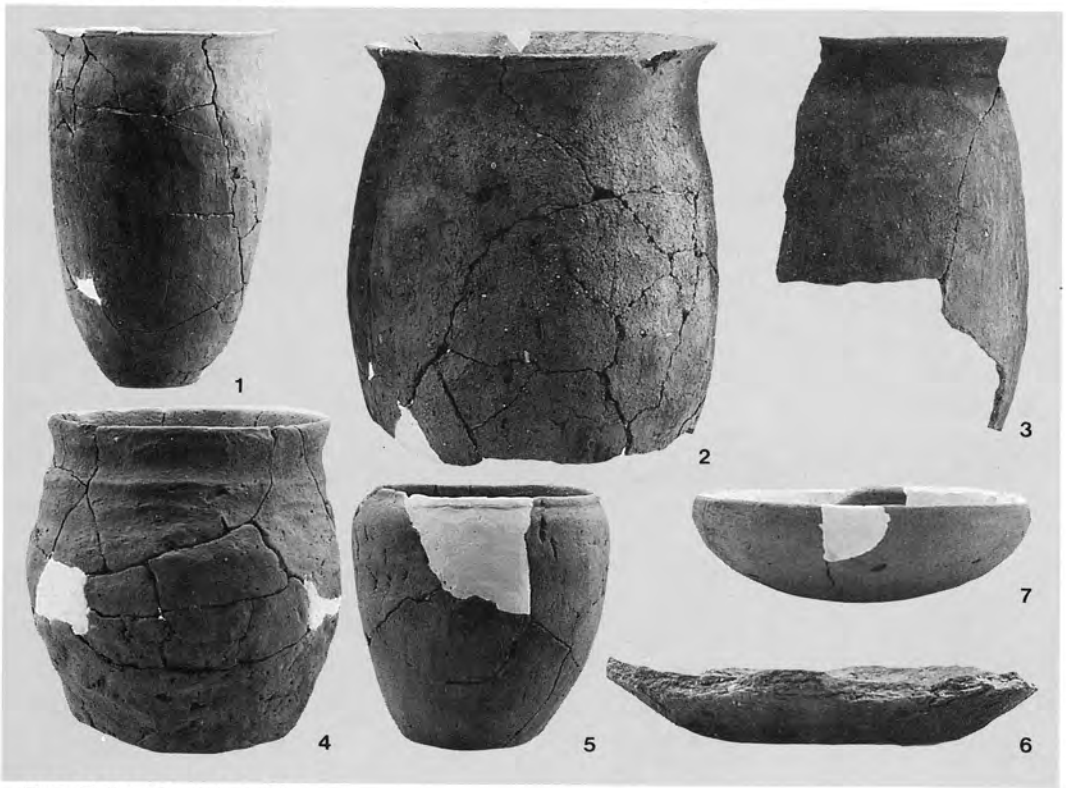
調査後全景

第１号住居跡出土土器

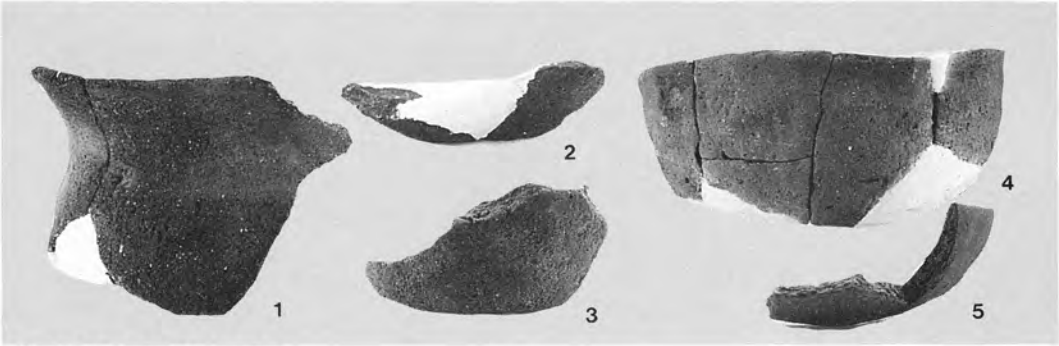
第４号住居跡出土土器



第５号住居跡出土土器



第６号住居跡出土土器



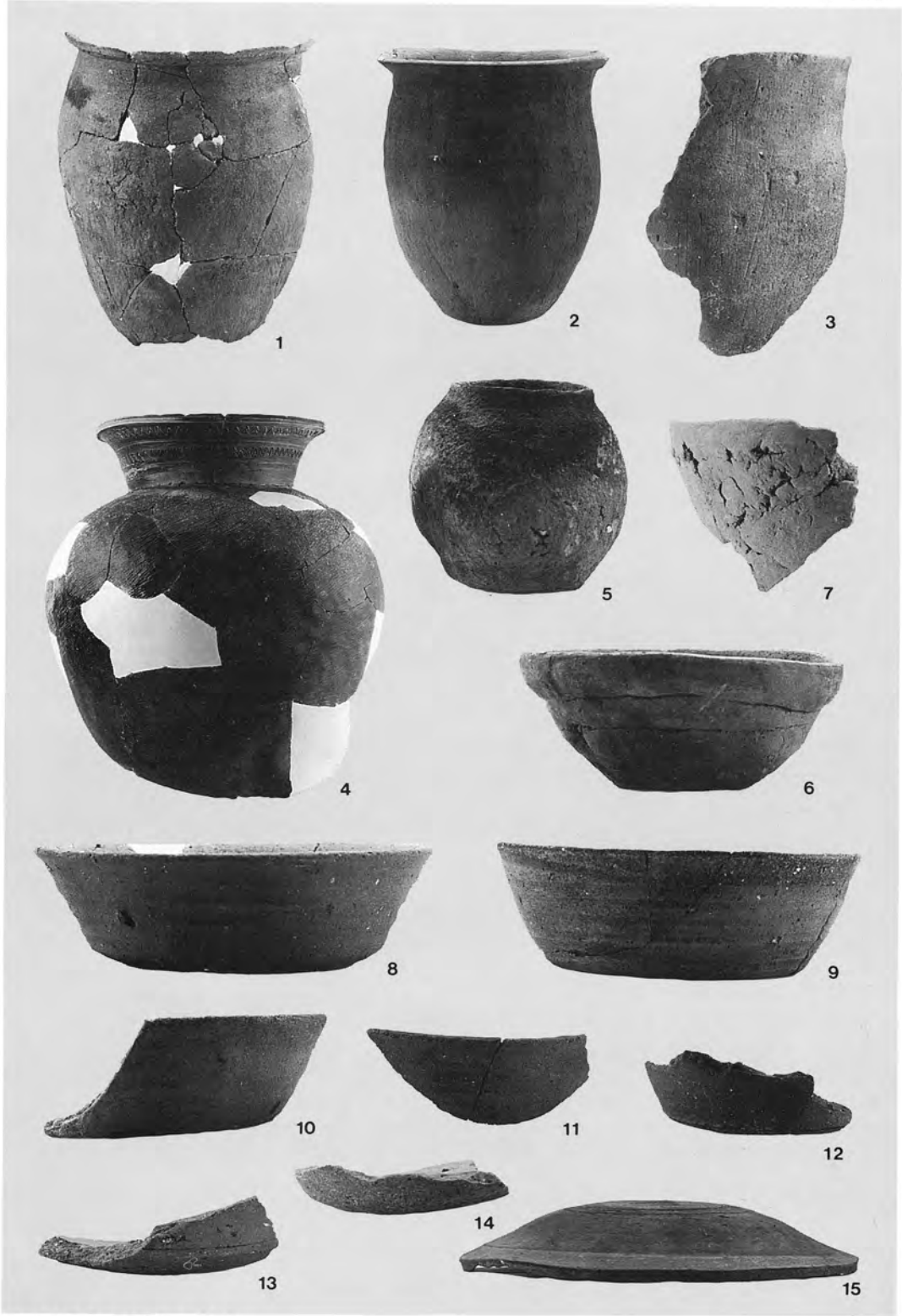
第７号住居跡出土土器

第８号住居跡出土土器

第９号住居跡出土土器

第10号住居跡出土土器

第11号住居跡出土土器



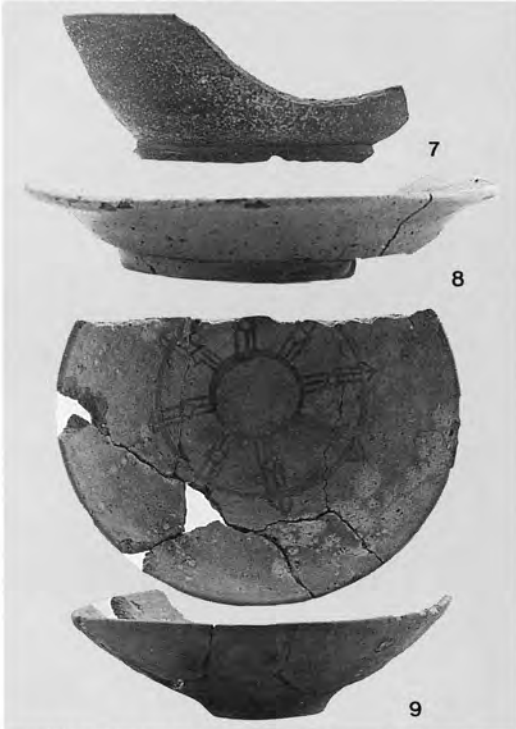
第12号住居跡出土土器

第２号土坑出土土器

第１号井戸出土土器

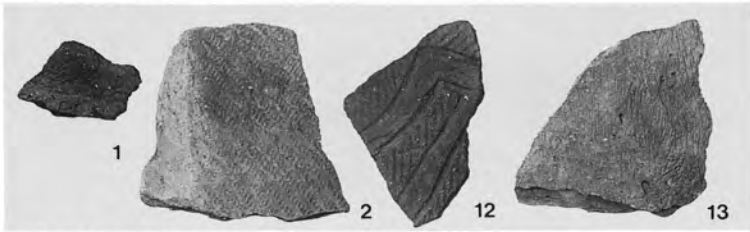
第１－Ａ号溝出土土器

第３号溝出土土器



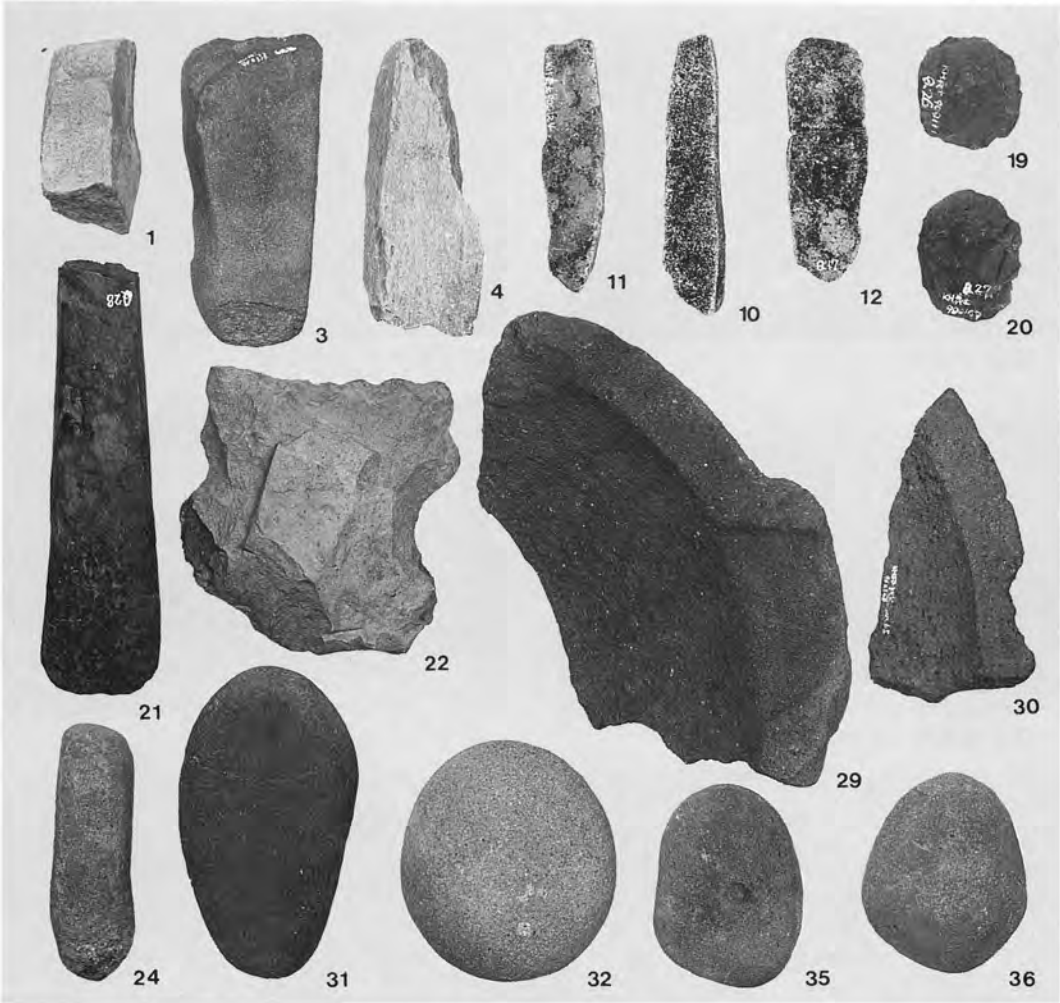
遺溝外出土土器

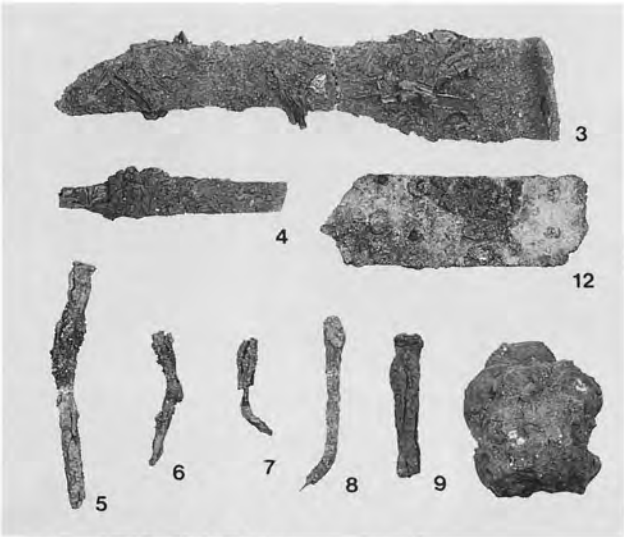
第４号溝出土土器

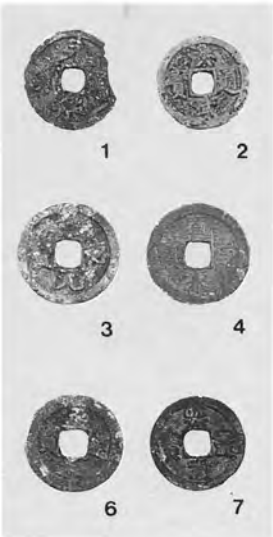


遺構外出土土器

土製品







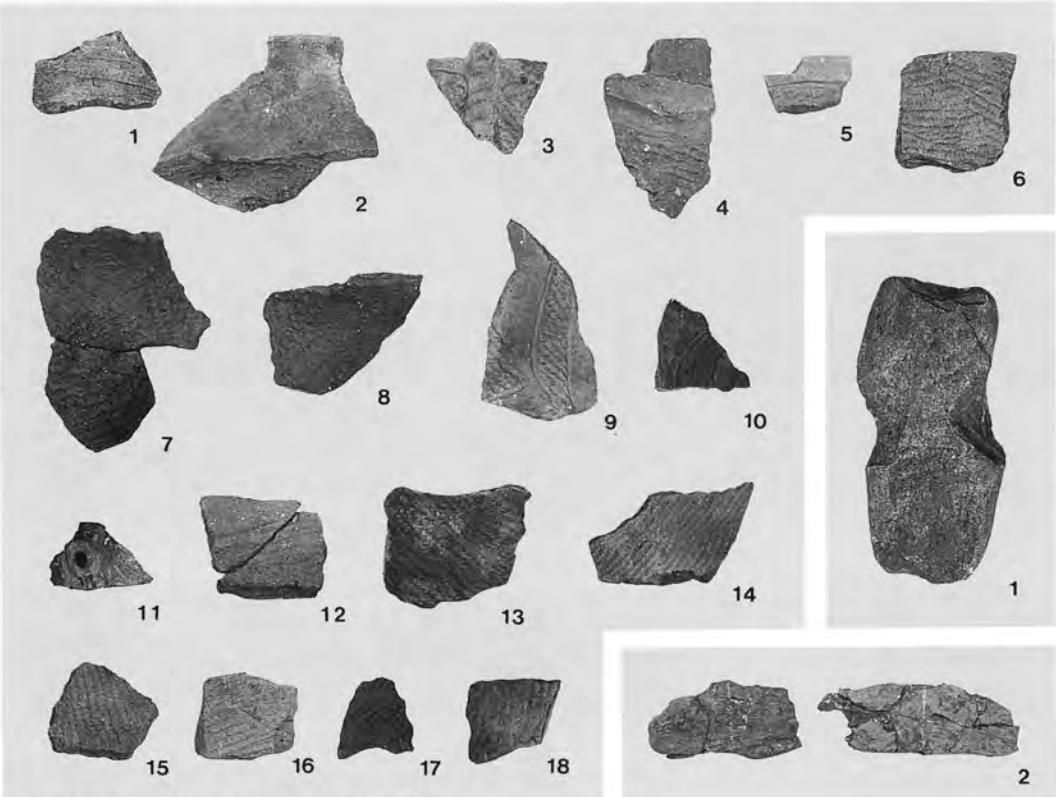
石器・石製品，金属製品，古銭，竹

調査前全景

第11号トレンチ土層

調査後全景(北から)

調査後全景(南から)



トレンチ出土土器，石器，鉄製品

茨城県教育財団文化財調査報告第76集

主要地方道瓜連馬渡線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書

東　原　遺　跡
石伏南遺跡

平成４年３月25日印刷
平成４年３月31日発行
発行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市南町３丁目４番57号
ＴＥＬ　0292－25－6587
印刷　富士オフセット印刷株式会社
水戸市根本３丁目1534－２
ＴＥＬ　0292－31－4241